

城之様子も明ニ分兼候折柄懸念不少奉存候付此許ニ而談合御許被殘置候大炮手大島(久)一手急ニ被差越候様御參談被成下候様奉賴候被差越候様御治定ニ相成候ハ、大炮者於江戸表下直之佛大振二門御買上取計置候付小銃迄持參ニ相成候ハ、玉薬も何も入不申至而手輕ニ打立ニ相成候様御相談被成下候様奉賴候右要用迄如此御座候已上

三月廿四日(同廿九日壬生邸着)

淺井九郎

猶々江城様子追々ニ相聞候趣大同大異大体ハ恭順之様子相違無之候へ共旗下浮浪等之激物絕不申候此鎮定之一條理相立候様申候事ニ御座候桑侯者會に落込之様ニ申唱候處全向島寺院ニ幽居之由小笠原壹州ハ兵隊之下使之者ニ身ヲ隠板倉侯永井殿杯之行末□申候海軍手先月十二日奥州松島に着仙臺より會津に進撃之手立て相見申候白石之城主片倉杯出陣之由仙臺飛脚より相聞申候中仙道手も合戰官軍大勝利敵千計薩八十計長六十計大垣二十斗斥候として柳田と申所へ出張戰候處一戰ニ首級百二小銃之百挺計分取籠斷杯者打捨賀候由何方も官軍勝利奉懶候已上

三月廿五日時機により大旆を東に向け給ふへきを以て諸軍速に忠戦を遂げ四海平定の功を奏す
へしとの旨を達せらる

(京都并江戸返達御用狀扣、王政復古帳)

三月廿五日太政官代より御呼出 御波之御書付寫

今般己ニ御親征 御出輦被遊海軍 御覽之上關東時機ニヨリ直様 輦輶ヲ東海道に可被爲向 思食候右者先般於處々賊徒官軍ヲ抗し盡ク擊破ニ及ふと雖未餘黨彼是屯在いたし居候哉ニモ相聞候ニ付偏萬民艱苦之程被歎 思食候條大總督指揮之上ハ速ニ遂忠戦四海平定奉安 辰襟候様 御沙汰候事

三月

三月廿五日本藩世子護久海軍天覽行幸供奉を命ぜらる

(若殿様左京亮様御瀧坂中日記)

三月廿五日青地源右衛門馬場彥左衛門お達

細川右京大夫

明廿六日海軍爲 天覽天保山に 行幸被爲在候條可爲供奉旨被 仰出候事

三月廿五日

俊政

長門少將殿 津和野侍從殿 安藝新少將殿

俊

細川右京大夫殿 藤堂大學頭殿

別紙

一供奉宮公卿諸侯乘馬之事

但中車之輩可爲步行之事

總裁補弼兩人先後騎供奉之事

一衣躰直垂之事

但花麗之品成丈無用之事

明治元年

但御座船乗込之面々之從僕可爲無用尤別船ニ而御列
外ニ可差出事

一御用物之外又供之儀之左之川岸通行之事

一入夜之節提灯自分腰差其外小丸壹ツ馬提灯壹ツたるへ
く之事

一御用物之外又供之儀之左之川岸通行之事

但提灯兩具船を以運送之事

三月廿五日海軍天覽に關し出整次第、祝砲發砲、艦船廻轉、整列場所、軍列順序等を達せらる
〔若殿様左京亮様御滯坂中日記〕

三月廿五日軍防局より御呼出御書付御渡ニ相成候由ニ而寫六通青地源右衛門場馬彦左衛門より達

御出整相圖之次第

一番貝ニ而又供整列可致事

但草履取一人御門内御玄關前に集候事

二番貝ニ而又供整列可致事

但柵内締切供奉之面々たりとも通行被差止整列之後之痕ニ列ヲ離候事ヲ被禁候間其旨厚相心得其主人々々ニ堅可申
付候事

三番貝ニ而前軍方順次を以行進之事

但於天保山之一番貝整列二番貝ニ而行進之事

肥

後¹²

明廿六日 海軍天覽之節祝砲之儀之肥前に被 仰付候間各藩之船ニ於而之不及放發候事
肥前蒸氣船電流丸を嚮導として祝砲之後彼船一同兵庫之方に航する事

三十分時ニして再ヒ天保山に歸艦碇泊之事

天保山 行幸之節供奉之面々寅ノ下刻攝ニ而卯ノ上刻被爲在 御出整候事

一諸侯供奉之面々侍貳人口附貳人下部一人可爲候事

但船中從僕可爲一人事

殘供之儀之陸行尙 御行列後混雜無之様又供召連候儀之可爲勝手事

一兵隊之儀之中藩以上百人小藩之儀之一小隊可爲事

一御乘船之後者前軍中軍之各順序を以左之川岸後軍同斷右之川岸方 御座船ニ隨從行進御守衛可致事

一御板輿御轎重其外又供之儀之左之川岸可爲候事

攝場順次

前軍兵隊

右御本門前安土町四丁目之事

前軍公卿諸侯

右御堂筋柵門之内御本門方右側之事

中軍先鋒兵隊

右外屋町安土町通方南之事

中軍公卿

右御堂筋柵門之内御本門方左側之事

中軍押兵隊

天保山 行幸御備附

明治元年

先陣
加藤遠江守兵隊

池田侍從兵隊

細川侍從兵隊

加藤遠江守

庭田大納言

池田侍從

勘解由小路辨

柳澤甲斐守

四辻宰相中將

大原左馬頭

裏松中務權少輔
三條大納言

西尾土佐守

福井豊後守

二二
人 人

二二
人人

一
人

肥後兵隊百人
一 艘

長州兵隊百人

明治元年

二
四

一
音

同聲

三
番

七三

中務卿正親町大納言宮坊城頭辨安藝新少將津和野侍從石見千種前少將三石山長門少將將見松室石見

細川	右京大夫	櫛	筈	中	將
細川	播磨磨				
薩州	兵隊百人				
備前	兵隊百人				
中山	前大納言				
堀川	新三位				
富小路	中務少輔				
壬生	前修理權大夫				
坊	城侍從				
御輿	丁十人				
雨皮	持二人				
脚立	持二人				
中山	前中將				
高辻	少納言				

津和野侍從兵隊

長門少將兵隊

森對馬守兵隊

三月廿五日紀州外五藩主に對し右柄川大總督宮不日江戸入城あるへきにより其指揮に従ひ關東奥羽平定の功を奏すへとの旨を達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

三月廿五日太政官代に御呼出 御渡之御書付寫

紀	伊	中	納	言
有	馬	中	務	大
奥	平	大	膳	輔
小	笠	原	豐	千代丸
溝	口	誠	之	進
伊	達	伊	豫	守

大總督不日着府入城ニ茂可相成付而者關東御取締尙奥羽等速ニ平定ニ至り候様指揮可有之候ニ付早々出發東向被仰付候事

但着府之上直様大總督に可届出候滯陣中者不及申途中等總而嚴肅ニ致シ不覺悟無之様可心得事

三月

三月廿五日副總裁岩倉具視三職及び徵士等を會し蝦夷地開拓のことを議す

〔太政官日誌第八〕

三月二十五日午刻上議事所ニ於テ三職及徵士列座蝦夷地開拓ノ事ニ付副總裁岩倉卿ヨリ策問ス

第一條箱館裁判所被取建候事

第二條同所總督副總督參謀等人撰之事

第三條蝦夷名目被改南北二道被立置テハ何如

右史官讀上公卿諸侯徵士答論左ノ如シ

山階宮

重大之事件至要之人撰即今頓ニ難申上候

鷹司前右大臣

過日右地所ニ付建白有之候兩朝臣ヲ御任撰可然ト存候

中御門大納言

蝦夷地之儀ハ重大之事件ニ付御人撰第一ト存候其餘別

ニ見込無之候

萬里小路中納言

別ニ異存無之候

越前宰相

遠地之儀ユエ何モ存知不申總督ハ先ツ仙臺へ被仰付可

然哉ニ存候

阿波少將

明治元年

ヲ以テ費用ニ給シ精々擧拓ニ力ヲ盡シ可然ト奉存候○

副總裁白魯西亞ノ應接ハ何如哉各國同様ニテ宜敷候歟
木戸曰隣境ノ譯柄モ有之候得共條理上ニテハ同シカル
ベシ

神山左多衛

木戸準一郎

總括スルノオヲ御撰舉有之候ハ、則其任ヨリ其土地ニ

志有之者ヲ用ヒ候順序ニ運ヒ候ヘバ開拓ノ道ハ隨テ相
立可申候

溝口孤雲

小原二兵衛

別ニ存付無之候

青山小三郎

荒尾駿河

越前宰相

同前

井上石見

土井能登守

箱館ニ裁判所御取建相成候而モ奥蝦夷ハ程遠キ事ユエ

何レ別段參謀ノ内ニテモ御遣シ相成度人撰ノ事ハ容易
ニ難申上候得共近年岡本文平其地ヲ經歷イタシ候ユエ

議事所ニテ差出候見込書二通

○此外徵士參與十數名別ニ異存無之不及建言

副總裁曰衆議ニ從テ先ツ人撰ヲ決定シ然ル後裁判所取
建追々開拓ニ手ヲ下スヘシ

右ニテ議事終リ衆皆退散ス

蝦夷地御開拓之御僉議ニ付而者先ツ公卿方之内ニテ開拓御篤志之御方ヘ御掛リ被命度此御方ハ御生涯之精力ヲ蝦夷地ニ可被盡御立志ニテ追々其筋之書類ハ素ヨリ其向之巧者ヘ飽迄御講習被爲在度又外ニ大諸侯之内ニテ蝦夷奉行被命

ニ難申上候得共近年岡本文平其地ヲ經歷イタシ候ユエ
議事所ニテ差出候見込書二通
此諸侯モ右公卿ト同様家臣モ共ニ十分ニ心力ヲ盡シ是非成功ヲ期候様有之度候此根底ヲ御確定之上頭撫使ト反覆御討論ニ相成ドコ迄モ朝廷ニテ御後援被爲在候様ノ御廟算相立候上御發遣ニ相成候ハ、可然哉ニ奉存候當時御一新ノ機會ニ任セラレ唯一ト手ノ頭撫使而已御指立ニ相成候而者御成功無覺束而已ナラス魯西亞人難居ノ土地ニモ候ヘハ却テ後害ヲ懼シ候様之儀モ可有之歟ト願念仕候右之外異有無御座候以上

中根雪江

萬事本源ニ不着眼ハ其末起ルトカタシ國家富強ノ本ハ四民各職業ヲ盡スニアリ就中農ハ國ノ本ナルユエニ其本業ヲ盡サシムルノ道立サレハ國士ノ疲弊補ヒガタシ農ヲ起スノ本ハ地ヲ拓キ人民ヲ増殖ニアリ人民ヲ増殖スルノ本ハ事ヲ簡易ニシテ夫役ヲ省略シ器械ヲ以テ民力ヲ扶クルニアリ西洋諸國モ蒸氣器械ヲ發明シ民力國中ニ餘り有力故ニ自然拓地育民ノ業ヲ起シ或ハ萬里ノ外ニ數千人ヲ出シ開港交易ノ大利ヲ計ルニ至ル我國近年内外多事晝夜東西ノ夫役幾千萬ト云コヲ知ラス是等ノ民力ヲ補フノ道立サルトキハ田野ノ荒廢ニ及ブハ又自然ノ理也蝦夷開拓ノハ北陸ノ大事勿論不可忽ノ要務ナレハ其手ヲ下スノ道サマノハ緩急ノ術アルヘタレバ畢竟又内地ノ民ヲ移サレバ成功遂ケ難キ事ナレハ第一内國舊地ノ荒廢セザル様夫役ヲ省略シ器械ヲ製造シテ人民ヲ生スルノ策今日ノ急務ト奉存候事

井上石見

三月廿五日有馬中務大輔書を長岡護美に贈り佛國軍艦演習の見學に同行を誘はれたるに答ふ
〔子爵長岡家文書〕

華服恭拜誦仕候如貴諭暖和益御壯健奉欣賀候扱ハ明後廿七日仁和寺宮様御初五人且宇和島初四人御同行ニ而佛船訓練御見物夫より千歳丸にて御乗船運轉ニ付而之野夫ニも御同伴申上候様且ハ都合も宜敷之御勘考被下候間差支之有無貴答ニ可申上旨致承知候何之支も無御座候間委敷尋度儀も御座候故ニ御留守居御遣シ被下候様ニ希候先之貴答迄ニ如此御座候頼首

即

左 京 亮 様

中 務 大 輔

二白御自愛專一ニ奉存候不備

三月廿五日參謀西郷吉之助徳川慶喜謝罪條款の勅裁を得て駿府に歸り大總督府に報告し遂に江戸城開收に着手す

(防長回天史第六編上)

官軍東征(抄略)

西郷乃チ案ヲ奉シテ二十二日京ヲ發シ二十五日駿府ニ達シテ大總督府ニ報告シ更ニ東下シテ二十九日先鋒總督ノ本營池上本門寺ニ至リ朝旨ヲ橋本柳原二卿ニ傳ヘ以テ江戸城開收ニ着手ス

三月廿五日結城城主水野勝知は留守家臣等己に背きて官軍に應すと聞き江戸より歸り之を擊攘して城に入る

(一新錄探索報告)

辰四月(筆者不明報告書の一節)

一高家昌山藩縁者去廿四日(月)在所出立候處結城の方ニ於たり炮聲頻りニ聞ユと云

(全書)

明治紀元辰六月林玄助東行雜記(抄略)

一結城之城守水野日向守ハ二本松侯之弟あるが養父攝津守妻腹之子當年漸十四歳ある幼君をもりたて下總頭撫之官軍之

引率し廿五日小山驛に至り直ニ結城を攻取り城兵ハ盡く散亂せり

始め日向守小山に來り入國せんと懸合ニ及び其使節略往返されとも其儀不調舊此君ニ隨て佐幕を唱し在江人々之妻子及在國佐幕派を盡捕へて獄ニ入しきをきし事ふれハ密使を遣りて其牢を破しき内より應しき本軍ハ見物之百姓杯を語ひ聲を發しめ會兵援助し虛聲を張りて攻懸りしかば城兵大ニ畏縮し一支も不支擲城て遁逃せりと云

三月廿六日天保山に行幸ありて海軍演習を觀覽し給ふ

(若殿様左京亮様御滯坂中日記)

天保山行幸之事

三月廿六日朝五ツ過出駕安治川橋下より川船ニ被爲召天保山ニ 御着軍艦發炮火薬運轉等 觀覽夕七時分還幸之事
但初ハ萬里丸ニ被爲召候切組ニ候處御船之殊外御懸念被遊萬里丸之擬置天保山迄も御陸行ニ御決之由候處仁和寺宮様且左京亮様ハ軍防之御職掌ニテ御二方様より御引受御盡力被爲在漸安治川橋下より天保山迄之間 御往來御舟ニ相究此方様川船ニ被爲召候事

一一番船 官武御乗組 左京亮様も此舟ニ御乗船

二二番 官家方御乗組

三三番 官家方御乗組

三四番 御(陛下)

五番六番 官家方御乗組之由

右官武とも從臣ハ二人宛之由

明 治 元 年

右之通ニテ御往來共諸藩之銃隊兩岸を押し御警衛申上候事

附薩長ハ種々之浮説も有之候ニ付嫌疑を避川舟之差出不申御警衛之銃隊迄差出候由之事

一天保山に之鳳駕御居り丈ヶ四本柱ニ而藁葺出來御船中之御幕を以三方御圍其側ニ又幕圍有之是ハ日覆も無之官武之御方々御休息有之御筋易之有様奉感戴候事

一鳳駕御着暫有つて御旗之合圖有之夫ヲ受肥前之軍艦大炮連發畢而佛蘭西之軍艦同様連發其時分列藩之火輪船縱横ニ致運轉候由之事

〔行在所日誌第二〕

兼テ用意アリシ各藩ノ軍艦佛國軍艦天保山ヨリ距離一里ニシテ碇泊セリ 駆覽所ヨリ青旗ヲ振り 着御ヲ合圖ス是ニ應シテ海軍惣督聖護院宮同輔若王子同參謀庭田大納言乘込レシ肥前軍艦電流丸ヨリ祝炮ヲ發ス佛國軍艦ヨリモ亦發炮シ 皇帝陛下ヲ祝シ奉ル右相濟ミ電流丸ヨリ答禮ノ應炮ヲ發シ諸艦ヲ誘導シ兵庫ノ方へ向テ航スルコト三十分時ニシテ轉回シ天保山ヘ歸艦碇泊ス八ツ時過 御乗船御道筋御行列初ノ如シ七ツ時還御在セラル

三月廿六日本藩政府は支藩宇細川豊前守上京の件横井平四郎に徵士として上京を命したる事及び山田十郎森木武兵衛召命辭退の事を在京老臣に通牒す

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

以別紙申達候宇土上京之一件 廷中之御模様御伺之處假令一日家來之内人數を連罷登候共秋頃までニ之是非上京無之候而之難相濟勢ニ付一向此節出京之方可然都合之由被仰越候通ニ付早速其筋之取扱ニ及候處急ニ發程之治定有之成丈輕裝ニ而凌雲丸引返之節乘組渡海之管ニ御座候いつ發船之來月七日八日比ニも相成可申候と存候

一横井平四郎出京之一條ニ付而之公子御着後段々御盡力も被爲在候へとも被行兼猶又召之御沙汰有之段々話合候得共別

候
付札 武兵衛列之儀之本文之通ニ有之候處安場山田等御斷被仰上候筋を以御盡力有之度委細之儀之内山又助ら御承知被下度存候以上

三月廿六日 御 中 老
溝 口 孤 雲 殿

米 田 虎 之 助 殿
三 宅 藤 右 衛 門 殿

三月廿六日水戸藩士故武田耕雲齋の同志等兵を率ゐ反対派の市川三左衛門佐藤圖書朝比奈彌太郎等六百餘人會津へ逃走せしを以て追蹤して奥州白川驛に至る

〔一新錄皇令〕

奥州白川宿扇屋佐平太より三月廿八日申刻出四月二日到着出翰之寫並仙臺表より之書狀共
奥州白川に辰三月廿四日酉刻着水戸天狗勢先觸

一大 炮 四挺	十六人	一小 標 持	一人	一旗 持	二人
一金 鐃 持	二人	一彈 藥 車 三挺	十二人	一彈 藥 箱 一ツ	二人

一玉葉入長持	三棹	廿四人	一兩	掛	三荷	六人	一鶴籠	長持	三棹	九人
一蠟燭箱			二丈	一長	持	一荷	四人			
右者一番手備										
一旗	持		一人	一大	炮	四挺（人數落）	一小標	持	一人	
一彈藥車	四輛（人數落）			一金鼓	持	二人	一水桶	持	四十三人	
一駕長持	五荷	十五人	一兩	懸	三荷	六人	一蠟燭箱	一人		
一挑灯持			一矢倉方	七十人			一馬	五疋		
右者二番手備										
二口メ人足貳百二十一人			馬九疋							

水戸殿家來市川三左衛門佐藤圖書朝比奈彌太郎等年來奸惡之處業有之今般依朝命嚴罪可申付之處多人數引連奥州會津筋に脱走之趣相聞候付右追捕ニ水戸殿人數千二百人餘罷出候條前書之人馬宿々無遲滯差出可給候以上

三月廿三日イ

水戸殿目附方

常陸德田より奥州若松迄

右驛々問屋中

泊り付右之通

廿四日伊香廿五日棚倉廿六日白川廿七日長沼廿八日初雪三番手先付も廿六日到來之趣此寫者差上不申候然者水戸蓋物勢是迄水戸城ニ罷在候處上筋より多勢之天狗勢水戸城ニ下向之趣ニ付蓋物勢先日棚倉通矢吹通にて會津に六百人程懸込ニ相成右勢水戸三拾五萬石之御量付並御軍用金不殘持參之由右ニ付天狗勢追討ニ繰出ニ相成候前書先觸之通廿六日此後如何相成候此段申上候先之取急キ跡之成行又々御注進可申上候以上

三月廿八日申中刻

〔一新錄探索報告〕

辰三月廿八日付白川表より來狀寫

水戸様御家來正義之者は迄水戸城ニ罷在候處此度京師より天狗勢多人數水府に下向之趣ニ付右正義之家來先日棚倉通り會津表に凡六百人程脱走相成候然ルニ右家臣ニ而水戸様御高之御朱印御黒印等御軍用金不殘持參候由右ニ付天狗勢操出しこ相成一昨廿六日一番手ニ而凡千二百人餘昨廿七日八百人余り馬貳拾疋當地に操込ニ相成右天狗勢より會津に使者を以掛合候處脱走之者共越後へ罷越候趣申答ニ相成候事故天狗勢より越後國筋へ罷出度御領中御通し被下候様御役方に懸合候處領分取締ニ而去ル十九日より通行留めニ相成候間一人たりとも通行難相成旨相答候由右ニ付當表混雜不可謂此末如何成行可申哉深心配仕候尤子供家族等ハ夫々近在に相運ひ申候

三月廿七日仁和寺宮嘉彰親王、東久世通禧烏丸光徳萬里小路博房毛利廣封長岡護美等と佛國軍艦に抵り調練を觀覽せらる

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

(三月廿九日付米田虎之助より在京溝口三宅へ通報梗概の一節)

佛蘭西軍艦調練之事

仁和寺宮様東久世様烏丸様万里小路様長州世子宇和島老公左京亮様三月廿七日運上所に御捕夫より御舟にて佛之軍艦ニ御乗組大小炮發御覽夜四時御分御歸之事

但運上所へ御捕之所に佛之川蒸氣船御迎ニ來候此處より宮様御初從臣二人充被召連残リハ都而被殘置御七方とも三

艘ニ御乗組御從臣ハ二艘ニ乘組右三艘を迎船ニ而引キ本船迄罷越速成事陸を走り候而も追付不申程ニ有之候事一本船ニ而ハ先ツ船將部屋に申受種々談話夫少し廣キ處ニ而類を盡候而之應此席ニハ船將並名高きモンブラン外ニモ夷人一兩人亭主方ニ而宮様初官家武家陪臣ニ而ハ虎之助五代才助シツボク臺一ツヲ術環無端相團酒ヲ呑肉ヲ食海外之奇説珍話上下無類之佳興ニ入數刻ヲ移候事

一右畢而看板上ニ出船之兩方ニハ十門計之大炮ヲ連發二十丁内外之處ニ天幕ヲ張リ其印ニ悉ク着丸其内縋一發少し脇に離レ候由夫より船中ニ而銃卒繩廻し是又連發亂發等もいたし何度歟も司令之整嚴手續之熟練感心無申計候事一右相濟候處ニ而久留米之蒸氣船に君公御待受御案内有之候付宮様御初御乗移り此時佛之船將並モンブラン外ニ英人も兩人罷越爰ニ而も色々御馳走夫より御歸ニハ君公方計二三艘ニ御乗組ガツガツニ被爲入既ニ萬里小路様ハ天保山方御上陸從僕さへ無之一騎ニ而塘筋御歸左京亮様御舟之上手より長岡ノと御呼被成候付ヲ、イト御答被成候處天保山ニ而久留米之馬ヲ奉歸候ト御言捨其儘御出被成候由とふた様も運上所迄ハ御家來ふしニ而被爲入候全躰御節易ハ申ニ不及始末之御親睦何之御隔意も不被爲在候事

〔若殿様左京亮様御滑坂中日記〕

三月廿六日

一左京亮殿明日正四時之御供捕詰懸御供御乗切ニて運上所迄御出夫より御船ニて軍艦爲御覽被成御出苦候段御用入より

達有之候事

三月廿七日本藩京都留守居池邊惊右衛門は去る廿四日の令達に依り我藩及び觸下各藩の在京人員調書を辨事役所に進達す

〔京都并江戸返達御用扣〕

四月五日村上より同廿日着 道家松野當り(抄略)

一先達而御布告ニ相成候當時在京人數付之儀池邊惊右衛門名元之書付ニ出來先月廿七日辨事御役所に差出候右寫一通差上申候(書付寫一通は次の王政日新錄の池邊)

〔王政日新錄〕

覺

惣人數

一九百三拾三人

内

五百拾六人

關東出兵

五拾人

大和警衛

百人

横濱警衛

残而

貳百六拾七人

一拾貳人

當時在京寺町御門警衛代り人數共

一六門

大炮

右在京之人數等如此御座候以上

細川越中守内

三月廿七日 池邊惊右衛門

(付札)本文之外銃隊役人共ニ左之通下坂仕候

四百四拾人

右京大夫供

三百三拾八人

左京亮供

一貳拾五人

銃隊

一三 人 役人

三四九

一大炮持參無御座候

但何方に茂出兵警衛向無御座候

右在京之人數等如斯御座候以上

大給左衛門尉家來

三月廿五日 谷口惣助

一壹人 覚

一四人 備頭

一三拾五人 物頭

一四拾七人 土分

七八人 足輕

八人數八拾七人

内

士分拾人

足輕九人

物頭四人

士分貳拾五人

足輕三拾八人

殘兵無之

右同斷

大門

大炮

正親町中將殿御警衛出兵

御旗持並右御同所殿御警衛出兵

嵯峨口柵門御警衛操廻シ相詰申候

右同斷

足輕三拾八人

右同斷

大門

大炮

三月廿五日 白井直之進

一八拾人 覚

一拾三人 役人

一二門

大炮

木下鐵次郎内

内

内

内

三月廿五日 相良遠江守

三月廿五日 但何方に茂出兵警衛向無御座候

右在京之人數等如斯御座候以上

右在京之人數等如斯御座候以上

三月廿五日 中川修理大夫

一内貳人 小者

一内貳人 步卒

一内貳人 侍

一内貳人 者

一内貳人 残兵

一内貳人 差出居候

覺

惣人數

一貳百六人

銃隊

五拾八人

三月廿五日

殘而

百四拾八人

當時妙心寺塔頭智恩院に在留

一七拾人

役人

一四門

大炮

右在京人數如斯御座候

久留島伊豫守家來

島田泰雄

伊豫守藩之

三月廿五日

島田泰雄

右之伊豫守歸邑之節當表に残シ置候惣人數
右爲御警衛德大寺様に差出居候

一小者

十人

一土分

一人

内

一輕卒小者

五人

右之通ニ御座候以上

義之先頃御届申上置候通誠ニ少人數ニテ平生兵隊を立置候儀も難仕臨時分課處置仕候且先頃豐後故郡代支配取締被仰付人數召連歸邑仕候大炮之儀遡先頃御届申上候通ニ而當表ニ之一門も用意無御座候爲御警衛差出居且残り人數別紙之通ニ御座候以上

以上

稻葉右京亮家來

三月廿五日

松下中務大輔

覺

一四拾人

銃隊

物人數

一四拾人

役人

一四拾八人

一二門

大炮

拾壹人

足輕

三月廿五日

毛利伊勢守

役人共

役人

貳拾五人

銃隊

三拾五人

役人

五人

銃隊

右當時在京

貳拾五人

銃隊

役人共

五人

銃隊

右當時在京

貳拾五人

銃隊

以上

細川豐前守家來

三月

岡音五郎

三月廿七日我藩政府は徳川慶喜の我忠言を容れて江戸開城謝罪謹慎の意を表したるに猶ほ官軍進みて之を討伐するは我周旋の勞空しく前言を食むの恐あれは其筋に寛典の處置を乞ひ信義を天下に失はさるやう盡力すへしとの旨在京老臣に通牒す

〔一新錄自筆狀〕

以別紙至密申達候澤村脩藏汽船々着關東事情等爲て承り候内徳川家謝罪之一條初發志方司馬助御直書持參登京之處既ニ御親征被仰出五畿七道軍旅之用意茂御沙汰有之候付御狀者朝廷に御指上ニ相成候得共御返書ニ難被及段右司馬助を以被仰進左候而鳥羽ニ而手を出候前後之境云々を以御申譯者相立申聞敷實々御謝罪之恩召ニ候ハ一刻も御城御立退兩山之内ふとに御蟄居最前御届兼之次第幾重ニも被奉恐入如何様とも朝廷より御指圖之通御心得之覺悟ニ而重々御愼有之日光宮様歟和宮様御取次ニ而只管御詫御歎願ニ相成候ハ御宥恕之筋ニも可相運哉之趣委曲御書取をも御渡司馬助へ御含一刻も稜目を被立謝罪之筋ニ相運候様内分御盡力之處ニ御評決之趣ニ候處右之次第御留守居差入周旋御立相運ひ猶御直書持參澤村修藏罷登越邸等ニも御直書ヲ以御歎願之處從朝廷者筋違ニ付總督府に被申出候ハ思召之旨茂可有之との趣御差圖ニ相成候山ニ而朝廷に者一切御取舉無之出向之惣督に被任置候御模様ニ相聞東征之官軍者勢ニ乘し既ニ品川邊迄も押詰於關東者表面恭順を盡軟弱之軀ニ候へとも萬一謝罪相立不申官軍暴行も有之候ハ必死防戦之向も可有之歟ニ而窮鼠猫ヲ喰之恐無之とも被申聞敷第一者御國より之御周旋ニより直様御開城ニ而上野に御謹蟄眞實御謝罪之筋も相立不申候ハ忽チ天下之紛亂も相成却而江戸城ヲも被乗取萬一徳川家滅亡ニ及至候様成行候而

者前言ヲ被食候形ニ相成從來御信義之結局相立兼可申歟も深奉恐入候尤寛大之御趣意左京亮様具ニ御舍御上京之御事ニ付嗣君御共々ニ專其筋御周旋可爲在者奉恐察居候へとも實ニ天下安危之境御國之御名節ニも係候儀ニ付今日聊天下ニ御信義ヲ不被失様御盡力被爲在度尊慮之旨ニ被爲在候條於御地精々御熟議ヲ被凝可成丈者右御趣意相立候様猶更御努力之程懇請仕候事ニ御座候以上

三月廿七日

惣御連名

溝口殿
米田殿
三宅殿

三月廿八日神社の稱號に佛語を用ひたるもの及び佛像を神體とせるもの等を調査せしめらる
〔王政復古帳〕

一中古以來某權現或ハ牛頭天王之類其外佛語ヲ以神號ニ相稱候神社不少候何全茂其神社之由緒委細ニ書付早々可申出候事

但勅祭之神社御宸翰勅願等有之候向ハ是又可伺出其上ニ而御沙汰可有之候其餘之社ハ裁判鎮臺領主支配頭等ニ可申出候事

一佛像ヲ以神躰致し候神社ハ以來相改可申事

附本地杯ヒ唱佛像ヲ社前ニ掛或ハ鰐口梵鐘佛具等之類差置候分ハ早々取除可申事

右之通被仰出候事

三月

御奉行衆中

三月廿八日

御留守居中

御奉行衆中

三月廿八日本藩世子護久及ひ弟護美は時勢に鑑み兵制改革の急務たる旨在京在阪の重臣に訓諭す

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記、若殿様左京亮様御滞坂中御國京都仕懸返達上帳等扣〕

御家之兵制者舊來相定候趣茂有之候得共即今海内何方も致一變候折柄我藩而已依舊押移候而是徃々如何成行可申哉於御國者究而御下知之次第も可被爲在差寄於京攝卒以下之者共銃隊ハ申ニ不及土銃隊をも取起上下一般ニ相整服合も簡便第一ニ相成候様致度頭々及其筋之者にも追々申聞候得共兎角奮興之場合ニ至兼實ニ不堪煩悶候其方共儀ハ我等兩人之心中茂深相心得罷在候事ニ付猶此上精々申諭一刻も右之趣意相貫候様可致盡力候事

三月廿八日

左京

右

溝口孤雲殿
米田虎之助殿
三宅藤右衛門殿

三月廿八日在坂本藩老臣米田虎之助は兵制改革に關する藩世子等訓諭の趣意を藩士に周知せしむへく小姓頭に示達す

〔若殿様左京亮様御滯坂中日記、若殿様左京亮様御滯坂中御國京都仕懸返達上帳等扣〕

癸丑度外國使節江戸入港以來海外之模様逐年相分就而ハ列藩何方茂渠か長器良法ヲ無油斷心懸當節ニ至候而者大概西洋之兵制過半相開殊に先般若殿様御着京即下より京攝之間數日之戰爭引續三道出師之様子等現實被遊御見聞候得ハ猶更其筋御慕之思召ニ被爲在候内左京亮様に茂御上京有之御同方様ニハ從來其邊之儀専ラ御心ヲ被爲盡候上即今軍防之御職掌ヲも御勤付而者 皇國全體之兵制をも始末御研究之折柄御自國之儀當時之儘ニ而ハ 朝廷に被遊御對候而も難相濟且往々社稷之盛衰存亡ニも致可關係ト御二方様共不一方御憂慮被爲在差寄於京攝士席以上以下共都而銃隊ニ御組立被遊服合も簡便一式ニ被仰付度一圖ニ御世話被爲在候得とも兎角思召通被行兼候處より皆共に改而御直書を茂被下置候との旨ニ而猶委敷御意茂被爲在候間則寫之相渡候條篤ト可有拜見候然處御家中一統未ハタ不奉承知向茂可有之今度於御内輪ハ地旅之御政事共若殿様に被遊御委任旨被仰付越候處如是時體ニ差臨止ヲ不被爲得御取起ニ相成候耶内之一急務さへ御届兼被遊候而ハ太守様に御申譯も不被爲在候間未々ニ至迄右御配慮之次第ハ申ニ不及天下之形勢を茂能々相辨一刻も御直書之御趣意致貫徹し候様心懸可申候尤如何體ニも御受難申上子細も有之候ハゝ其趣有筋書付を以可申出旨を茂被仰出候條奉得其意組支配方に茂屹ト可被相示候以上

三月廿八日

〔若殿様左京亮様御滯坂中日記〕

以別紙申達候銃隊御取起之儀付而從御二方様御直書被成下候付寫之覺書相添昨日頃々に相渡候且又浮說流言等有之心得方之儀付而も昨日一統及達候則右御直書並覺書等寫二通差進候間於其許も例之趣を以夫々可被有御取計候此段爲可申達如是御座候以上

三月廿九日

米田虎之助

溝口孤雲殿
三宅藤右衛門殿

三月廿八日東海道先鋒總督橋本實梁進みて鎌倉に至る

〔安田家明治元年關東征伐事件覺書〕
〔記録〕三月廿八日橋本總督藤澤驛晝食ニテ鎌倉へ轉軍アリ

三月廿九日朝廷土佐藩に對し佛國への償金拾五萬トルの内先づ五萬トルを支拂ふべき旨を命ぜらる

〔一新錄探索報告〕

聞取書

一土州カ佛國に償金之儀一旦之年賦ニ茂可相成様從朝廷佛國に被仰向若又不承知之節之從政府差出被置左候而土州カ政府に年賦ニ而相納候様被仰付哉ニ御座候處去月廿九日嚴重之 御沙汰有之唯今至急ニ五萬トル差出シ九月五萬トル十二月五萬トル都合十五萬トル當年中ニ差出申候様被仰付候へ共何分即今之五萬トルさへも至急ニハ出來兼候段歎願差出ニ相成居候様ニ御座候

右土州林龜吉ヲ承ル(以下略)

四月十一日

首

藤助

〔全書〕

(四月六日鹿子木大太郎外一人より大坂及び熊本隠密間宛書類の一節)

先達而土州人佛人を殺害之末十一人割腹いたし候通候處此間田尻方(田尻源) 大太郎杯士人ヒ宮川ニ而出會右割腹之一

明治元年

三五七

條咄有之内表分ニ唱候儀ニ者無之候へともどこともおく怨言相見其節佛へ御應接之東久世様字和島老候杯に之尤宿怨を結居候趣ニ相見候由又昨日之飮肥藩之人甲村休吾岡松方へ罷越段々咄有之近來ハ佛人右殺害之一件申立二十五萬トル償金出し候様申出候へとも右丈ヶ出し候へハ土州之國力忽盡果候付十五萬トルニ相斷候由之處左候ハ、右之趣本國へ申通歎願有無之處其上ニ而返答いたし可申ミ申出居候由右之割腹ニ而事濟候儀モ相心得居候處實ニ意外之咄有而實否如何哉ト奉存候甲村考察ニ而ハ今度公卿方之内箱館行有之由ニ付自然ハ佛人申出ニ託シ右之用途金ニ相成候ともニ而之無之哉との見込之由是又信用難致説ニ而御座候

〔子爵長岡家文書〕

(封筒)長岡公子

容 堂 拜復

貴東拜誦仕候爾來御安全奉大賀候先日ハ久々ニ而得拜顔不相替酒間之議論老人輩群易閉口何レ御上京迄ニハ再會ヲ期シ度候乍去此破屋中ニ而ハ不都合故三橋樓ナド可然有馬ヲ相客ニ呼候テ足下ノ固陋ヲ破ント欲ス如何呵々○拙書御催促扱も閉口之至此頃自朝廷堺之十五萬金ヲ催促甚タ迷惑之處又足下ニ拙書セガマレ困入申候宿約故認差出候心得ニ御座候先ハ貴答旁如此御座候頓首四月念一日

長 岡 公 子

侍 史 (滞坂中の書なり)

三月廿九日在坂本藩老臣米田虎之助は天保山行幸の後人心漸く安定せし趣在京老臣に報す

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

以別紙申達候鳳輦御着坂後何之御異狀も不被爲在奉恐懼候當表ニ而も先達而以來種々浮説流言等有之就而ハ一統之人心も不穩其邊之儀薩長ニおるては猶更深御心を被用既に天保山 行幸之節之兩藩共川舟さへ不被差出程ニ候處右

行幸茂首尾好被爲濟此御一舉ニ而何となく人心致安堵早速より泰平之氣分ニ移候由ニ御座候(中略)
右之趣爲可申達如是御座候以上

三月廿九日

米 田 虎 之 助

溝 口 孤 雲 殿

三 宅 藤 右 衛 門 殿

三月廿九日本藩副奉行木村得太郎親征中軍監兼務を命ぜらる

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

木 村 得 太 郎

三月廿九日行在所辨事局ニテ仰渡ノ件

右者 御親征中軍監兼勤被 仰付候事

三月廿九日舊幕大目付妻木多宮江府の人心動搖するを憂ひ慶喜の恭順に對し寛大の處置あるへ
く惣督府より達せられたる旨を示達す

〔安津免久佐〕

大監妻木多宮殿府に罷出候節被仰渡寫

慶喜去十二月以来奉敗朝廷剩兵力を以犯京都連日錦御旗ニ發炮し其罪重大タルニヨリ爲追討官軍被差向候處慶喜恐入恭順擅寺ニ閉居謹慎いたし此上如何様ニ被 仰出候共可奉畏旨段々家來共とも同様歎願申出候上ハ恭順之趣ニ相聞候間寛大之思食を以 御沙汰之節先鋒以惣督 勅諭被 仰渡候間早々歸邑いたし 御沙汰可相待大惣督官被仰候此段申達候事

三月廿九日

大目付

妻

木

多

宮

三月晦日本藩主議定參與等奉職の藩は貢士を出すに及はざる旨達せらる

(王政復古帳、京都江戸返達御用狀扣)

三月晦日本太政官より御呼出御渡之 御書付寫

各藩より貢士指出候御趣意者先達而 御沙汰之通ニ候處主人議定職或ハ參與職等被 仰付置候藩々者勤役中其儀ニ不
及候尤在勤中タリとも貢士指出度輩者勝手次第ニ相心得候様被 仰出候事

三月

三月晦日本藩京都留守居林新九郎末家細川利永歸國願の添書を提出す

(京都并江戸返達御用狀扣)

四月五日村上より同廿日着

末家細川若狭守儀大坂 御行在中奉伺 天機度段之同人より奉願候通御座候然處若狭守儀之是迄江戸定住ニ付此節養母初家族並家來之者一同彼表引拂同人儀之依 召直ニ上京仕家族等者統而國許ニ爲引越申候勿論在所も未取究不申就而之住居向等茂無之儀ニ付差向候御用無御座候ハ、奉伺 天機候上一先賜御暇候様奉願候左候ハ、一應罷下住居向等手配仕せ度此段御内意奉願候以上

細川 越中 守 内

林 新 九 郎

三月廿九日

(四月三日指令)

汰之旨可相心得候事

(慶應三卯五月起筆)

(林新九郎日錄)

一 同(三)廿九日 若州公下坂之儀ニ付二條ニテ廣澤兵助(内國事務懸)面會談合御歸國之儀添書差出候管ニ申談

一同晦日右添書差出願濟才足之儀兵助ニ申通

三月晦日在京本藩重臣は關東出張副奉行淺井新九郎の請求に據りて大砲手増遣の事を在坂老臣米田虎之助に謀る

(若殿様左京亮様御滞坂中日記)

四月朔日

京都より之自筆狀

濱治毒平詰代相濟今日爰許被差立候付致啓達候關東出張之軍兵甲府に引分東海道之御人數減少いたし候間大砲手ヲ被差越候様申來候次第ハ別紙之通ニ御座候態々右之通申來候末御人數差遣不申候而ハ先手戰士之氣受も如何可有之哉其情ニおるてハ被遣度候得とも先日横濱ニ御人數被遣候節邸内之御人數不足ニ及候趣を以大和之御人數ヲ爲引取此節ハ大砲手ヲ數十人關東に被遣候而ハ前日申出候事對 朝廷食言いたし候筋ニ相成且又關東ニおるて御人數引分ニ相成候へハ其跡ニ之直ニ御人數繰出候と申儀ニ候ハ、御國之御人數之無限有之候と申ものニ而猶此上ニも所々ニ御人數爲出計ニ相成候様存候此段爲可申達如是御座候以上(本文中別紙とあるは前に掲げたる三月廿四 日付淺井新九郎か在京奉行に宛たる狀なり)

明治元年

三六一

三月晦日
米田虎之助殿

三宅藤右衛門
溝口孤雲

三月某日本藩平井城之介京都に於て岡松辰吾の紹介により米澤藩士雲井龍雄飫肥藩士甲村久伍と交を結ぶ

〔水雲事蹟草稿〕

中村六藏自著
我熊本藩では、藩主の舍弟長岡左京亮、兵を率ひて上洛することとなり、田尻彦太郎も亦從軍の命を受く、城之介（平井城之介にて中略）以爲らく、田尻先生が、先きに余の洋行を阻礙せられたるは、蓋し此事あるが爲めならん、然らば此機に臨み、猶豫すべからずと（中略）

因て城之介は直ちに田尻彦太郎に依頼し、藩政府に從軍を願へり、然るに軍隊の事は、豫て夫れノヽ編制組織あるものにて、願ひ出でたればとて、許可せらるべきものに非すとの事にて、止を得ず、渠は田尻彦太郎の從者の名義にて從軍することになりたり（中略）斯くて、長岡公子に引率せられたる、一軍の將卒は、勇みに勇んで熊本城下を出發し（中略）慶應四年の二月（晦日）無事入洛して、壬生の肥後藩邸に達せり、

〔全書〕

當時壬生の藩邸に、藩の公用人として、今の外交官として、岡松辰吾なるものあり、世に所謂齋谷先生是れなり辰吾は其學和漢を兼ね識時勢に通じて汎く當世に名を知られ諸藩より京師に集るもの必らず辰吾を訪問す殊に飫肥藩の甲村久伍米澤藩の雪井龍雄此二人者は最も屢しば來訪したるものなり（中略）

或る日城之助は辰吾の紹介に依り甲村久伍米澤井龍雄に面會し一見奮知の如し而して意氣投合爾後互ひに往來し遂に断

金如蘭の友とあれり、時に城之介は當年廿三龍雄は廿五久伍は廿七八故に城之介は久伍と龍雄に兄として交はり龍雄は久伍に兄として交はり萬事久伍に相謀かれり

因みに龍雄の人と爲りは世上既に定評あるが如し故に多くを語らず翅に一言其眞相を紹介せん——龍雄は幼名中島猪吉其十七歳の時同藩の士小島氏に養はれて小島辰三郎と稱す渠が徵士として在京中は遠山翠と稱し而して雲井龍雄は後年渠の改名せるものあり

而して龍雄は——身長五尺一寸五分（城之介と幾んど同一）内外中肉にして白皙顔面は頬下絞や長く廣額厚唇にして眉目清秀風彩女子に近し而して、正直眞率學植豊富詞藻縱横贍略躍如たる勤王憂國の士なり久伍の容貌は龍雄と相反す久伍は——龍雄よりも丈け少しく高く緒顔にして相貌は非凡にあらざれども冷として威厳あり而して、沈毅寡言溫厚勇烈勤王憂國を以て自から任じ深謀遠慮の態度あり是れ龍雄が兄として相謀りたる所以あり

而して甲村久伍の出所は之れを審らかにせず只だ安井息軒の門に學び息軒の推薦に依りて息軒の生國たる飫肥藩に仕へ同藩の徵士として當時不法官の名に應して滞京中ありしことは龍雄と同様ありしみり

〔三月某日鍋島直大横濱裁判所副總督に任せらる〕

〔京都赴江戸返達御用狀扣〕

（四月五日村上より同廿日着の内）

肥前侍従様々々、侍従様今般横濱裁判所副總督被爲蒙 仰難有思召候々々、被仰々々、

三月

三月某日津輕藩士西館平馬我藩世子護久の意を受け歸藩して其主津輕承烈に勤王を勧む承烈素より其志あり心を決し力を官軍に致す

〔小橋記録〕

三月日不奥州津輕藩主津輕承烈承烈は護久の弟に來り護久兄弟に謁して承烈の處置を問ふ護久兄弟大義名分順逆の理を述へ速に歸りて承烈を補け勤王の實績を顯はすへきを論示したり平馬謹みて領承し兼行歸藩して具さに護久等の論旨を告く承烈亦自己の素志と符するを以て斷然決心後奥羽二十八藩合從して大に官軍に抗するの議起るに際し承烈獨り之に應せず孤立して力を官軍に致せし所以なり(本文中所謂る京師本藩邸にて護久等に謁)せしものならば三月廿日前の事なるべし

四月朔日東海道先鋒兼鎮撫使總督橋本實梁池上本門寺に至り同副總督柳原前光三田有馬邸に入る

〔一新錄探索報告〕

江戸聞取(抄出)

一橋本様四月朔日池上本門寺に御入込
一柳原様同日三田有馬之屋敷に御入込

四月十一日

首 藤 (敬助)

四月本藩砲術師範大島久平の一隊に大坂より關東へ出張を命ず
〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

四月朔日

覺 御奉行に

大島久平門弟共

右者明後三日此許被差立關東に被差越候條此段可被達候以上

〔王政復古帳、若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

先月晦日之御用狀相達淺井新九郎紙面被差越委細被仰趣致承知早速御二方様達御聽候處餘計之御人數分隊差出其跡本陣ニ手薄之譯を以態々申越殊ニ大島久平一手ハ根元一番手之殘人數ニ茂有之彼是一兵も不被差出候而ハ彼地氣受ニも差障可申且惣帥權茂不被立下候而之難相成旁久平門弟共關東に出張被仰付旨御沙汰被爲在候付及其達明夕此元被差立管ニ御座候尤右之通候而ハ御元御唱合之通奉對 朝廷食言之形ニも候得共万一千尋も有之候ハ、重疊無餘儀譯筋ニ付御二方様御供之内々無理ニ縁合被差出候と申筋ニ候ハ、左迄御不都合とも有之間敷と唱合候事ニ御座候右付而御道印章御賄等之儀ハ御奉行御留守居カ申向候由ニ而明日中ニ之夫々時明候様御差圖有之度存候以上

四月二日

米 田 虎 之 助

溝 口 孤 雲 殿

三宅 藤右衛門 殿

四月朔日箱館に出張せる本藩更員安田助一彼地の情況を京都熊本の同僚に詳報す

〔一新錄探索報告〕

愚札拜呈仕候平安略小子儀無異儀航海仕先月廿七日迄之處そ從敦賀早率航海之次第得御意置候通ニ御座候時節柄時躰忌諱ニ觸候儀之差省キ旅中カ之片音ニ付略呈仕置定而相達爲申ニ而可有御座候先月朔日兵庫乗船同八日下關入港同十四日申ノ中刻同處開帆同十七日雲州鶴浦^{鶴浦}に碇泊同廿日拂曉能登沖通船翌十二日佐渡沖通船同十三日夜八時過當港碇泊兵庫乘船カ都合四十三日振り無恙揚陸仕候間乍憚左様御休意可被成下候當港之形勢も一旦之幕吏ハ既ニ逃遁之勢ニ相見越船入港此誠船ニベニ候へ之 勅使之先鋒舟を港内相唱幕吏も大ニ膽を冷し候山市中者殊之外色を直し是迄幕吏之惡政を脱し實ニ踊

躍之躰ニ而無事之思を取候由先日之既ニ市中燃拂惣人數引揚之議も被行歩兵之内付火杯致候向茂有之當時之市中申談右等暴行之者有之候ハ、取押可申格^一、固ニ而町々に町人數打寄居夜廻杯致候位之事ニ而誠ニ笑止千萬之有様ニ御座候津輕陣營ニモ翌々日罷越此節入港之大意を伸候處大ニ安心之模様ニ相見ヘ申候留守居杯も専ら越肥兩國之人數 勅使之先鋒として入津之趣探索書杯手ニ入候山ニ而甚た懸念致居候由誠ニ氣之毒之有様²、而精兵三四十も居候ハ、當港掃攘米穀之出納等取調穩ニ引渡相濟候上引拂之申談ニ相決候由當港從而市中茂略買筋等一切被行兼只々一日之安を計り候模様ニ相見米穀等仕入候杯之儀絶而無御座米杯も殊之外價下落入港即下ハ下直ニ而も買入候向無之此節大坂³積込御米捌方差支大ニ迷惑之次第二御座候併此儘滯船罷在候而之彌以船中之雜費相崇候付御米半高程相拂歸帆之心組ニ御座候此後定價ニ歸し候上凌り御米之捌方取計之唱合一決旁此節矢島源助陸行ニ而關東之成行實見且當港之模様等茂言今少し實見仕度且右御米捌方之一條茂甚た懸念仕候付旁今暫ク當港へ逗留之談合ニ相決賄足ニ分袂仕候筈ニ御座候幸上林熊次郎同行ニ付商法筋ハ同人專關係無油斷至急ニ捌方之取計仕候ニ御座候主用之當處商法筋も當時之形勢ニ而些ト不都合之姿ニ茂御座候得共ケ様之儀之古今未曾有ニ有之當時之有形を以成否之難被定段々當處且奥地迄之大概四國九州を合候位之土地柄一切漁獵のミを主とし有用之諸物皆諸國ニ取り候處柄ニ而御國產物等之多々當處へ入用之事ニ付運輸⁴たし候ハ、究而御國產繁茂し御富國之一助ニ茂相成可申相見申候尤御米杯之諸方に御賣捌之道相立候ハ、坂地之米價ニも關係往々餘程之御國算相立可申見込申候い才之儀之安原列言上可仕⁵略仕候當地之殊之外繁榮之土地ニ而ロシヤ館英商館杯茂追々相開ケ商家杯茂倍ニ及候由夷館に茂追々往来いたし少々宛之夷情茂搜索出來横濱杯古之追々夷船往來いぬし關東之模様茂ソコノ⁶聞及候得とも夷人談ニ而終始貫兼候儀も有之錄上いあし候筋ニも至り兼

申候關東之模様之定而鹿子木(大太郎)氏より報告可有之⁷略今日之時勢ニ而之京様熊様彌以可被成御繁勤何卒此儘平治ニ至れかしと奉祈候或人ロシヤ教師ニ對し此節幕府追討ニ至ル之實情を詳々諭解ス教師初而合點之躰ニ而申實ニ左様ニ候ハ、皇國挽回之氣運可申此上之彌以幕府之本⁸諸藩共一向公平之心を以處領を 天朝ニ歸し本⁹是迄之通天子¹⁰可與儀ニ決候ハ、矢張其儘領し可然ロシヤ杯茂右之襄幣を變し今日之形勢ニ至り居日本今日干戈を不用右之運ニ至り候ハ、萬國茂不及治躰¹¹相成誠ニ目出度次第實ニ希望之至ニ候段尊いたし候由英杯之政事も寸斗褒メ不申由ロノコンシユル之久しく江府に逗留いたし居三月九日横濱發同廿日當港着船會ノ人數乘組居ニイカタに送候由桑名侯乘船會津に御越之管も唱此儀實說歟三月十六日幕船¹²ロノ通辨マレンタ¹³申者着不計同館へ參り段々關東之様子共承候處同人之三月七日横濱發之由同九日 勅使江府着ニ相成候筈之段承候由申右之外段々此節變動之唱共承り候山幕府を憐ミ薩長を惡ミ候様之情相見幕府ロシヤヲ賴候様之儀是迄懸念いたし居候處或人口¹⁴コン論破之誠 皇國之幸¹⁵申合事ニ御座候蝦夷地之儀之酷寒之地殊ニ不毛不可開之地¹⁶心得居候處第一銀穴鉛穴又之石炭を生し或之桑麻を生し五穀類相增次第ニ寒氣茂薄らき候をのと被察申候奥地之模様も大概聞繪置候得とも頤曰暖和ニ赴キ一見仕度奉存居候事ニ茂人力を用候ハ、不生もの無之尤肥地¹⁷而就申麥粟¹⁸をさし寄如何様ニ茂收納ニ至り人力を用候ハ、水田茂如何様ニも相開ケ茫々たる原野間々有之實ニ難捨置土地ニ而ロシヤ観觀之念不絕茂尤之至ニ奉存候寒氣茂思遣り候程ニ之無之人御座候佐貳役衆初別途書狀相達得不申候間宜敷御執達之程奉希候い才之儀安原矢島より御聞取可被下¹⁹略右概略得御意申候條猶後音ニ譲聞筆如此御座候以上

四月朔日

京 機 樣

明 治 元 年

(在籍館)

田 助 一

三六七

四月朔日延岡藩使者服部傳兵衛等熊本に來たり藩主内藤備後守京都にて謹慎を命ぜられたるにより重ねて救解の周旋を乞ふ

〔一橋初來使一件〕

慶應四年四月朔日

一延岡より御使者參着今夕於旅宿眞鍋市太左衛門坂梨善太郎被差出取次有之苦之由(云々中略)

益御機嫌克被遊御座奉恐悅候將又備後守儀去ル四日上京仕候段御届申上候處御取糺之趣被爲在候間先謹慎罷在候様蒙御沙汰奉恐入候尙此上宜御執成奉賴候様申越候此段以使者申上候

内藤備後守使者

大目附 服 部 傳 兵 衛

一百七拾石

若 畠 高 橋 清 太 郎

館 持 新 太 郎

右ニ付御答左之通即日市太左衛門善太郎相勤候

彌御堅固玲重存候今般御上京之段御届有之候處御取糺之趣被爲在候間先御謹慎候様御沙汰有之候由ニ而猶此上御依賴之段御使者御口上之趣致承知御痛心之御事致深案候此段御答申達候

四月朔日伊達宗城長岡護美の書に答へ其軍監任命に對する不平を宥む

〔子爵長岡家文書〕

拜聞致之昨日歟軍監兩人被仰付候處必承知居可申貴兄ニハ一切御賢考御尋モ無御座由^テ縷々御心緒御密示被下敬承仕候僕亦更ニ傳承不仕議職ニ而モ人形故歟是迄所存御尋杯大政官御評官之外ハ無御座候夫ハ閑貴兄へ御相談無御座候以外之儀勿論和王御承知モ有之ましく候烏万兩先生ニ而承知候ハ、此兄よりモ御談可申筋御決心云々御尤千万乍然御知己之痛憤尙裁補へ伺候上可申上候間暫時御沈默被下度尤万里小路等へ御尋ハ可有御座筋ニ奉存候貴答迄恐々頓首(和王は仁和寺宮、烏萬兩先生)
(は鳥丸光徳萬里小路博房なり)

四月朔

伊々 拜(伊達伊豫)

長 左 公

四月二日北陸道鎮撫使總督高倉永祐副總督四條隆平千住に到る

〔一新錄探索報告〕

江戸聞取

一大原様三月廿九日品川御着東海寺に御入込
一橋本様四月朔日池上本門寺に御入込
一柳原様同日三田有馬之屋敷に御入込
一北陸道四月二日千住に着
一中仙道三月十八日尾州市ヶ谷屋敷に御入込
四月二日總裁局顧問參與小松帶刀同後藤象一郎車駕に扈從して大坂に滯在中内國事務判事參與

大久保一藏に顧問詰所出仕事務取扱を命ぜらる

(一新錄皇令)

小松帶刀後藤象二郎下坂中顧問詰所出仕諸事當職同様可相勤 御沙汰候事

大久保一藏

四月二日

四月一日在坂本藩老臣米田虎之助大坂行幸後京攝間の人心稍々鎮靜に歸したる事且つ護久歸藩の件及び銃隊の練練を始めたる由を藩政府に通報す

(一新錄自筆狀、江戸京都來狀扣、若殿様左京外様御滞坂中日記)

別帝ヲ以申達候大坂 行幸を初一躰之時情移書一通差進候右 行幸付而ハ京攝とも人心惣々不容易浮説流言茂有之候處於薩長ハ彌以一統之疑惑を被避薩侯ハ京都御警衛ニ而御残此方様より御二方様共供奉ト申處ニ而半ハ疑惑相減其末薩州ハ兵庫ニ碇泊之火輪船悉ク鹿兒島に差返天保山に 行幸之節ハ薩長カ川舟さへ不被差出其日之行幸茂勿論無異儀被爲濟候處ニ而當表之人心一時ニ致安堵上下舉而泰平之氣分ニ相成如是諸藩之人數茂入込居候得共金双場杯日々致下落候由御座候全躰今日ニ至候而者既往之事ハ更ニ不論何方茂私心ヲ去り衆力一致ニ而王政御一新之御趣意運ニ致貫徹候様との意氣込ニ相成今分ニ而都合能相運候ハ、不遠聖業茂可被爲立ヒ清ニ雀躍いたし候

一去ル十六日御地立之飛脚着稜々被仰越内兵制御改革被仰出右付而内輸之調書も被仰越委細御書上之趣致承知早速御二方様ニ茂申上候事ニ御座候中々之御大業何卒速ニ相整候様奉禱候然處御國許ハ兎角舊習脱兼就而者彼是御斟酌茂可有之猶更御心配察入候京攝之近况甲冑ハ何方茂廢止羅紗洋製之便服則戎衣平服兼用ト申キニ而行幸之供奉ヲ初諸侯方平素之御往來茂供頭已下都而スツホウズボンニ而前後之銃隊者是並ヲ捕鼓送一般之風俗も相成勿論御二方様毎日行

右之趣爲可申達如此御座候以上

四月二日

御 家 老

殿若殿様御下國之事

米 田 虎 之 助

申候

世子御一己之御事計ニ無之全躰今日ニいたり候而ハ諸藩之疲弊無申計諸藩致疲弊候而ハ皇威を海外ニ被輝候儀可相成様も無之ト申處方義論相立何方も至極同意ニ而來月差入迄ニ之必定關東荒方結局之模様も相分可申其上ハ御職掌無之議定計之御方々ハ悉ク御解放可被爲在薩州杯ハ一統之疑惑も有之候付一刻も京師之御人數御引纏御下國之御心賦ニ相成居候程之御様子ニ付若殿様ニ茂中旬迄ニハ究而御暇之御運ニ可相成左候而追而ハ九門御固杯も外ニ御仕法を被附列藩之受持ハ被差止諸侯方之往来も多人數ニ不及五六人位之供廻ニ而相濟虛飾行裝等之事ハ一切御取崩之御模様ニ相聞申候

附追而議定衆方都而御分職を被免諸局ヲ持出候事物ハ不依何事衆議公論を以被決方ニ相運候趣ニ御座候此儀者專左京亮様御建議ニ而事長候間不能委曲候

銃隊御取起之事

諸藩之兵制悉致變革候折柄京攝間實戰之次第も追々委敷相分何分是迄之通ニ而者難相濟頭々ハ申ニ不及師役引廻且無足之内杯も追々被召出御直ニ御諭被爲在候へ其何分思食通參り兼不一方被遊御配慮候付此上ニ茂異議申立候もの者可

被差下と御内定被爲在近來ハ虎之助に被仰付數度再應及說得候處無足之面々も御稽古取懸の方ニ相連加之御二方様御直書被下置候付別紙他筆御用狀之通書付相添一統及沙汰候間此節者大方奮興之場ニ至り可申相考申候

四月一日在坂本藩吏員は會津藩の檄文を得て之を藩政府に送達す

〔若殿様左京高澤様御滞坂中日記、王政復古帳〕

四月二日御國に仕出(御滞坂中日記に據る)

會藩檄文

恭惟癸丑甲寅以來夷虜航海シテ猖獗ヲ恣ニシ物價之騰湧日ニ益月ニ甚シク終ニ人心之乖戾ニ至其原ヲ尋ヌレハ幕府之失躰ヨリ起天皇深ク之ヲ憂間シ玉ヒ何トナク公武之間和セサルノ勢有リ幕府其非ヲ悟テ舊敵ヲ除キ尊奉之典ヲ興シ衆ニ選テ我公ヲ以京師之事情如何覩慮如何ト云事ヲ不知分ヲ量リ力ヲ料テ其任ニ勝サラン事ヲ畏テ敢テ當リ給ハス時衆論紛々トシテ一定ナラス時ニ幕府之内命ニ依テ人ヲ遣シテ京師ノ狀ヲ探ラシメ脇弟トシテ覩慮之在ル所ヲ知給ヒ今此職ヲ奉シテ覩慮之下ヲ護リ言若信用セラレル時ハ公武之間和シ徳川家危急教フ。此時ニ有リ縦ヒ任ニタエスシテ身ヲ失ヒヌトモ西上シテ京師ヲ以テ墳墓之地ト定メ上ハ覩慮ヲ安シ奉リ下ハ萬民ヲ救ハント斷然決心シテ上京シ給リ其以來精忠ヲ抽テ給フニ依テ天皇深ク依頼シ給ヒ大樹ノ愛寵亦厚シ是ヲ以テ急難之事有之ト雖必利運轉シ今ニ至ルマテ六年之間誠忠不渝始終如一天皇御感之餘リ幾度トナク宸翰ヲ下シ賜ヒ公嘗テ病スル時ハ辱クモ自ラ内侍所ニ於テ祈願シ給フニ至ル其寵遇實無比類ト云ヘシ今春先帝覩慮ヲ遵奉シ長ク守護之職掌ヲ相勵其功不少覩慮不斜トノ褒賞ニテ參議御推任モ有之元來長州ハ先年ヨリ外ハ尊王攘夷ニ詫メ實ハ不軌ノ志ヲ懷キ王室ヲ誘ヒ幕府ヲ欺ク其罪枚舉スヘカラス甲子七月ニ至リ終ニ大兵ヲ擧テ禁闈之下ヲ襲ヒ銃丸御所ノ屋場ニ及フ事ニ至ル其逆亂之罪誅シテモ猶余リ有天皇大ニ逆鱗大樹亦深ク之ヲ惡給フト雖遂ニ寛典ニ從ヒ終ニ官位ヲ脱シ領地ヲ削ルニ其命ヲ用ヒサルニ至テ其罪ヲ責見ヲ残ツ然ニ天皇崩御大樹薨去大喪打續國家多難ニ乘シテ勿躰ナクモ幼主ノ明チ暗マシ奉リ事ニ詫メ長州ノ罪ヲ赦シテ先帝ノ

勘ナ蒙ル公卿ヲ用ヒ陪臣ヲシテ參與トシ攝政殿下ヲ始奉リ大樹我公桑名公皆其職ヲ免シ正邪地ヲ易エ忠姦處ヲ換ルニ至ル是先帝ノ意ニ非ル而己ナラス又今上ノ意ニ非ルコト明白也嗚呼一坏未乾サルニ今上ヲシテ父ノ道ヲ改メシムル事セ兵ヲ加ヘン事又知ヘカラス我公多年之誠忠空ク水ノ泡ト成殘念ト云モ愚ナル事ナラスヤ實ニ膽ヲ嘗メ薪ニ伏スノ時ニシテ君辱ル、時ハ臣死ノ期ニ至レリ苟モ人心有者臣子ノ情ニ於テ豈片時モ安スベケンヤ禁庭ニ對シ奉リ除カサル事テ弓引事トハ決テ爲スヘカラスト雖姦邪ノ徒若繪旨ヲ矯テ兵ヲ加ルコトアラハ關東力ヲ戮義セ兵ヲ擧テ君側ノ姦悪ヲチ得ス夫公ノ忠誠貫徹セス今如是ノ勢ニ至ルハ抑盡サル處有ハ是畢竟臣民之公ノ意ヲ戴任スル之全カラサルニ由ル恐多キ至リニ有之スヤ然レハ閑藩之四民貴賤上下ナク祖宗以來德澤ニ浴スル者而白ク此意ヲ領掌シ力ヲ合セ心ヲ一トシ兵起ラハ早ク國家ノ敵ヲ誅戮シ武威ヲ益天下ニ輝カサン事ヲ期シ日夜肝ニ銘シ暫時モ忘ル、コトナク國論ニ歸シ萬民ノ心一人ノ如クナラハ我公之精忠天地ヲ貫キ神明ノ擁護有リ再ヒ青天白日ヲ仰カ如ク豈疑ヒアランヤ縱令身死スルトモ屬鬼ト爲テ祟リナシ姦賊ヲ滅絶スルノ心ナキ者ハ天地神祇其是ヲ殛セヨ

四月某日横濱裁判所總督東久世通禧に江戸開市事務總督心得を横濱裁判所副總督鍋島直大に同副總督心得を命ぜらる

〔一新錄皇令〕

辰四月初 東久世中將

肥前侍從

當今江戸開市取扱之儀總督之心得を以可相勤様被仰出候事

四月

四月三日東國の細民餓餓に頻する者あるを憂ひ仙臺藩に對し大總督府の需用に供すへく豫め米穀の調達を命ぜらる

〔太政官日誌第九、一新錄皇令〕

四月三日仙臺へ御達之寫

伊達陸奥守

政道宜ヲ失シ近年天下之人民安堵之恩ヒヲ不成之折柄早春德川慶喜暴舉已來不得已之形勢ニテ殊更東武之地物價騰貴小民餓餓離散ノ者モ不少歟ノ趣^哉達御聞深ク被歎思食候不日大總督宮入城之上ハ人民居合之御取締モ屹度可被仰出候付テハ米穀等之儀現地之模様ニ隨ヒ御沙汰之儀モ可有之候條無滞速ニ運輸イタシ候様早々可取調置御沙汰候事

但米穀價之儀ハ至當之相場ヲ以テ取扱可申候事

四月

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(四月五日村上より同廿日着の内)

細川若狭守殿御下坂御内意御伺書先月廿八日辨事御役所に被差出置候處一昨三日願之通被仰付旨之御付札御用被成御渡候右寫一通並下國之儀ニ付而右一同御渡ニ相成候御書付寫一通差上申候

大坂 御行在中 天機奉伺度奉存候依之近々下坂仕度心得御座候間此段奉伺御内慮度奉存候以上
三月廿八日

細川若狭守

(付札)願之通被仰付候事
右一通
是迄江戸定住之處此度家族並家來之者一同彼地引拂宗家國元に引越候就而之向後住居向等取極之爲め一先御暇之儀宗藩より願之趣無余儀次第ニ付被免御暇候右用向相濟候ハゝ重而速ニ致上京様被仰出候事

右一通
末家細川若狭守儀大坂御行在中奉伺 天機度段之同人より奉願候通御座候然處若狭守儀之是迄江戸定住ニ付此節養母初家族並家來之者一同彼表引拂同人儀之依召直ニ上京仕家族等者統而國許ニ爲引越申候勿論在所も未取究不申就而之住居向等茂無之儀ニ付差向候御用無御座候ハゝ奉伺 天機候上一先賜御暇候様奉願候左候ハゝ一應罷下住居向等手配仕せ度此段御内意奉願候以上

細川越中守内

林 新九郎

(付札)願之趣無餘儀次第ニ付一先被免御暇候尤右用向相濟候ハゝ重而速ニ可致上京様被仰出候猶委細之儀之若狭守に御沙汰之旨可相心得候事

四月三日我藩征東軍の應援として大坂より大島藤一郎の率ゐる大砲隊を派遣す仍て鑑札印章旗等下附の儀を太政官代へ同ふ

〔一新錄自筆狀〕

(四月二日稟書の内)

東山道中仙道之事

右兩道とも此事六ヶ敷相成副惣督爲鎮撫甲州に御出此方様御人數方も分隊被差越候付而淺井新九郎方別紙之通申來明

明治元年

三日より大島久平門弟共關東に向被差越候事以上(是日久平名を藤一郎と改む)

四月二日

(若殿様方京亮様御油坂中御國京都仕懸返達上帳等扣、王政日新錄_{出本縣})

四月五日林新九郎村上彈助よ

今般當藩より東海道に惣帥以下人數出張爲致置候處甲府表不穩趣ニ相聞彼地出張之藩々人數而已ニ而之鎮撫方行届兼候旨ニ而右東海道出張當藩人數より隊長並物頭以下餘計之人數分隊甲府に爲致出張候付本陣手減少手薄ニ相成候間急速兵隊差越候様惣帥之者より急飛を以申越候然ルニ右京大夫左京亮召連候兵隊も至而手少ニ候得共右報告之次第付不得止事無理繰合せ今三日より人數爲致出張候筈之段大坂表より申越候依之差向別紙稟書を以奉伺候間宜御差圖被成下候様奉願候以上

細川越中守内

四月三日

覺

一兵隊惣人數 五十七人

一玉葉箱等持櫂夫 十人

一櫂夫 十人

但人夫櫂立方櫂札被渡下儀ニ可有御座哉

一街道印章又之御旗可被渡下哉

關東に增御人數出張之儀ニ付別紙之通伺書差出候處非藏人松尾豊前を以御付札之通御差圖ニ相成御印櫂并肩印共御渡

御付札
右兩様無之
一官軍御印被渡下候哉
付札
此稜相渡候事(王政日新錄)

一惣人數に於宿驛御賄被下儀ニ可有御座哉
付札
自分賄可有之候以上

二相成候付此段相達申候以上

四月三日

村上彈助殿

尙々本文御品々ハ直ニ御奉行中に差廻し置申候以上

林新九郎

(一新錄自筆狀)

(四月八日關東發淺井新九郎來札の内)

清水方一手者朔日藤澤發陸二日川崎泊三日吉比銀臺邸に着陣仕候付誠大安心仕候御門限等嚴重ニ取計壬生邸同様出入改等ニ有之候

四月三日征東軍所屬の我藩兵江戸に至り芝白金の藩邸に入る

(淺井鼎泉記録)

諸藩の人數及び江戸に入込いたれハ御國の御人數ハ白金御邸に本營を構へ江戸城引渡の際は受取方命せられ候ニ付清水數馬方惣人數を率ひ受取に相成候付此段可被達候以上

四月三日本藩老臣郡夷則溝口藏人に海軍事務を總管せしむる旨布達す

(機密間日記)

覺 御軍備方
御奉行

演武場

御役々

四月三日

明治元年

右者海軍之儀茂夷則(郡)并溝口藏人に諸事談合差圖を受相勤候様被仰付候條此段可被達候以上

三七七

覺 御船方
御奉行に 夷 則 (那)

右者海軍之御用茂主ニ成取扱候様被仰付候

溝 口 藏 人

右者御軍艦總奉行被仰付候

夷 則 (那)

右之通候條海軍之儀付而之諸事右兩人差圖を受相勤
候様川尻御船頭以下に可被達候以上
一鶴崎御船頭以下に達候儀も右同文を以同所御番代に
及達候事

四月三日

四月四日東海道先鋒總督橋本實梁同副總督柳原前光、參謀西郷吉之助等を隨へて江戸城に入り
勅旨を田安慶頼に傳達す

〔三條實美公年譜〕

四日實梁前光ノ兩卿輕裝城ニ入ル其行列左ノ如シ

下段 濱松藩四人 御手人
江田武次 驕馬附屬 柳原侍從 驕馬 木梨精一郎 附屬 安場一平 驾馬附屬 下僕 橋本少將 驾馬
下僕 濱松藩四人 草履 御手人
方ニ城ニ入ルヤ高家其他諸有司禮服出テ二重橋門ニ迎ヘ先導ス兩卿大廣間上段ニ座シ中納言田安慶頼ヲ下段ニ召シ
勅書ヲ傳フ參謀ハ下段ノ右ニ座シ若年寄大久保忠寛左ニ座ス事畢リ兩卿休息所ニ入ル靜寛院宮酒饌ヲ賜リ兩卿之ヲ辭
ス

〔一新錄皇令、王政復古帳、一新錄自筆狀〕

御寃大御沙汰之本文

第一條

第二條

慶喜去十二月以来奉欺 天朝剩レ兵力ヲ以犯京都連日錦旗ニ發砲シ重罪タルニ依爲追討官軍被差向候處段々眞實恭順
謹慎之意ヲ表シ謝罪申出ニ付而者祖宗以來二百餘年治國之功業不少殊ニ水戸贈大納言積年勤王之志業不淺旁以格別深
厚之恩召被爲在左之條件實行相立候上者被處寛典德川家名被立下慶喜死罪一等被宥之間水戸表に退キ謹慎可罷在之事

第三條

城明渡シ尾張藩ニ可相渡之事

第四條

軍艦銃砲引渡可申追而相當可被差返候事

第五條

城内住居之家臣共城外に引退キ謹慎可罷在候事

慶喜叛謀相助候者重罪タルニ依可被處嚴科之處格別之寛典ヲ以死一等可被宥之間相當之所置致可言上之事
但萬石以上者以 朝裁御處置可被爲在候事

右 御沙汰書一通入城之上大廣間ニ於テ田安中納言に相渡之節演說書左之通
德川慶喜奉敗因 天朝之末終ニ不可言之所業ニ至候段深被爲惱 眞襟依之御親征海陸諸道進軍之虔悔悟謹慎無二念之
趣被聞食被爲垂皇懲之餘別紙之通被 仰下候條謹而御請可有之候就而者本月十一日ヲ期限トシ各件處置可致様
御沙汰候事

右限日既ニ寛暇之 御沙汰候上者更ニ數願哀訴等斷然不被聞食恩威兩立確乎不拔之 故慮ニ候速ニ拜膺不可異議者
也

右相達候處

明 治 元 年

御達之趣謹而奉拜承候猶慶喜に申聞御請可奉申上旨田安中納言拜答候事
右者昨四日爲 勅使入城申渡之始末爲心得爲知置候猶暴舉之輩有之候哉茂不被計之間諸陣相警養銳不懈嚴謹屯衛可有之事

四月五日

先鋒 副將 朱印
先鋒 總督 朱印

尾州藩 長州藩 肥後藩 備前藩 薩州藩

伊州藩 大村藩 佐土原藩 濱松藩

右達章一通藩々士分以上憲者に申付急ニ先々に廻達候様被仰出候事

四月五日

〔一新錄自筆狀〕

(四月八日關東發達井新九郎來札の内)

四日先鋒督府江城江御入城有之 勅諭被仰渡有之城渡軍艦渡茂今日より七日之期限被仰渡候由ニ而御請ニ者田安様當時督府之宿營池上本門寺に御出之筈ニ御座候昨日御入城様子者被仰渡迄ニ而至而御速ニ御退城ニ相成靜寛院宮様より御料理被下候筈ニ御座候處督府御斷ニ而御退城ニ相成候御供廻も御輕隊ニ而諸藩兵隊等茂被召連無之候萬端御都合宜敷との趣尤參謀者四人西郷(盛)海江田(武)木梨(精一)安場(一平後改保和)御供ニ有之候於江城被仰渡之趣ハ田安様御拜承ニ相成別紙寫之通ニ御座候請取渡無常來ル十一日迄之期限ニ而相濟候様禱申候事ニ御座候(本文中別紙寫とあるは前掲五個條て省く)

〔海舟日誌〕

(四月四日の様)

勅使柳原殿岩倉殿御入城參謀五名陪從御所置被仰渡あり(中略)御請御登城は田安殿一橋殿參政大小目付兩三人宛なり
〔王政復古帳、一新錄皇令〕

藤堂藩高切上介より財津民助へ差越

愈御清福奉拜賀候然者兼而御約申上置候關東之報信御座候付別紙ニ爲持上候最早御承知可被爲有御儀と者奉察候得共右弊藩歸雲より孤雲大夫様へ奉供電覽度先生へ右御頼申上候様申付候條先生宜御取計被成下度此段偏奉願上候先者右迄勿々不宜

四月十四日

二白最旱段々露布可仕候得共右弊藩より出候儀他之御藩へ者被仰下間敷是段不惡御承諾奉希上候

財津先生侍史
高切上介

此度關東御所置振り被仰渡候ニ付昨四日橋本様柳原様御輕裝ニ而兵隊ハ御召連無之參謀之向井ニ聊之御馬廻りニ而西之丸へ御入城之處至而恭順之姿役々多人數麻上下着御出迎ひ市中取締杯者嚴肅之事ニ而御式臺迄田安殿御出迎ひ於同書院勅諭之趣被仰渡候處直ニ難有旨御請ニ相成候若年寄始メ御挨拶ニ罷出敬禮を盡し候事ニ而參謀之向右廣間迄罷通り候處田安殿始メ若年寄等之役々挨拶有之右何等之故障も無之相濟夕七時比御退出池上村へ御歸館ニ相成り申候御所置振りハ御寛典ニ而慶喜公水戸へ御預り軍艦者官軍に渡し武器者武庫に徳川氏々封し謀臣助命と申場ニ相成候由開城ハ七日之内と被仰出尾州に御預ケ之趣ニ御座候右ニ而麾下暴動等無之穩ニ可相濟哉餘り速ニ御請ニ相成り候而意外之次第ニ御座候麾下も多人數所々ニ罷在器械も隨分手厚之様子ニ付甚以不安ニ被存候事ニ御座候

五月池上村出十一日國許へ着

明治元年

四月四日本藩は大坂行幸に供奉せる藩世子護久及ひ長岡護美の率ゐたる隊長兵士の員數を申告す

〔若殿様左京亮様御下坂中御記録〕

軍防局に

細川右京太夫長岡左京亮此節召連候兵隊等左之通御

座候

一隊長並司令士等 七人

四月四日

青地源右衛門

一兵隊

細川右京大夫内

此段御届仕候以上

四月四日明五日觀兵式施行の旨令達せらる

〔若殿様左京亮様御滯坂中日記〕

四月四日軍防局に御呼出吉田遠江を以御渡之御書付寫一通御留守居に達

肥

後に

四五日銃陣 天覽被爲在候間其藩兵隊一中隊可差出旨 御沙汰候事

天覽兵隊規則

一明五日卯上刻城中二廓捕之事

但各藩標札之本に屯集之事

一本丸に着御之上直第一兵隊整列シテ特別之指揮ヲ相待令ニ隨而操練場ニ進ミ運動放發次共節第二兵隊本丸門際ニ進
整列シ可有之第一兵隊調練終而退キ第二兵隊可相進候事

但第三兵隊ハ準之

第一兵隊ガ第二兵隊各訓練相濟次第不待指揮勝手ニ可罷歸事

訓練兵隊順序

第一

薩州兵隊

一大隊

第二

肥後兵隊

一中隊

第三

柳澤甲斐守兵隊

一小隊

第四

北條相模守兵隊

一小隊

第五

越前兵隊

一小隊

第六

長州兵隊

一小隊

〔子爵長岡家文書〕

拜讀過刻ハ御同伴被下御場所見置心得ニ相成僕社感謝之至御座候扱亦要事左ニ貴答候

天覽ハ明朝快晴ニ候ハ、被爲在候所ニ鳥聊へ被仰達候旨云々軍補之英斷別段と存上候

○過日井關齊右衛門へ被仰。含置候ナルゴール之儀敬承申候

○明日御延引候ハ、久留米行ハ如何可有之歟御懶可然尤於僕ハ佛船將用談申越候故相招致談判候故不參可仕候實々老逸

ハ如昨夕英壯諸兄勇士輩と對酌ハ何分敗北閉口ニ付久留米行モ相断て度卓子臺上コツブ之酬酌ナシ之方自適ニ宜敷候

是之賢兄故及吐露候隱居先生情態仰御憐察申候

○西園寺和尙於途中御見懸最早佛船もよふ相分りたるか云々佛ハ英之字訛歟尤右の事ハいまた不及談判候

○今日ハ昨夜之御醉氣ニ而城内御通行炎氣一入強く明日ハ今夕より被養精神可被報鴻恩旨今夕僕無用事候ハ、過刻より

對酌明朝之百人之銃卒か二百人ニみゆる之英氣可奉添ものをと殘念ニ御座候草略貴答迄申上候他日物語御斷云々承知仕御同様希候稽首

四月四日

長左明兄

尙亦彌 天覽之時ハ六半時御登城故僕も五時にハ出候様被仰下候得共かゝ合なきもの故期待も不及と存候油斷すると人形ニ使を申候明日よりハ行在所ヘモ無必御用候ハ、不罷出心得ニ御座候不備

四月四日諸街道筋通行の節の取締方及び各藩主の天機伺の爲め下坂するものゝ從者を簡易にして宿驛の煩とならざるやうとの旨を布達せらる

(京都井江戸返達御用狀扣、王政復古帳)

四月四日太政官代に御呼出御渡之御書付寫

斯ル聖業御隆興之上ハ天下萬姓各得其所候様深ク御仁恤被爲在凡百之宿弊盡ク御一洗之御趣旨ニ付五畿七道其他諸道筋通行之節是迄幕吏等之如キ聖業有之候テハ決而不相濟事ニ候爾來宮堂上方諸侯及小吏陪臣等往來致シ候節隨從之者共下部ニ至ル迄萬一威權ケ間敷又ハ賄賂等ヲ貪リ總テ不法之振舞有之候ハ、早速其筋裁判所又ハ其向々之役所ニ可訴出候若シ隱匿後日於相顯候者屹度曲事可申付者也

四月

四月四日太政官代に御呼出御渡之御書付寫

行在所ニ天機窺として下坂之面々供奉供連同様左之通被相定候當正月戰爭以來莫大之夫役ニ而宿驛難濫せしめ候事ニ付全ク立歸之心得ヲ以萬端簡易ニ致往來下々迷惑筋ニ不及様可相心得候事

中藩以上
近習拾人手廻拾五人迄之内
小藩
近習六人手廻拾人迄之内
右之通被仰出候事

四月

四月四日太政官代に御呼出御渡之御書付寫

行在所ニ天機窺として下坂之面々供奉供連同様左之通被相定候當正月戰爭以來莫大之夫役ニ而宿驛難濫せしめ候事ニ付全ク立歸之心得ヲ以萬端簡易ニ致往來下々迷惑筋ニ不及様可相心得候事

中藩以上

近習拾人手廻拾五人迄之内

右之通被仰出候事

四月

四月四日本藩遊學生井上多久馬武州横濱より熊本に歸る

(慶應元年ヨリ明治三年迄
遊學一卷帳)

監物殿家來

井上多久馬

右者武州横濱に爲遊學被差越置候處四月四日歸省ハ久し候事

四月五日太政官日誌出版につき遐邑邊陬に至るまで其趣旨普く貫徹せしむとの旨を達せらる

(太政官日誌第九)

同月(四月)五日被仰出書寫

明治元年

近來太政官ニ而日誌ヲ出版シ廣ク天下ニ御布告被遊候儀者上下貴賤トナク御政道筋ヲ敬承セシメ一意ニ方舊スル所ヲ知リ其條理上ヲ踐行セシメントノ御仁慮ニ被爲在候ニ付諸國裁判所諸道鎮撫使諸藩留守居等へ御渡シニ相成り候事ニ候間大切ニ取計ヒ遐昌邊隙未今ニ至迄不洩様速ニ相達シ右之御趣旨貫徹候様屹度可相心得候事

但元幕府之預所元郡代元代官支配所に者此度取締被仰付置候藩々ヨリ可致通達寺社領陣屋向等へ茂其最寄ノ藩ヨリ可相達候事

四月（王政復古帳には四月八日太政官より御留守居御呼出ニ而松原甲斐を以御渡之御書付との端書あり）

四月五日我藩觀兵式に參列せしむべき兵數を申告す

〔若殿様左京亮様御下坂中御記錄〕

一昨夕軍防局に御留守居御呼出ニ而銃陣 天覽ニ付肥後藩兵隊一中隊被指出候様御書付御渡之處昨朝被指出候兵隊御人

數殖候付猶今日左之通出來猶保才八軍防局に差出候

軍防局ニ天覽被爲在候間當藩兵隊一中隊可差出旨被仰出奉畏候依之左之通差出候管ニ御座候

一隊長並司令士 九人
一銃隊 百拾人

四月五日松平慶永長岡護美に答書して行在所へ伺候せし由を報し海軍充實陸軍觀兵式のことにも及ぶ

〔子爵長岡家文書〕

拜讀如示四月清和兩己酉濃翠如拭閣下愈御清廻朴賀々々下官爲寳天機興病昨四日午後發京今朝着坂仕候直ニ行在所へ

出仕奉伺天機且酒肴給呈加之拜寵頗重疊授入天恩海山奉存候下官賤恙三月上旬風邪後折々覺胸痛夜中寒熱至于今痰血少々有之迷惑仕候何レ不違黃泉之内國事務局補と仰一笑奉希候
閣下過日海軍天覽御用掛り被仰付御奔走之由御苦勞奉存候如仰一日も早く皇國之海軍充實御同願ニ候將又明日之陸軍天覽何分快晴御同事相祈候事ニ候過日西郷氏歸京關東も大ニ都合宜との事僕初而承知先以難有仕合奉存候閣下今日右京殿と御同伴御出浮御樂と存候今般之修理先日修理及 其他心得居候者不召連候間閣下御旅寓へハ家臣不差出候御懇問之楮上深悉次第御禮答迄如此候也頓首

四月五日

左京少尹閣下

尙々御端文恭奉存候已上

四月五日本藩演武場主任郡夷則我藩の兵制改革につき異論勃興し人心一和を缺くを憂ひ從來の六備隊は暫く舊法に従ひ別に郷兵一隊を編隊して専ら西洋法を以て訓練せん事を請願す

〔一新録上書類〕

夷則殿御預ケ之大組返上郷兵御預りニ相成度との趣ニ付差出ニ相成候書付寫

御内意之覺

演武場御用主ニ成取扱候様被 仰付候付而之當時之形勢一刻後四境之御備嚴重相立不申而之難叶差寄熟練之郷兵四境ニ相備加之可然土分之人躰より指揮不仕候而之熟兵といへとも其用未成シ不申事ニ御座候處近年洋法種々御誘掖ニ相成候得共兎角人氣向兼演武場ニ而教導仕候而今茂土分以上之至而少土以上と申候而も多分御取立之面々迄ニ而下地不進之人氣故猶更士以上之出席之絶而無之程ニ而此儘如何ニ御誘掖ニ相成候而度 御趣意貫徹可申と見込申候間御番頭に茂精々咄台御番方之内より御人撰ニ而指揮役被 仰付右之面々屹と差入歩練陣法等習熟之上之物而併役兼帶被 仰

付四境御固受持之申ニ不及此面々より平常於演武場教導仕候ハ、一統之受も宜漸々と之上分以上之出席茂相増可申との見込ニ而申談指揮役等茂夫々被仰付候事ニ御座候其後之次第ニ演武場出席茂相増此上之目錄相傳等之役日相立候ハ、是迄半表半裏之鄉兵も彌競立差入出構可仕モ大ニ競居申候内今度御軍制御改革被仰出引續キ一統炮術之勿論歩練之儀も習練仕候様被仰付候付演武場も日々出方相増此勢ニ而一統屹差入候ハ、四五月を不待熟練之兵士茂多分出来可仕ト見込居申候處御備立等之御沙汰延引仕其上右御改革被仰出候即下和泉殿ニ之唯今迄さへ無之算木調取起ニ相成御趣意違戾之形茂有之御番頭以下御留守居組迄十之三ツ位之演武場出席仕候様相成候得共御席中より之御出方無之御備頭茂同様ニ而其外三千石以上之面々豈人茂罷出不申一統より大ニ疑惑を生居申候内上田休兵衛見込之趣且軍學師より之建白浦上潤兵衛辭職之風評ふとそつと留布仕加之私取流力申候書付會圖面等茂何方より洩レ候哉段々所持仕居候面々も有之昨今ニ相成候而之彌以議論紛々ト差起私組杯之下地固執之舊習再發仕御備立被仰出候迄之是迄之算木調等茂相初申度杯ト存寄尋候向有之私之微力ニ而之何分組中之抑揚等も届兼奉恐入候仕合ニ御座候右等之譯より歎昨今演武場出方も日ニ増相減此儘ムハ逆瓦解之勢ニ相成可申演武場之儀者別段奉蒙御沙汰茂居候儀ニ付私丈ケハ乍不及茂屹勉勵御趣意貰贊仕候差入盡力仕候得共如何ニ茂力ニ及不申其上前文之通私あらへ書茂相洩候處ニ而之萬事私之物好キ之様ニ相響キ誘掖筋ニも差障當惑至極ニ奉存候世子君御下國之上之如何様卒御誘掖之道も相立可申奉存候得共夫迄之處維持仕候見込も更ニ無御座如此一大御變革之誠ニ以至重至大之御事柄ニ而一兩人之力ニ而運候様茂無之第一御席中之不及申大臣之而々同心盡力仕候而こそ御趣意も一統に貰贊可仕事ニ御座候得とも瓦解之今日ニ至候而之如何ニ茂無致方私之前文之通別段之奉蒙御直命茂居候身分ニ而節角之御趣意如此成行候而之實以難相濟畢竟微力トハ乍申組内之算木調を茂相初候様成行候處誠ニ重疊奉恐入候仕合ニ奉存候右之通ニ付逆茂急ニ御備御改革之儀之何程ニ可有御座哉反復勘考仕候處如此切迫之時體彼是混雜仕候内何時如何様之事變出來可仕茂難測左様之節前條之通不整之上人氣不和之御人數を引連出張仕候而之第一物場之指揮抑揚も届兼可申實ニ重疊不安意ニ奉安慮申候儀ニ無御座候間吳々茂御急決之程奉願候以上

四月五日

郡夷則

〔王政復古帳〕

覺

一金拾八兩壹步壹朱

但白木綿四拾六反代

一同拾壹兩壹步三朱と六匁五分八厘

但晒木綿四拾反代

右者土州人泉州堺表ニおひて割版被仰付候節木村得太郎取計を以買上候代金唯今被渡下候様有御座度奉存候似上

四月

溝口孤雲

明治元年

四月五日本藩會て保管せし土州人堺に於て處刑せられし時使用したる木綿代金の請求書を提出す

五月太政官ニ而被差出候事

會計事

四月某日奥羽地方賊徒跳梁王命を梗塞するものあるを以て伊達慶邦に對し父子戮力近接の諸侯を鼓舞して速に會賊勦絶の功を奏せしむへしとの旨を令達せらる

〔一新錄皇令〕

其方儀先般被仰出候御沙汰之旨奉畏此節會賊追討剝絶可有之候處遠邑邊陬之向々京師之情實難通ニ付賊徒等物ニ救應之使節等差向候裁ニ茂相聞不容易儀ニ候然處其藩ニ於而ハ東奥之大貳殊更襲祖正宗勤王之偉功今以天下ニ流芳致候名家ニ有之候間領國近地右等賊徒跳梁致し使節等諸向ニ差向ケ右様之儀茂有之自然治平遲緩ニ相成候而ハ實ニ其藩襲祖以還之武名ニ拘り候儀ニ茂相當リ可申候付其方父子戮力一心且接近之諸藩を鼓舞致し一舉ニして會賊誅鋤奏功可有之依之今般嫡子左京太夫歸國御暇被仰付候間父子只管徵旨を奉戴し不日可奉安宸襟御沙汰候事

四月

右之通被仰出候ニ付四月六日左京太夫様御東下ニ相成候事(陸奥守養子經丸三月十九日左京大從四位下侍從に任叙せられたり)

〔一新錄探索報告〕

〔辰四月首藤敬助聞取書の内一節〕

四月三四日比

一野州邊ハ脱走之幕兵會桑等之殘兵初賊徒處々屯集亂暴等甚數字都宮杯者甚以危殆落城ニ茂可及哉之勢之由ニ而援兵等頃越陥連何分東羽之處ハ六ヶ敷佐竹之勤王之由ニ候得共孤立之姿ニ而仙臺始會津庄内同慶之由ニ茂相明候事

四月某日舊幕歩兵隊長古屋作左衛門等北越の諸藩を説いて同盟を訂結す

〔一衝鋒隊戰史〕

〔幕末實戰史附錄〕
四月朔日更に本營を新潟に進め大に示威的行動に出たる後前田兵衛永井雙仲齊の兩名を村上の陣屋に遣し云はしめて曰く我れと同盟を結び奸徒掃蕩の爲め同一行動を執るか然らざれば銃火の間に雌雄を決せんと頗る强硬の態度を以て交渉せしめしも是れ亦何等要領を得るふく空しく歸陣せるが夫れより後ち四日を経て是等談判を受けたる新發田村上は云ふに及ばず村松長岡柏崎椎谷其他附近の諸藩相聯合して會見を求め來りたるを以て内田庄司木村大作松田昌次郎の三名を委員に選定し柏崎にある桑名陣屋に於て諸藩代表者と折衝せしめ萬一彼等に於て同盟を拒絶するが如き事あらば一氣に其本城を陥れて目に物見せんと充分配兵の準備を整へ報告の來る今や遅しと待ちたるに談判は案外容易く進行して幸に兵火を動す事なく何れも同一行動を執るに同意せしより直ちに同盟の誓を結び地盤の聊か鞏固あるを得たり

四月六日大坂城に行幸ありて觀兵式を行はしめらる

〔一若殿様左京亮様御下坂中御記録〕

四月六日 時々微雨

一今日城内に 行幸銃陣 天覽ニ付 若殿様朝六半時之御供捕ニ而銃陣 御拜見として御出
一左京亮様ニ之曉七時之御供捕ニ而同所に御出役相濟而御二方様共 天機御伺として行在所に直ニ御參
一銃陣相濟後其日城内に御出之官家武家之御方々とも乗馬 隊覽被爲在候事
一右之御儀ニ付依御達隊長并司令士等十人計兵隊百十人餘被指出候處練伍列之手際殊之外よかりし由

四月六日東山道官軍結城域を抜く

〔一新錄探索報告〕

(明治紀元辰六月林玄助東行難記抄略)

右戰爭(同日の條を参照すべし)之事を聞て彦根須坂之官軍奪返んか爲^マ四月二日小山驛に來り夕刻迄休息し今より直¹小金井に行んと云て一隊ハ小金井に行一隊ハ急ニ小山より本道を經て直¹結城を襲前ニ進し兵ハ小金井より直¹結城之間道ニ²より二路より攻て終¹其城を抜けり

右城ハ初度戰爭之節自燒して遁れし故城ハ一圓燒亡市中ハ不燒番兵と見て當時彦根之人數少し町家に屯せり

〔防長回天史第六編上〕

(流山結城宇都宮ノ戰爭抄略)

東山道ノ官軍ハ先ツ流山ノ賊ヲ掃攘シ更ニ進シテ結城ヲ鎮定シ宇都宮ヲ救援セントシ彦根須坂岩村田掛妻ノ諸藩兵及ヒ幕府旗下岡田某ノ兵ヲ合シテ一軍ヲ編成シ我藩(長州)祖式金八郎薩藩有馬藤太等之ヲ率キ(中)四月朔²或曰板橋ノ木營ヲ發シ千住ヲ經テ流山ニ向ヒ襲テ賊兵ヲ走ラシ首魁近藤勇ヲ擒ニス³因州ノ居ニ據レハ四月二日板橋ヲ發シ五日流山ノ賊ヲ襲⁴崎ノ戰錄ニ據レハ四月朔日千住往還ヨリ進發シ一日流山ノ賊ヲ走ラシ近藤ヲ擒ニシ五日結城ニ迫ル官軍乃チ分レテ一トナリハトアリ日寄合セス姑待後證近藤ハ之ヲ板橋ニ據送シ斬ニ處シ其ノ首級ハ京師ニ送リ三條河原ニ斎ス⁵館林兵ハ本軍ノ出發後途中ニ於⁶結城ニ向ヒ一ハ香川敬三平川和太郎有馬藤太等彦祖式金八郎須坂館林二藩ノ兵ヲ率キテ⁷テ來リ合シタルモノナルベシ⁸根岩村田掛妻等諸藩ノ兵ヲ率キテ宇都宮ニ向フ六日祖式隊結城城ニ達シ之ヲ擊ツ城兵遁走ス祖式等乃チ城ニ入りテ之ヲ守ル⁹(回天史に引く所根據あるか如くなれば姑く其に從ふ)

四月六日仙臺藩世子伊達左京大夫朝旨を奉し京都を發して國に歸る
(京都并江戸返達御用狀扣)

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(四月十八日付上より開四月十日前の内)

伊達陸奥守様より、、、然者左京大夫様依召今日大政官代に被罷出候重々御極意を以御國許に御駕被仰出候依之來ル六日爰許御發途御道中無滞候ハ、來月朔日御着城被成候右爲御知御祝儀物等堅御斷旁被仰進候、、、被仰付、、、

〔一新錄皇令〕

〔四月六日左京大夫様御東下ニ相成候事〕

四月六日仙臺藩主伊達慶邦使者伊達將監を駿府なる征東大總督府に遣し征討の鋒を止め諸藩の公論を盡し天下の正義に従ひて王政復古の偉業を大成せしめられんことを建議し直に斥けらる〔尊攘錄諸家建白並御屏書等〕

慶應四年春

徳川慶喜叛逆追討として近日官軍東海東山北陸三道¹進發せしむへくの旨被仰出候付而ハ奥羽之諸藩宜知尊 王之大義相共ニ²援六師是を征伐する旨被仰渡猶又會津空保此度徳川慶喜反逆ニ與し錦旗に發砲大逆無道征伐之軍可被興候間臣慶邦一手を以本城ニ襲撃速ニ追討之功可奏旨御沙汰之趣諱而奉畏候若松ハ東北之一孤城と雖臣慶邦一手ニ襲撃被仰付候段武門之而目ニ茂叶難有奉存候速ニ一藩中ニ布告出陣之用意仕官軍御進發之期ニ速ニ應援襲撃可仕候然處弊藩奥海之濱ニ僻在仕道路遼遠朝廷御決議之御深旨茂詳細ニ不奉辨識内上國之形勢等只々傳聞而已眞偽虛實明白ニ決し難固陋一隅之見を以言上仕候儀千萬恐悚之至奉存候へ共既ニ廣々言路を被爲開候上之存付之次第默居候而之臣子之分難盡忌諱を不顧左ニ言上仕候 王政復古朝議御一新之折柄一旦天下之兵を關東に被動御征伐被爲在候段之乍恐重大之事件深キ³慨然も被爲在候上⁴者奉存候得共天下之心歸着仕候事ニ無之候而ハ難被爲成就候先達而慶喜御用被爲在參 内可仕旨御沙汰ニ付會津桑名等先手ニ仕上京仕候途中右兩藩々官軍に砲發仕候之叛逆無紛大逆無道之 朝敵ニ付

追討將軍を以御征伐被爲在候趣ニ而先手之□州關門に差懸候節俄ニ薩藩勢及砲發不得止爭鬪ニ至候由ニ有之如何ニ
茂倉卒紛擾之間砲發孰レカ先孰レカ後分明不相辨風聞も有之臣慶邦御沙汰之趣を奉伺□布告之旨を信し候ニ之曾而
無御座候へ共砲發前後判然不相辨ニより人心疑惑十二八九之可有之人心一定不仕一條ニ御座候德川祖先數百年之禍亂
を定撥亂反正大勤勞ハ今更申上候迄も無之累世偃武仇文海内を鎮靜仕候事既ニ二百餘年之久ニ及び運澆李ニ屬し武威
漸々遂シムラサ嘉永六癸丑年以來外夷陸續紛至人心拘々然ルニ其間ニ之幕府所置不得宜を失體不當之義不少も可有之
候得共今日ニ至既ニ政を一ニ歸しそ公平正大之旨を以て 皇國を奉安爲ニ政權を 朝廷ニ奉歸し候上之又何事を企望
仕 朝廷ニ可奉叛哉人心之疑惑十二八九ハ可有之是人心一定不仕二條ニ御座候方今 王政復古紀綱一新萬民利目之
盛運ニ被相當繼大立極萬世無究之御大策を被爲立誠ニ親民赤子ノ如ク民ノ奉仰 朝廷又如父母一夫其所を不得者あき
を歎慕仕候折柄一朝海内之兵を被爲動無寧之萬民水火塗炭之苦ニ落入候段可憐之至必幼帝之聖慮ニ被爲出候ニ之
有之間敷と人心之疑惑十二八九ハ可有之是人心一定不仕三條ニ御座候慶喜既退去仕候後泰。不動恭順罷在候由然ルニ
先年毛利大膳大夫家來共於闕下砲發仕候段之時卒爾之誤一旦 朝敵之汚名を蒙り候得共眞情實意明白ニ相顯候上ハ
寛大之 御仁恕を以復古入京御免し被成下候御儀慶喜とても一旦祖先之大功を被爲棄徒ニ發砲之前後を以叛名を被爲
候抑又外夷御交通之儀追々御多端ニ被爲成當今既ニ十餘國ニ茂相及當時而一旦天下之兵を動し四海鼎沸之勢ニ至る
上之渠等ニ雖必坐而傍観之仕間敷各國帝王之指揮を受ケ如何成る舉動ニ及候も難計然時之御國辱を宇内之萬民ニ流被
爲候姿ニ茂相當人心之疑惑のミあらす寒心杞憂痛哭仕候者又十二八九之可有之是人心一定不仕五條ニ御座候彼是を以
深思熟慮仕候ニ 朝廷より出師追討之儀暫御用捨被爲在慶喜等御讀責之儀廣く諸藩之論定を被爲盡天下共ニ正大公明
無偏無黨之公論ニ歸し候御處置被爲在候ハ、必しも不勞六師彼自ラ服從可仕此段窃ニ奉懇願候古語ニ茂卿德不輝兵ヲ

月 日

仙 豈 中 將

〔防長回天史 第六編上〕

(奥羽錦撫使ト仙藩抄略)

先主之義徳と仕又要晋公の處置得宜能服其心と歎申格言も御座候得之是等の處に御目的を被爲注王政復古曠世之御成
業御大成破爲在候様仕度臣慶邦微衷御諒察偏ニ奉希候若一旦勃怒萬民不服をも御問無之躁急御追討ミ申事ニ而之諸
藩之向背難計海内分裂群雄割據慶元以前二十倍せるの大亂を醸し外夷是を加其畔を伺ひ 皇國未曾有之事變を生し却
而轉福爲禍ミ申物ニ而千萬非計之得者也臣慶邦窃ニ心ヲ痛恐懼仕候不肖之淺見菲論極而御採用ニも相成間敷ミ之覺悟
仕候得共如是御盛運之機會ニ默止仕候而之却而不忠之筋ニ茂相當可申不顧越俎謹而奉言上候臣慶邦誠恐々々頓首謹言

四月六日北陸道先鋒兼鎮撫使總督高倉永祐同副總督四條隆平千住より淺草木願寺へ轉營す

〔一新錄白紙狀〕

明 治 元 年

三九五

(四月八日關東發淺井新九郎來札抄略)
三道之請勢追々と江城に參屯ニ相成東街道前文之通池上東山道新宿より近日尾州屋敷に屯集北陸道淺草本願寺に一昨日參屯ニ相成申候三道共ニ只今者鎮靜ニ有之候云々(九日千束町六郷兵庫頭ノ邸ニ轉ス(防長回天史))

四月七日本藩末家細川利永下國せんとして京都を發し大坂に赴く
(京都并江戸返達御用狀扣)

末家細川若狭守儀是迄江戸定住之處此度家族並家來之者一同彼地引拂越中守國許に引越ニ付住居向等取極之爲一先賜御暇候様奉願候通被仰出難有仕合奉存候右付而者家來之者共ニ茂同様住居向等取極候事ニ付兼而御届申上置候若狹守家來在京銃隊共昨七日御當地出立下坂任せ候儀ニ御座候此段御届申上候以上

細川 越 中 守 内
林 新 九 郎

四月八日

四月七日元代官管轄地の石高地圖等調査すへき旨我藩に達せらる
(王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣)

四月七日太政官代ニ御呼出御渡之御書付寫

細川 越 中 守

先般差向其藩ニ元代官支配地取締被仰付候ニ付而者長崎裁判所附屬判事之内巡村可致候間石高地圖之議萬事立會之上吟味可致様被仰付候事

四月

四月七日列藩及ひ諸領地の村高帳其他諸帳簿寫を提出すへき旨の令達あり

(京都并江戸返達御用狀扣、王政復古帳)

四月七日太政官代ニ御呼出御渡之御書付寫

一諸國萬石以上以下私領並寺社領共是迄幕府に差出候振合を以村高帳寫相添急速民政役所に可差出事
一諸國之内元幕府より預所並元郡代元代官支配所藩々に取締被仰付置候向共左之帳類寫相添急速民政役所に可差出事
但御領所無之向者其旨可申出事

村高帳

昨卯年取箇帳

村鑑帳

但帳類美濃紙ニ可相認事

右之通被仰出候間不洩様可相達事

四月

四月七日本藩は一昨年來我領内に避難滯在せし小倉藩主小笠豊千代丸の歸邑したる旨を申告す
(京都并江戸返達御用狀扣)

小笠豊千代丸殿御事去々寅秋以來越中守領内に御逗留之處此度領内御發途御歸邑ニ相成申候此段御届申上候様申付
越候以上

四月七日

細川 越 中 守 内

林 新 九 郎

明治元年

三九七

〔全書〕

(四月十八日林村上より聞四月十日着の内)

一小笠原豊千代丸様此度御領内御發途御歸邑之山右ニ付御届等之事縣合來候處未被仰付越之無御座候得共彼方一同御届有之方々申談別紙之通書付寫一通并彼方御届書寫一通差上申候(別紙之通書付とは前掲文にて彼方御届書寫とは三月十二日の條に掲げたる小笠原豊千代丸の歸邑相書のことなり)四月八日諸侯の家族及び其臣隸の江戸に在る者の歸邑を獎め且つ其異同等を内國事務局に申告すへしとの旨達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣、王政復古帳〕

四月八日太政官代より御呼出御渡之御書付寫

今般王政御一新殊更當節關東に進軍ニ茂相成候事ニ付元幕府之制度を以諸侯家族並家來共定府罷在候面々國元在所々々に速ニ引取被仰付候者勿論右御沙汰を不待歸順之道相立疾速引取候向茂有之哉ニ相聞へ尤之次第ニ候就而者御一新後引拂又ハ只今居残り等委細之儀來ル十二日迄ニ内國事務局へ申出候様被仰出候事

但十二日以後引拂之向者其節々更ニ可届出候事

四月

追而主人在國在邑之向者道程遠隔急速取調難相叶儀等茂可有之候ニ付右御布令速ニ申達精々相調可届出候事

〔四月八日三道出兵の宿驛通行及び給與規則を發布せらる〕

〔王政復古帳、太政官日誌第十〕

三道出兵之内於宿驛往々姓名ヲモ不申聞無替錢ニテ宿駕籠等申付不法之振舞有之宿々村々大ニ相困ニ候段相聞ヘ萬民御安撫之 収旨ニ背キ候次第甚以如何之儀ニ候依之今般別紙之通御規則被相立候條諸軍一同嚴重可相守旨御沙汰候事

右規則之通固ク可相守者也

一行軍之節駕籠一切可爲停止事

一病氣足痛等候ハ、驛所々滯在加療養平徳次第其手々々へ可致參陣候事

一軍醫診察之上急ニ出陣難相成病症之者ハ其筋々へ可送返事

四月八日

一日壹人ニ付

一白米

六合

一金

壹朱

右之通諸軍一同現人數ニ應シ落々頃立候者ニ十日分宛出張之會計方ヨリ可相渡候事

四月八日

四月八日去る六日の觀兵式に参列せし我藩兵隊に慰勞として酒饌を賜ふ

〔若殿様左京亮様御瀬坂中日記〕

四月八日

今日行在所辨事局より御留守居御呼出去ル六日銃陣訓練之節大義ニ被思召御酒肴料五千疋下賜候旨ニ而別紙御書付御渡ニ相成たるよしニ而達有之候事

肥後

兵

隊

去六日城内 行幸之節銃陣訓練大義ニ被 思召乍聊酒肴下賜候事

四月

四月八日本藩は豊後府内藩士の依頼により目下謹慎中の其主大給左衛門尉を覧典に處せられたき旨の歎願書を進達す

〔京都升江戸返達御用狀扣〕

大給左衛門尉様御家來惣代より之歎願書當藩迄差出候ニ付別紙差上申候者 前命遵奉之誠意委細書而之通相違無御座何卒御寛大之御沙汰被爲在度此段御内意奉願候以上

四月八日

秋願書寫

此度王政御復古ニ付世態御一新天下之蒼生奉洛洪恩難有御時勢ニ奉存候主人左衛門尉儀御趣意之顧末疾ニ拜承千歲一時之御機會急速上京王事ニ精勤不仕候而者寢食等於心不安候ニ付役義辭退申立候内兼而之資性病弱早春以來別而不相勝病床ニ困苦仕居連ニ發程難出來遷延候條只管憂憚罷在候私共ニ於而も御時勢柄上京急キ日夜焦思仕候得共生憎之所勞舉止不自由無其詮不得止打過候折柄病症少々快方ニ趣キ勉強直様上途京地到着仕候然處追而何分被仰渡候間其内謙慎罷在候様奉蒙御沙汰左衛門尉者勿論私共末々迄恐懼屏息仕伏而奉待後命候何卒此上宣洪裕大之御沙汰被仰渡候様御取成奉願上度私共悲歎款懇之至情御斟酌被成下蒙格別之恩貸候様叩頭百拜奉歎願候誠恐敬白

大給左衛門尉家來總代

細川越中守内

林 新九郎

四月五日

津久井四郎右衛門

(四月十日指)

四月八日本藩副奉行淺井新九郎官軍江戸に到着後の情況江戸本藩邸解放處分及び大島大砲隊増派の件等に關し在京重臣に通牒す

〔一新錄自筆狀〕

先月廿一日榮雲藤澤之驛へ相達悉々拜讀仕候如來示東西御兩殿様上々様益御機嫌能被遊御座奉恐悅候將各様愈御清康被成御執務珍重奉存候此許清水方一手無別條次ニ小生碌々依舊相勤在陳仕候付乍憚御休意被成下候様奉賴候然者先便得御意申候通存外永陳行ニ相成漸江戸へ進入之御沙汰ニ相成薩大村者增正寺へ宿陳長者下谷邊ニ宿陳其外高輪品川邊ニ茂滯陳仕候清水方一手者朝日藤澤發陳二日川崎泊三日晝比銀臺邸に着陣仕候付誠大安心仕候御門限等嚴重ニ取計于生邸同様出入改等ニ有之候貯之議者御屋敷へ入候而者御手貯ニいゑし小倉陳同様ニ談合申候事ニ御座候扳時體之儀茂追々相達候通愈以江城恭順之運大督府兩督府に相達既ニ四日先鋒督府江城に御入城有之勅諭被仰渡有之城渡軍艦渡茂今日カ七日之期限被仰渡候由ニ而御請ニ者田安様當時督府之宿營池上本門寺に御出之苦ニ御座候昨日御入城様子者被仰渡迄ニ而至而御速ニ御退城ニ相成靜實院官様ニ御料理被下候苦ニ御座候處督府御斷ニ而御退城ニ相成候御供廻も御輕隊ニ而諸藩兵隊等茂被召連無之候萬端御都合宜敷との趣尤參謀者四人西郷海江田木梨安場御供ニ有之候於江城被仰渡之趣ハ田安様御拜承ニ相成別紙寫之通ニ御座候請取渡無滞來ル十一日迄之期限ニ而相濟候様禮申候事ニ御座候會津も嘆願之趣神原家を以申出ニ相成初之文體者余程議論らしき事茂有之候付神原家より取次無之積候處恭順一邊ニ相成候付神原家カ取次ニ相成候由ニ承申候定而奥羽惣督府に茂嘆願差出ニ相成候事ニ奉存候併彼之藩固執之性ニ而如何ニ懸念仕候君御誠實と有之大分一統恭順ニ歸可申ニ想像仕候當時之形勢ニ而者先づ兵端發候儀者無之被察候得とも江城旗下之忿怒者愈以甚敷有之候由ニ而大久保勝房州鎮定專ニ候得共押ヘ兼候勢も有之併此節者何方迄も恭順ニ運可

申との議論ハ一定仕候由ニ而有之候へとも後來此毒釀成候處甚懸念之至ニ奉存候水府茂中納言様御歸國ニ相成此節如何之御様子ニ候や中納言様元藤田戸田等之黨を被用京都本國寺に罷在候者都而御舉用ニ相成結城派勢を失五百人計脱走いたし會津指而罷越候由ニ而水府も會津へ御使を以五百人之者共被差返候様御領ニ相成加之水府も人數被差越打取候様被命候由此儀者會津も處置次第ニ者紛擾ニ至リ可申哉も難測との趣ニ御座候此節慶喜水府へ御預ニ相成候様舊幕より先日嘆願有之候次第前文之通水府一圓藤田黨本國寺に罷在候者權を執候故慶喜大指水府へ被參候而も都合宜敷由ニ相聞申候三道之諸勢追々と江城に參屯ニ相成東街道前文之通池上東山道新宿も近日尾州屋敷に屯集北陸道淺草本願寺に一昨日參屯ニ相成申候三道共ニ只今者鎮靜ニ有之候薩者余程尖り居氣遣敷有之候處近來者西郷列も示茂いたし候由大分鎮靜ニ相成申候(本文中別紙寫あるは去五日登載せ)

一御屋敷々々此許物引拂ニ相成候砌夫々片付方も有之候得とも未始未付兼候處も御座候付幸此節相達申候間夫々御參談被成下候様奉頼候第一辰ノロ御屋敷御屋形向者御承知之通良材ヲ被撰今日ニ至迄少も損所相見不申何方へ御引セ御座候而も御用ニ相立候見込ニ御座候間仕手方に積らせ申候處取船積ニいあし候様仕候迄ニ長押付之處者壹坪五兩長押付是者共ニ茂積方いたさせ候管ニ御座候尤長局御臺所御長屋向者御作事も古く且先年地震ニ而損し迎も御引セニ相成候見込無御座候得とも御本殿向者誠結構ナル御作事ニ而何方へ御引取ニ相成候而も御用ニ相立候見込ニ御座候此儘被捨置候而者眞ニ残念之至ニ奉存候間萬々一京攝間御屋敷御取立之御用茂御座候ハ、右龍ノロ御殿向御引セニ而候由ニ付是者共ニ茂積方いたさせ候管ニ御座候尤長局御臺所御長屋向者御作事も古く且先年地震ニ而損し迎も御引セニ相成候ハ、新ニ材木御買上よりも御輕辨ニ相考申候立合せ之儀者濱町御殿御引取之立合を以御勘定御作事ニ目安可有之候間濱町御屋敷ハ御殿向都而御引セニ相成御腰懸御長屋九棟殘居候へ共材木根元宜敷無之何方ニ御引取ニ相成候而も御用ニ難相立見込ニ御座候付先御換御障子等取片付ケ船便有之候ハ、御積廻ニ相成候様取計置申候御小屋々々者追而任好御拂被仰付候而者何程ニ御座候哉白金御屋敷裏御居間方御玄關向御近習御次局々御臺所迄殘隨分材木も

四月八日

京詰 御奉行 中様

(一新錄探索報告、一新錄自筆狀)

追啓仕候江城の方も愈以恭順ニ運申ニ相違無之十一日迄ニ之御城者尾州に引渡候由大小炮器等清水方手よ請取候様督府御沙汰ニ付小人數ニ而請取ニ御人數内よ被差置候定府之面々被差置候様奉存候其外板御門外御買添町地者御年貢も懸候付一刻も早御解放ニ相成候様取計申候龍ノロ御殿向白金御殿向御解取之一條者夫々御參談之上尊聽御伺ニも相成候ハ、夫々御取計被成下急ニ被仰下候様奉頼候右迄飛脚差立申候付得貴意申候餘ハ後鸿ニ讓置候以上

淺井新郎

御肥部之出お邸齋二日海舟
門後鑑州日舊月
家でし訴時之藩號
益七八郎南所へ之藩號
滿左郎南所へ之藩號

増相達申候以上

四月八日

淺井新九郎

京都御奉行中様

其の休助を以て死べる事無からず
御座候へ所々旨に申れへに所々旨に申れ
預三ふ候頃を旨し御て々死べる事無からず
人此旨に申れへに所々旨に申れ
は某日に運し申れへに所々旨に申れ
るへ右叶

尙々先便得貴意申候通甲府分隊ニ付大島大炮手被差越候様相達置候處昨日使之者罷歸候へ共御受取迄到來仕候如何
之御様子ニ御座候哉當時之勢ニ而被差越不申候而も宜敷も御座候へ共甲府詰御番頭御物頭追々懸合ニ相成御備一備
御國許より被差越無之候而之甲府守衛難出來有之杯之論說申越ニ相成斥候も追々差越御許ニ直々罷越是非御一備被
差越候様言上仕度段論説蜂起大心配仕候而漸說得仕候事御座候續而大島大炮手甲府ニ被差越候様猶甲府より申越是
又強論ニ而最早大島大炮手被差越候様申越候ニ付此許着次第甲府ニ被差越候様清水方より口達ニ而治候位ニ而御許
御差支無御座候ハ、大島手急ニ被差越候様御參談被成下候様被頼候右甲府分隊之儀ニ付而之大迷惑之事ニ御座候御
儀之可然様被仰合御評決奉仰候御許も御下坂等ニ付而之御配意之事而已深遙察仕候隨而御人數も御十分詰込無之定
而大島手も大坂ニ御供ニ而被差越候様相考旁此許ニ被差越候様得御意候而者御心配と拜察仕候前文之通ニ而戸塚驛
より相達候時勢と之今日ニ至り而者大概無事ニ見込申候付先者大島手被差越無之候而も宜敷見込ニ御座候付於御許
御評決被仰付越候様内分得御意申候間可然御參談被成下度様奉頼候已上

四月八日本藩横井平四郎徵士の命を帶び上京の途に就き凌雲丸に塔乗して百貫石港を發す又本藩京都遊學生江村悰益之に同乗す

(京都江戸狀扣)

(從慶應二丙寅年正月至明治三年)

横井覺之助支配

横井平四郎

沼田勘翁由

沼田勘解由

江村悰益

右者出京被仰付置候付明日爰許被指立候此段爲可申達加是御座候以上

四月四日

溝口孤雲殿

米田虎之助殿

三宅藤右衛門殿

(若殿様左京亮様御滯坂中日記)

右者京都に遊學被仰付置候付明日爰許罷立候此段爲可申達如是御座候以上

四月四日

溝口孤雲殿

米田虎之助殿

三宅藤右衛門殿

猶々悰益儀今度凌雲丸大坂に被差廻候節乘組被仰付船路被差越候様願之通及達せ明日出帆之管候以上

横井覺之助支配

(出京被仰付置候付四月五日、御國出立

同十二日滯坂添狀一通達有之候事

横井平四郎

四月五日也

四月八日ニ延也

猶々平四郎儀今度凌雲丸大坂に被差廻候節乘組被仰付船路被差越候様願之通及達せ明日出帆之管候以上

江口純三郎

四〇五

右者横井平四郎出京被仰付候處同人儀老躰之上近年病氣勝ニ付自勘ニ而付添罷登申度由願之通被仰付旨及達平四郎一同明日爰許罷立候段爲可申達如是御座候以上

四月四日

沼田勘解由

三 人 宛

猶々純三郎儀今度凌雲丸大坂に被差廻候節乘組被仰付船路被差越候様願之通及達せ明日出帆之管候以上

縫殿弟

下津鹿之助

右者下津縫殿方用事有之罷登候様申越候付岡仕度往來日數五十日程ニ相仕舞罷歸申度由願之通被仰付旨及達明日爰許罷立候此段爲可申達如是御座候以上

四月四日

沼田勘解由

三 人 宛

猶々鹿之助儀今度凌雲丸大坂に被差廻候節乘組被仰付船路被差越候様願之通及達せ明日出帆之管候以上

〔監察記錄 開元年〕

明治元年八月横井平四郎參與ニ御登庸後同人言行等ニ付御横目聞書(此文に前後あり其の書は八月二日横)

且又此節凌雲丸乗組ニ而江村宗益方同船有之別間ニ者有之候得共双方見へ懸ニ被居候由之處平四郎方らあの坊主者ごふした坊主歟と側ニ居候人に被尋名前承知之上追而宗益方を平四郎方部屋に呼寄不怪輕蔑被致あんたは何處に何仕ざやあ行クかあと歟尋ニ付京都に遊學ニ罷越候段返答之處何學問かあと猶尋ニ付經學修業之段被申出候由ニ而平四郎方ら此御時躰漢學者打ちよきふぞり廣く英學ふと2頁りがまだしふぞり位之會釋有之候由ニ而宗益方ニ者心中餘程被激

候得共其場者無異儀被退遣而平四郎方を見浦しあの人シふあごふした人シだらふかと右同斷被尋同人方と申儀聞取之上宗益方らの人のシが上道忘却した人シたいふあ始而面會いたし候と歟被申素平四郎方耳ニも入候由追而同人方を宗益方部屋ニ呼ニ相成同あんた拍子ニ而何方ニ被參候哉被得候處 朝廷方召ニよつて上京いたし候段被申出候付宗益方ら漢學英學之辨平四郎方謙遜之道も無之一身之修も出來兼候ほとニ而 闕下之事ニ關係候と者何ほとニ可有之哉早ふ御断ふぞりあとゝ其外段々輕蔑之返報ニ相成候由ニ而平四郎方大ニ立腹門第之宮川小源太方に歎あの坊主打が能ヘ位之口外有之候付宗益方ら之長袖之身分被打候ハ、取詮逃候カ外無之と耳いたを言葉茂爲有之由左候而着坂之上宗益方ら漢文を以平四郎方手許ニ兩度歎論章差送ニ相成候由委敷者聞兼候得共同人方ニ者素本藩世錄之士ムして一旦過を以黜られ庶人と成方今 王政一新 闕下ニ被爲召といへとも今猶計建之御政事各國之育成する處又自其主有 天子ニして藩臣を微す其命重しと雖も又宜一旦是を辭して禮を成そは人臣之義也况譴責之身已ム事を得をして之ニ赴る之又宜自憲自戒而自ら勝へたりとする事能を然らぞして嘗而一言之辭讓ニおよふ事を不聞又名不正則言不順言不順則事不成杯其外古典舊章ニ徵を引固陋を止めて英學ニ導かれ候事杯段々書綴ニ相成右之通差贈ニ相成候得共天下之大事ニ被係候小事ニ不被係自負之趣を以あの様ふ馬鹿者ニ者打合スかよい位之事ニ而返章も無之其儘打止候由平四郎方程之人躰卒發之輕蔑カ却而恥辱を被引起是等者童稚之せり合ニ均敷不似合而成事之由

四月八日本藩廳は内山又助の上京に託し徳川氏の處置公平に出てなは會津藩亦悔悟恭順の道に至るべきにつき益々寛仁の聖德を發揮して神州治安の基を開かるべく周旋すへしとの旨在京在坂の老臣に通牒す

〔一新錄自筆狀〕

内山又助儀今度凌雲丸乗組ニ而指登候ニ付至密得御意申候關東謝罪之一條ニ付而之委曲先便申置候通ニ候處去ル朔日

明治元年

四〇七

志方司馬助着直話之趣且大島吉之助登京ニ付山田五次郎同人より之直話承り候趣ニ而之慶喜公十餘分之恭順謝罪ニ而兵器大艦を茂差出ニ相成其身之水戸へ御退隱之管ニ有之旗下之士より自然官軍ニ對し不都合之次第茂有之候ハ、大久保勝兩氏官軍ニ加リ鎮撫ニ可相成との儀も申向有之由就而之朝廷之御處置寛大之御目算茂大略相立可申於御地之左京亮様方段々被仰合候趣ニ付愈以至當之御處置ニ相運候御事ニ恐考仕候間此上兎角之論ニ之及不申儀ミ奉存候得共ハ、自分悔悟恭順之筋ニ運ヒ可申必然之儀ミ被考申候間乍恐於朝廷茂蒼生塗炭之苦を被爲思召上益御寛仁之聖慮御擴充被爲在天下公共之御政道相立一刻も神州治安之御基業を被爲開度竊ニ奉懇禱候事ニ御座候尤會藩之舉勸等之數百里を隔現實之模様茂不相分事ニ付此許より強而喙を入候筋ニ無之實以至當之御周旋を奉仰候外無御座候最前澤村脩藏相含言上之筋も有之管之處司馬助着之處ニ而ハ脩藏罷登候ニも不及儀ミ此節之出京之被遊御免候併同人儀關東之事情ニも熟知之事ニ付自然之御地ニ被召仕御便利とも可相成哉ミ一旦右之通申談候事ニて候ヘとも御許之御都合ニ應御取扱ニ可相成候間嗣君ニ茂被奉伺急ニ御様子被仰越度存候其他又助に申含置候間直ミ御承知可被下候右之段迄勿々如是御座候以上

四月

溝口 米田 三宅 殿

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

出京被仰付置(四月五日)御國發
同十二日着(大坂)添狀一通達有之候事

明日實ハ被差延(四月八日)

御 家 老 衆 連 名
内 山 又 助

四月九日本藩偵史江戸の情報を通告す

〔一新録探索報告書〕

四月九日江戸出便

一水府表諸生組不殘會津表へ脱走ハ久し天狗組御城中に入居候由

一結城表ニテ動搖有之是ハ家中土ニツニ割取含有之城中燒拂候由此節ハ鎮撫之趣ニ御座候

一奥羽之禁錮ニ候由會藩大憤激ニテ勅使入込候事難出來趣動も久し候ヘ之右邊より相破可申由ニ御座候

一別帝御ケ條内軍艦銃炮御引渡之儀之餘程六ヶ敷此邊より不慮之儀出來可申裁之見聞ニ御座候

一上様茂水戸表へ七日比御退きニ相成候處御延日ニ相成未タ日限ハ不定何歟御模様之變し候事歟と恐愕仕候

一橋本柳原兩卿池上本門寺宿陣

一長州ハ青松寺

一薩西郷ハ増上寺地中ニ罷在候由

一御處置一條ニ付勝安房守骨折損合之山ニ御座候

右十七日着

四月九日伊達宗城書を長岡護美に贈りて佛國軍艦見學に誘ふ

〔子爵長岡家文書〕

昨夜ハ感謝々々乍然滿堂香客之英氣ミ酒力中々不可當タルフル組ハ閉口其上烏万坊等賢卿御歸後遺感不少候拔昨夕佛船將より堂上見物スハ何日頃御出候やと尋越候故斷も六ヶ敷と考候仍而明後十一日第十時夷島連上所へ相捕可申候尤莫軍艦モ五六日間スハ可參故此間より被參度との堂上九人程と存候間五人と御互と奥平都合八名ニ可決候條烏卿杯御

相談名元可被仰下候尤別段僕よりハ諸卿へハ不及通達候此段得貴意度如此候已上

四月九日

伊

長左 盟臺

四月九日水戸藩故武田耕雲齋子武田金次郎國論反正の朝命を奉し京都を發して水戸に向ふ
〔一新錄探索報告、若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

辰四月九日水府武田金次郎耕雲齋二男京師出立東下之事

右之先達而北陸道惣督岩倉殿越前敦賀御通行之節筑波山脱走之武田耕雲齋徒黨之墳墓を御覽有之賊名を記したる標幟被爲棄猶其砌生殘之者有之者早速京師に爲登候様被命若州藩ニ御預ニ相成居候百人餘之天狗組武田金次郎を始として上京ニ相成り於京師三條殿岩倉殿松尾但馬三名ニ而水府御處置之談判有之候處三條殿ハ水府京留守居大野健介より情實を聞取岩倉殿ハ大庭主膳正より聞取松尾ハ井上謙藏より聞取各聞取人之違候より處置ニ緩急之異論有之詰り松尾之此上ハ 勅命を以水府姦徒を除却無之候而ハ國中反正之運ニ不相成說ニ相決シ即チ武田金次郎ニ 御旗を賜り國中反正之上ハ早速復命可致旨 勅命ニ而今般東下ニ相成り因備ニ藩ハ金穀御用被命猶ニ藩よりニ小隊宛附屬被申付候由

右米澤宮島熊藏之間取書寫ス

四月廿二日

首藤敬助

四月九日舊幕臣勝安房大久保一翁大總督に至り江戸城及び軍艦兵器を田安家に保管せしめむこと及び尾張元千代を徳川氏の相續者たらしむることを歎願し且つ既に引渡したる護送船の返付と生計に窮せる歩卒四千名の引渡とを請ふ翌日皆之を聽許せらる

〔海舟日誌〕

○九日 陸軍總裁白戸酒介海陸軍一同之歎願書持參謀へ差出奥へく旨申聞ける其大意は城地尾藩へ御預之儀應命し難く田安殿へ相應度事軍艦武器御取揚同斷且御相續尾州元千代殿と云下説承及玄此儀に候はゝ一同不應命云々等也本日一翁同伴池上へ行く御先鋒柳原岩倉本ノマ兩卿御旅館參謀海江田武次木梨精一郎へ面會一同之歎願書猶申旨あり參謀云此事京師之被抑渡にて今更如何とも難成其内元千代殿御相續之事はかつて無之處此儀兩子是を請合と我申て云軍艦にあらざる護送船は御引渡不申積あり差出候内右等は御戻下され度あり且武器に就ては歩卒四千名皆倚る所無きの徒あり是等小銃と共に御引渡申度事あり然らばは生産を失ん我亦空敷養ふべき力あしゆへに車所之員を記して其儘御引渡可申ぶり然るべからむには事迅速に辨じ歩卒饑餓之憂ふし城地之如きもまた然り櫓門藏舍之雜具に到ては實に運輸すべき日ふし是亦其儘御引渡之式而已にて止まらむ歟今日に及て亦如何せむ哉と彼答て云此事兩子の決し難きの儀あり乞ふ明日諸參謀に計りて決答に及ばんと云

○十日 池上へ行く昨談せし處皆良と云如斯あらば事簡易にして成り易く且人心動搖せず下卒生活を得尤所置の可然處しむへく豫しめ示達せらる

〔王政復古帳〕

辨事お御渡ニ相成候御書付寫

諸國大小之神社中佛像ヲ以テ神體致シ又ハ本地杯ト唱ヘ佛像ヲ社前ニ掛或ハ鷲口梵鐘佛具等差置候分ハ早々取除相改可申旨過日被仰出候然ル處舊來社人僧侶不相善水炭ノ如ク候ニ付今日ニ至リ社人共俄ニ威權ヲ得陽ハ御趣意ト稱シ實ハ私憤ヲ霽シ候様之所業出來候テハ御政道ノ妨ヲ生シ候而已ナラス紛擾ヲ引起可申ハ必然ニ候左様相成候テハ實ニ

不相濟儀ニ付厚ク令顧慮緩急宜ヲ考ヘ穩ニ可取扱ハ勿論僧侶共ニ至リ候テモ生業ノ道ヲ不失益國家之御用相立候様精々可心掛候且神社中ニ有之候佛像佛具等取除候分タリモ一々取計向伺出御指圖可受候若以來心得違致シ粗暴之振舞等於有之ハ屹度曲事ニ可被仰付候事

但勅祭之神社御宸翰勅額等有之候向ハ伺出候上御沙汰可有之其餘ノ社ハ裁判所頭臺領主頭等へ委細可申出候事

四月

今日大政官代ニ御呼出ニ付罷出候處辨事局松室甲斐會計局松尾上野ヲ以御書付一通宛御渡ニ相成候間則寫相達申候以上

四月十日

林 新九郎

御奉行衆中

四月十日大坂銅會所設置につき心得方を布達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

四月十日太政官代ニ御呼出御渡之 御書付寫

此度御一新之折柄大坂銅會所御取立ニ相成候ニ付而者兼而舊幕府より相觸置候諸國出銅者勿論古銅地銅ニ至迄右會所ニ屹度可相廻事

但大坂表ニ運送ニ指支之廉も有之候ハ、其旨銅會所ニ可届出事

一外國人は勿論自國たり共銅直賣不相成若心得違之者於有之者銅取揚之上急度御沙汰可有之候事

一荒銅諸山元ニ而勝手ニ吹立諸器物等ニ仕立候儀者不相成候事

一諸國より大坂表ニ荒銅積廻候節者其船問屋方員數並送狀とも時々銅會所ニ可届出候事

一荒銅古銅御買上直段之儀者外國並諸方に御拂ニ相成直段ニ應し時々相定候事

四月

四月某日政度事務局權判事井上石見の建言に基つき人工を省き國財を殖する策及び總て皇基を固くする經論の策等施行せらるべきにつき憚らす願出つべき旨達せらる

〔太政官日誌第十〕

蝦夷開拓ノ事ニ付器械ヲ製造シテ人力ヲ省略スルノ策急務ト奉存候旨言上仕候處其策何如ト更ニ御下問ヲ蒙リ不顧

愚計兼而書取ノ儘奉呈上候

蒸氣器械ハ俄ニ製シ難ケレハ先ツ水車ノ一事ヲ以テ考フルニ中等ノ車ニテモ六十白ヲ春ク故ニ一臼一人ノ勞ニ代レハ六十人ニ當ルノ理ナリ我國民ノ大數大凡四千萬人トスルトキハ一日二十萬石ヲ食ス一人白米五合ノ割一人ニテ五斗ツ、春クニシテ一日四十萬人ニ及フ試ニ右ノ四十萬人ニ雇錢ヲ與フルト見ルトキハ幾多ノ失費ノ失費ナルヤ其外酒造等ニ用ユル處ノ米穀ヲ加フルトキハ彌莫大ノ事ナルヘシ國財ノ本ヲ計ルニハ遠ク爰ニ眼ヲ着サレハ天下ノ富強ハ爲シ得サル「ハ必然ナリ假令ハ井中ニ梯子ヲ下シ水ヲ汲シムル家アラン誰カ是ヲ見テ愚トシ何故ニ井戸車ヲ用ヒサルヤト怪ミ問ハサル「ヲ得シヤ世人カ、ル一家ノ小費ハ悟リ易ク顯然タル國士ノ洪費ヲ厭ハサルハ歎カハシキ」ナレハ人皆一家ノ雇夫ヲ見ル如ク一國ノ人民ヲ愛惜シ追々器械ヲ以テ成シ得ル限リヲ極メ無益ニ人力ヲ費サ、ル様遠大ニ思慮ヲ盡サハ國家富強ヲナス」又何ソ難カラシヤ

右愚意ノ概略ニ御座候然ル處是迄一家生業ノ爲ニ水車ヲ營ン「ナト願フ者有之候テモ地所等ノ故障ニ事寄セ賄賂ヲ得サレハ許サ、ル者有之哉ニ承リ候右等ノ者ハ天下ノ大益茲ニ出ル「ヲ知ラサルハ勿論ニ候得共以來右ニ不限願意ノ筋ハ公私輕重御勘辨ノ上國家有益ノ事ハ速ニ御差許ニ相成度尤下ノ願ヲ不被爲待 官府ノ御計ニテ十分御手ヲ被着候ハ、此上ニナキ御事ト奉存候謹上敬白

右建言ノ如ク人工ヲ省キ國財ヲ殖スルノ策於朝廷速ニ御採用可被爲在候間是ノミニ不限總テ皇基ヲ固クスル經綸ノ策ハ御施行可被遊思食ニ候條上下一同深ク相心得願意ノ筋有之者ハ無懸念可申上様被仰出候事

四月十一日東本願寺掛所に行幸ありて演武講文を聽はせ給ふ

同十一日巳ノ刻東木願寺掛所へ 行幸被爲 在議定參與之面々御對面アリ夫ヨリ假ノ演武場へ 臨御被爲 在辱クモ
玉簾ノ中ヨリ御親兵ノ演武ヲ 天覽被爲 遊相濟ミ 入御續而讀書講義ノ事ヲ被 仰出御座ノ間ヘ被 召出親ク
天顙ニ呪尺シ奉リ講義ヲ始ム松浦肥前守大學ノ三綱領ヲ講シ田中國之輔孫子ノ謀攻篇新田三郎三略ノ上略ヲ講シタリ
斯ノ如ク文武之道ヲ偏廢ナク益々盛ニ興サセ給フ厚キ 思食ノ程誠ニ有難キコトナラスヤ申ノ半刻ニ至リ御機嫌能
還幸 在ラセラル

四月十一日來十四日大坂元陸軍
〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

來ル十四日卯半刻捕於元陸軍所供奉之各藩諸兵調練被
仰付勅裁並軍防局爲見分可被差出旨 御沙汰候事

但雨天之餉也更可

一來ル十四日各藩兵隊揃場所之儀者元陸軍所近邊ニおるて各藩標札ヲ立置候間其本に可致市集候事一腰兵糧用意之事

卷之三

一、各藩兵隊操練之順序

第一

市喬下總一任

第二
備 前
侍 一
從 手

北條相模一手

森
對
馬
守
手

第三 德川元千代

松浦肥前守

池田攝津守

毛利讚岐守

一手

松平圖書頭

一手

第七 藤堂大學頭

一手

加藤能登守

一手

右時刻之指揮ニ隨ひ第一進之操練場ニ入る訓練終而屯所ニ歸る第二代り進而操練場ニ入る第三方第七ニ至ル迄皆準之
一各藩操練相濟次第罷歸ル儀可爲勝手候事

以上

四月十一日官軍江戸城を收む此日徳川慶喜水戸へ退去す

〔海舟先生水川清話〕

慶應戊辰年四月十一日江戸城引渡附慶喜公へ言上の記

我江戸城引渡し之事四月十一日をトす十日夕刻池上本門寺先鋒總督に談判し直ちに上野大慈院に到り其顛末を上言す
是れ主公謹慎の院也院内疊六ひらの小室あり主公當正月以來未たかつて安眠飽食一日もあらず面瘦枯瘦を見る我其胸
裏を思ひ少隙を見て顛末を述ぶ少しく降心あらむを思ふが故あり此時君上我に向ひ仰せて曰く嗚呼危哉々々若し如此
あらば災害足下に生ぜん如何そ諸官に告げ市民に觸れ兵隊を警め人選して其不虞に備へざる汝が處置甚だ粗暴にして
大膽あり且つ談判其順序を不得今にして如何せん我心裏を貫かずして斃れんかと血涙如雨我れ是れを伺ひて心膽共に
碎け腰足麻痺せり忽として悟る所あり回答して曰く嗚呼君上の言誤て二月御決心の際大事を任する人ふく我れ微力
爲すあらざるを以て御受に及ばず然るに強てとの命終に今日に及ぶ其時上言す今日より後ち大難事或は大變に及ぶと
も決して決して上言御指令を用ひざるありと主公仰せに素より然りの言あり今日にして言上するものは主公の御胸裏

を恐懼し黙止する能はざるに因るか爲めあり府下百萬の民生死之分今一日に臨む我れ今日敢て恐懼の念あらむ哉と且
つ申し且つ爲し席を起きて城外に向ふ此際の愁苦誰にか告げ誰にか語らん此時の實際城内の事並に官軍の舉動万般を
擔當せり今にして當時を回想すれば是れ夢中の大夢我が天壽を縮す幾歳歟不可測あり

〔一新錄探索報告〕

西卿吉之助より手ニ入候書付寫(抄略)

一同日未明慶喜水戸に退去之事
一同夜歩兵五百人脱走之事

一十日夜歩兵二千人餘脱走之事

一一日東海道諸軍一齊して城井兵器無滞受取候事

但城尾州に御預之事

〔全書〕

江戸聞取

一公邊諸方之火薬藏不殘官軍に御引渡ニ相成且激徒之暴動有之候ハ、慶喜一手ニ而打取可申候若手ニ餘り候ハ、官軍助

*力致候由總督府嚴命

一昌平橋學問處迄も其儘引渡不苦公邊も被仰出候事

一軍艦十七艘品川沖に繫船有之候右之此節 朝廷に差出候積り之由

右中津ヶ聞取

四月十二日

〔海舟日誌〕

十一日 御城武器等引渡済む 君上拂曉御發途

明治元年

〔淺井鼎泉記録〕

さて諸藩の人数茂江戸に入込まれば御國の御人数ハ白金御邸に本營を構へ江戸城引渡の際は受取方命せられ候ニ付清水數馬方惣人數を率ひ受取に相成候城門の鍵其外諸道具等概略受取相済候諸所の警衛に御人数不足致候ニ付只々要所々々を堅めて惣督府の下向を待つ

〔記録 安田家 明治元年關東征伐事件覺書〕

四月十日 明十一日江城受取ノ達アリ我カ大砲隊ニ兵器悉皆受取ルヘキ旨示達アリ此夕該事件ニ付田安殿へ手續打合セノ爲メ物頭山路太左衛門大砲隊長安田源之丞へ歩小姓高山秋藏ヲ差添ラレ出張田安殿監察役鶴殿團次郎へ面會ヲ遂ケ打合セヲ了シ歸途一石橋際ニ於テ脱走幕兵ニ擁セラレ既ニ三人共復命ヲ果ス能ハサル危難ヲ漸クニシテ免レ馳歸リテ其旨ヲ總督府へ申告ス仍テ明日ノ江城受取方軍隊ヲ以テ處置スヘキトノ急命アリ

全十一日 當藩ノ各兵午前六時銀臺邸ヲ繰出シ櫻田門前ニ整列ヲ爲シ入城ノ時刻ヲ待ツ内幕吏麻上下ヲ着シ出迎ヒ城郭ハ尾州藩ニテ受取り兵隊銃砲ハ城内外トモ當藩ニテ受取り歩兵ハ物頭ニテ手分ヲナシ受取ノ順序ニ及ヒ砲器類ハ佐土原ノ五藩ナリ午後四時過受渡シ方全ク結了歸邸ス無程急使來テ報スルニハ物頭山路太左衛門手ニテ受取リシ三番町ノ歩兵不服ヲ鳴ラシ暴舉ニ及ハントスル况狀切迫ナルニ付我大砲隊ヲ繰出シ應援スヘキ命アリ依テ迅速ニ半隊ハ田安門ノ方位ニ向イ半隊ハ半藏門ニ向イ出張シ屯所ノ舉動ヲ偵察セシ處該歩兵隊長ノ配神ニテ少シ人氣鎮マリシ旨ヲ聞キ又山路ヨリモ密カニ其旨ヲモ申越タルヲ以テ先御末藩永田町宇土侯邸ニ引揚ケタリ此夜暴雨ニテ進退殊ニ難儀ニ及ヒシナリ

〔若殿様左京高様御滯在中日誌、一新錄自筆狀〕

(四月十四日淺井新九郎より京懇詰奉行に通報書抄略)

(前略)此許形光追々錄上仕候通順之運ニ而一昨十一日城並兵器受取可申旨ニ而城之尾藩兵器者清水方手ニ受取可申候様督府より御沙汰有之猶銃卒之兵器人共ニ受取候様御達ニ相成十一日朝五ツ時御屋敷押出尾薩長備前佐土原大村一同押出櫻田御門より進入薩長佐土原大村尾州清水方手備前大手之方より櫻田御門に順々備を立候而城方より大藍鶴殿團次郎麻上下着官軍案内ニ付尾藩一小隊位人數御城内繰入所々受取有之清水方御人數二十五六人入城兵器受取手數終而尾藩に引渡申候左候而兵隊西丸下閣老屋敷に千人計横山助之進御物頭寺本受取龍ノ口傳奏屋敷二百餘野田吉海受取小川町五百人計佐分利加左衛門堀十左衛門受取九段坂に六百人餘山路太左衛門清水方手之者を添受取相済候而清水方夕七時比御屋敷に歸陣ニ相成候一應右之次第は相濟奉恐悅候大安心仕候へ共兵隊大人數受取人數少ニ而直ニ守衛誠ニ心遣仕候處幕頭ニ相成追々注進有之九段坂兵隊小川町同激徒之由ニ而餘程沸騰いたし候由ニ付大砲手一手夜半ニ九段坂に應援之爲繰出且斥候島田次兵衛田安殿に益田勇大監堀鏡之助に遣し右之様子爲斗申入鎮撫ニ相成候様相談いたし双方共ニ委細承知ニ相成左候而大砲手と斥候を懸候處九段坂の方至而靜ニ付永田町宇土御屋敷繰込申候小川町之兵隊は晩景ニ不殘脱走いたし殘縫ニ相成候跡は靜謐ニ相成候十二日朝ニ至り何方茂漸々居合申候得共内々者不穩様子茂相聞申候右之通ニ而受取候而々終夜眞ニ心配は難申盡決死之覺悟計ニ有之御遙察奉仰候(以下十二日朝幕府軍鑑)

〔一新錄探索報告〕

一肥前江藤春平去ル十二日江戸出立昨廿日着坂畠之趣ニ之四月四日東海道先鋒惣督御入城五ヶ條謝罪之稟翌五日を日敷七日を限り夫々御請申上候様御申渡一橋中納言殿より一々御請ニ相成同十一日期日ニ至り慶喜之水戸に出て供廻り千人外ニ千人之刀根川・川舟(トニ付)首藤(トニ付)・ト云ニ而水戸に相廻り候由城之尾州に御預ニ相成尤城内ニも屯集之兵有之候處是之御國に御預ニ相成候哉之由官軍に差出候兵器も御國に御預ニ相成候哉之由旗下之兵並會兵處々ニ屯集罷在候得と

も追々御手も被付候由然處軍艦八艘官軍に差出候筈之處十二日晚ニ至り壹艘も不殘遁去り候由何方か參り候哉相分不申何之和泉守と申者巨魁ニ而乗り造候由右ニ付一橋殿マ恐入候との御書付差出ニ相成居候由

一水戸市川三左衛門黨も會津に脱走相違無之由

一肥前侯之去ル十四日三島ニ而江藤御行合マ申候由

一大惣督ハ十四日ニ池上本門寺に御着陳之由

右之通承り申候以上

四月廿一日

首藤敬助

四月十一日本藩井上多久馬に長崎遊學を命ず

〔遊學一卷帳〕

學校方

御奉行中

御家來井上多久馬儀爲遊學長崎表に被差越候條此段可被成御達と奉存候以上

四月十一日

長岡監物殿

學校方

御奉行衆中

四月十一日薩藩士大野五左衛門大坂に至り會津兵勢强大なるを以て薩長の精兵を増遣せられん

ことを請ふ

〔一新錄探索報告〕

二ツホール御船に薩藩大野五右衛門乗組當月五日奥地相發シ石炭拂底ニ付同十日和歌浦迄着今十一日五右衛門同處相發シ早駆ニテ此表(坂)に罷越候事右之會津兵强大ニ有之其上仙臺兵之儀之古筒弓矢之備所詮官軍勝算之見留メ無之ニ付薩長之精兵御召寄之由ニ而五右衛門罷越候趣同人家來より當邸詰に急内諭有之候事ニ候此段申達候事

四月十一日

尙々水戸肥前紀藩桑名等會軍ニ相屬し候趣五右衛門家來物語之事

右說四月三四日頃

四月十二日蝦夷地開拓の爲め箱館裁判所を設置し議定兼軍防事務局總督仁和寺宮嘉彰親王を總督とし清水谷公考土井利恒を副總督に任せらる親王は之を辭し舊官に復せらる

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

覺

蝦夷地惣督等御下向ニ付

御警衛御蒙之藩

南部美濃守様

津輕越中守様

佐竹右京大夫様

内國事參與

薩藩

井上石見

内國事掛權判事參與元阿州藩當時清水谷殿御家司

明治元年

藤(敏助)

首

右仙臺藩より借り寫ス

四月廿二日

〔防長回天史 第六編上〕

(箱館府ノ設置頃未抄略)

關東未タ平定セサルトキヨリ 朝廷既ニ蝦夷開拓ノ議アリ此年三月九日 天皇親ク太政官代ニ臨ミ蝦夷地開拓ノ得失ヲ諮詢ス群議其利ヲ陳ス四月十二日ニ至リ箱館裁判所ヲ置キ定議兼軍防事務局總督嘉彰親王ヲ以テ總督ト爲シ清水谷公考正ノ子土井利恒能登守越前ヲ副總督ト爲ス親王之ヲ辭ス乃チ舊官ニ復ス十四日久保田秋盛岡部弘前、松前四藩ニ命シテ、戌兵ヲ箱館ニ置ク

四月十二日江戸三番町に屯集せる舊幕歩兵隊を勧討すべく我藩及び備前大村三藩に命せられ夜に入りて更に延期の令達あり

(安田家 明治元年關東征伐事件覺書)

四月十二日 明十三日三番町ノ歩兵當藩及備前大村ノ三藩へ誅伐被仰付旨達アリ其夜半關八郎助ヲ急使トシテ品川碇泊ノ幕艦取締方未定ニ付明日ノ誅伐ハ延期セラルトノ令達ナリト傳フ

四月十二日朝政一新の収旨を奉し簡易質略を主として大いに藩政を改革し門地執權等の習慣を廢し庸劣を黜け人材を任選して復古の趣旨を貫徹せしむへしとの奉書を下さる

〔太政官日誌第十、王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

四月十二日太政官より御留守居御呼出ニ而松室甲斐を以御渡之御書付一通(王政復古帳に)

先般 御誓被爲在候 御宸廟ヲ以テ御布告被仰出候通朝政御一新之時ニ膺リ總而簡易質略之思召ヲ以御國體御更張被爲在度トノ御事依テハ於諸藩モ御趣意ヲ奉體認速ニ政令ヲ大變革致シ奉安宸襟候様無之テハ不相濟次第勿論ノ事ニ付假令慶元以還受封ノ國法制令タリト雖モ當今之時勢ニ不相合ノ儀ハ斷然廢棄致シ一新ノ基本ヲ相立朝廷諸藩一致ノ全力ヲ盡シ候テコソ日新ノ聖業相建候御事ニ可有之然ルニ 朝廷將門ノ政權ヲ御取返シ被遊候テヨリ復古ト申候ヘハ只 朝廷ノ御事ノミト相心得候者モ有之哉ニ相聞ヘ甚以無謂事ニ候抑各藩収旨ヲ奉體認一新ノ基本ヲ建ルハ第一舊習因循ヲ看破シ賢才ヲ擧ヶ國政ヲ相革ムルニ在リ然ルニ諸藩多クハ任撰ヲ主トセハ専門閣ヲ以テ政柄ヲ爲執候ヨリ隨テ舊習難改姦吏難除ノ患可有之哉今般於朝廷モ攝籬門流ヲ被廢候程ノ事ニ有之候得は諸藩ニ於テ世祿家格ヲ以テ政事ヲ專ラニシ方今ノ事體ニ不相合有之或ハ庸劣其任ニ不堪向等ハ速ニ廢黜致シ非常拔擢ヲ以賢才ヲ登庸シ國政十分ニ改正致シ候テ皇國一體復古之御趣旨貫徹致候様 御沙汰候事

右之通被仰出候上ハ諸藩速ニ實効相立可申若容易ニ相心得猶因循ニ有之候向ハ品ニヨリ御取糺可有之依テハ追々諸國巡察使被差向改正ノ政績可被聞食候此旨相心得可申候事

四月

四月十二日本藩主慶順家族及び家來の江府引拂並に殘留者の居書を提出す

(機密間日記)

明治元年
今般 御一新後家族并家來共定府罷在候而々引拂又者居残等委細申上候様被仰出候趣奉畏候越中守家族之儀者文久二年十二月不殘江戸表引拂國許に引取せ申候且家來共之儀茂追々ニ引取せ其内差當候役向之者共計殘置候處右之者共茂先達而不殘引拂せ國許に呼下申候尤江戸表著提守東海寺塔中妙解院に墓所御座候付右爲番衛是迄定府ニ而差置候家來依田類右衛門里内官右衛門と申者當分殘置申候此段御届申上候以上

明治元年

四二三

四月十二日

細川越中守家來

林

新九郎

四月十一日在大坂本藩偵更首藤敬助舊幕兵の隊名兵數屯所等を報告す

〔一新錄探索報告〕

辰四月十二日

幕兵隊名並屯集所

海禪寺

一草風隊

隊長織田宮内少輔

三能嘉加郎

友成郷右衛門

一義烈隊

隊長益橋勘之進

佐藤太一郎

凡五百人計

一松平西福寺屯集

隊名不知 隊長村上一葉

醫師河玄了

築地八幡

一精銃隊

隊長飯家錘介

一勇剛隊

但散兵六小隊

一遊擊隊

屯所不分

一誠忠隊

肝煮陸軍隊取締

荒井甚之助

一護國寺

隊名不知

凡二百人計

一勇剛隊

屯所不知

一刀撰隊

凡六百人

一表銃隊

右同

一鉄器兼列砲隊

右同

凡三百人

一彰義隊

右同

凡五百人計

一大隊半

右同

一傳習步兵

右同

一大隊

右同

一見廻組

右同

二三百人

右同

一步兵

右同

五大隊

右同

四月十二日米國より舊幕府へ贈るへかりし軍艦一隻横濱に來航す

〔若殿様左京亮様御滯坂中日記、一新錄探索報告〕

一去ル十二日比米利堅より鐵造軍艦壹艘横濱に着仕候右之舊幕に進物として持越し候處今日之形勢ニ而ハ如何相成リ

可申哉と英國剛士噂仕候

一佛國公使是迄之者ハ本國に引取爲交代「ウットレイ」と申者近々來朝仕候筈之由右英國剛士噂仕候

四月廿二日

首藤敬助

四月十二日舊幕歩兵奉行大島圭介は福田八郎右衛門等と兵を率ゐて江戸を脱す

〔海舟日誌〕

一十二日（前略）撤矢（撤兵カ本）頭福田八郎右衛門江原鑑三郎等其組下を引きて上總下總へ脱走す歩兵頭輩先日已來脱する者不少

明治元年

四二五

〔大島圭介述
幕末實戰史〕

慶應四年春四月十一日夜第二時と云ふに木村隆吉(元佐倉)と共に一僕虎吉を従へ行李僅かに一個を携へて駿河臺なる舊居を出て、同志の輩と豫て約せし所の向島なる小倉傍の傍に到り衆人の聚屯所を訊ねたるに更に其の踪跡を見ず依りて、直に土官兵上の聚屯所に赴かんとて、報恩寺に至り見れば本田幸七郎大川正次郎山角駿三郎其の外差圖役同下役三四十人歩兵大凡四百五十人參着せり、翌十二日早天兵隊を整頓して報恩寺を出て堅川通を経て葛西の渡しを越へしに甲冑を着け大身槍或は長剣を携へ大刀を佩びし武士十人計りに出會ひしが其の姿の如何にも怪しき故人をして問はしめしに福田八郎左衛門同志の者にて木更津に至るなりと仍つて我也此に今日出兵せる事を言ひ遣れり(中略)

市川の渡船場に至りし所小笠原新太郎舟を浮べて我輩を迎へに來り大手前の大隊並に其の外の隊も一同市川驛に集り居る故早く渡り給へと云ふ余此を聞き舟に掉して急き彼岸に達し驛畔なる小寺院に至り兵隊に晝食の令を傳へ置きて寺内に入り見れば各團擧して軍議をなせり其の人々左の如し

幕人 士方歲三、吉澤勇四郎、小菅辰之助、山瀬司馬、天野電四郎、鈴木蕃之助

會人 垣澤勇記、天澤精之進、秋月登之助、松井某、工藤某

桑人 立見カマ辰巳勘三郎、松浦秀八、馬場三九郎

而して其の軍議を聞くに今より行軍の順次を定め宇都宮に向はんと而して又衆人余が意を尋ねる故答へて曰く余元來兵隊を率ゐて此所に來りし所以は今直ちに戰争をなす積りに非ず先づ一旦鴻の臺に屯集し江戸の形勢を見て事を擧げんと欲するなり乍去公等宇都宮に向ふ事なれば我か輩も兎に角日光山に到り世上の動靜を見んも亦良しと且一同曰く今此處に聚り来る兵隊は大手前大隊凡そ七百人七聯隊三百五十人桑藩二百人程土工兵二百人にて君の率ゆる所凡そ六

百人總計一千人餘あり加之に大砲二門なり然るに之を統督する人なく毎度議論沸騰殊に戰端を開く時は諸説紛々必ず機會を失ふ大患あり故に右全軍を君の統括せん事を願ふ、、狂げて衆議に從へとの事にて追々時刻も移り前途も遠き故余全軍の事を心得假りに之を都督して日光迄至るべしとて直ちに行軍の順次を定めたり

先鋒 第一大隊(大砲二門附桑藩)

中軍 第二大隊

後軍 第七聯隊

右の順に隊を定め且つ今夜の宿泊は先鋒は小金中軍は松戸後軍は鴻の臺と議決せり

其の後順次に隊次を追ふて出發し余は會藩の垣澤辨三谷木村其外一同食後中川を立ち出て中軍と共に松戸の方に至れり、、本日松戸宿へ泊る兵隊も夫々宿所を分配し渡船場へ番兵を出せり

我が先君昨夜當驛御一泊にて水府へ御出の事を聞きたり

四月十二日舊幕海軍副總督榎本釜次郎等軍艦を率ゐて品海を脱出す

〔一新錄探索報告〕

(四月廿一日附首藤敬助肥前江藤畠聞取書の一節、前文は十一日慶喜水戸へ退去の條に出づ)

然處軍艦八艦官軍に差出候筈之處十二日晚ニ至り豈艘も不残通去り申候由何方に參り候哉相分不申幕之海軍奉行姓者失念何之和泉守と申者巨魁ニ而乗り遁候由右ニ付一橋殿カミ恐入候との御書付差出ニ相成居候由

〔全書〕

前橋藩昨日江戸より上京當時之形勢聞取(日附筆者)

一榎本和泉列乘組軍艦一統奮激已ニ鎮撫之爲居書殘置房總近海に立退候へ共一統之論決而寛典之御處置者顧不申至當之

明治元年

御處置被仰付候様との儀ニ而若至當ニ出不申候ハ、攝海ニ出事を成候存念之由

〔海舟日誌〕

○十二日 軍艦より大原殿へ歎願書差出館山へ退去す此兩三日風烈しくして船便不宜總督矢田堀副總督権本と其説表裏し権本は艦へ行き矢田堀は陸にあり大原殿へ出て御引渡の事を扱ふ然るに諸船不聞して館山へ去る大原殿より頻に其約に背くを以て御使しば々なり (中略)
此頃軍艦引退しを以て大原殿附屬肥前藩士等申旨あり田安殿へ其約に背くを責む總裁矢田堀は何處へか蟄し他其事を執る者なし頻に小臣へ命せらるといへとも總裁ありて不報究迫せしめて後其事を扱はしむ頗る兒戯に等敷を以て固辭再三す

〔若殿様左京亮様御滞在中日記、一新錄自筆狀〕

(四月十四日淺井新九郎より京歸詰奉行に通報書抄略、前掲十一日の續き)

總軍艦九艘品川に碇泊有之右同日受取有之管ニテ海軍手肥前御人數より受取之管ニ有之候處風浪強十二日も同様十三日受取候管ニ候處同日朝脱艦仕候由霧晴レ候而一艘も無之候先鋒督府同日御城御巡覽有之候而田安殿に軍艦脱候ニ付御譴責有之候ニ付勝房州受持ニ付恐入候爲謝罪如何様被仰付候而も不苦趣を以申出ニ相成候軍艦は房州之方へ碇泊いたし居候由ニ而軍艦奉行早馬ニテ呼返ニ參候へ共迎及引返受取渡出來之見込に無之候

〔一新錄探索報告〕

西郷吉之助より手ニ入候書付寫(抄略、前掲十)
(一日の續き)

一軍艦乗組合二千人計
開陽 六門 咸福 十二門 嘉龍 四門 朝陽 十二門 富士 十二門 回天 十一門

開陽 二十六門
右十一日海軍惣督手ヲ以て受取之管候處激濤ニ而士官上陸難仕候付明朝まで延引願出被差許候處翌朝ニ至一艘も不相見脱走之事

四月十三日在京諸侯中職任なき者は相當の兵員を留め歸藩して家政を改革し兵備を嚴にすべきを命ぜらる

〔王政復古帳、一新錄皇帝、京都并江戸返達御用狀扣〕

(四月十三日太政官より留守居御呼出ニ而松室甲斐を以御渡之御書付三通(の二)

諸侯參 朝御制度之儀は追而可被仰出候得共去冬以來引續別而當正月三日後不容易御時勢ニ立到り迅速上京王事ニ勤勞セシメ候段神妙之至被思食候然處永々滞京致疲弊往々藩屏之任難堪様立到候而者實以不相濟事ニ付供奉並議定參與職及京師守護取締等被仰付置候外御誓約相濟候輩者左之通兵隊殘置一ト先御暇被下候就而者歸國之上先達而御誓約被爲在候御趣意ヲ奉體認速ニ家政向改正ハ勿論未タ皇國內御平定ニ茂不立到事ニ付彌以不虞之備ヲ嚴ニシ於國邑御指揮可奉待候將又未タ御誓約不相濟輩者其儘滞京可罷在旨被仰付候事

一大藩 百五十人より 二百人迄
一中藩 百人より 百五拾人迄
一小藩 二十五人より 百人迄
但右人數定之儀は兵隊而已ニシテ其餘役方之者は用辨相調候丈ヶ相當相詰可申總而簡易質略ヲ主トシ無用之者滞在京候度可致用捨事
附依 御沙汰御等衛人數之儀者格別之事

四月

四月十三日上野館林藩主秋元但馬守上野伊勢崎藩主酒井下野守謹慎免除の旨達せらる

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

四月十三日太政官より佐竹中將様に御渡之御書付一通御同方より被差廻

酒井下野守
秋元但馬守

右謹慎被免候事

四月十三日

四月十三日東晦道先鋒總督江戸城中を點検し遂に久留米藩邸に陣す

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記、一新錄自筆狀〕

(四月十四日淺井新九郎より京橋詰奉行に通報書抄略、前掲十二日の續)

坂先鋒惣督府昨日池上より御入城に而有馬様上屋敷に轉陣に相成

〔一新錄探索報告〕

西郷吉之助より手ニ入候書付寫(抄略、前掲)
(十二日の續)

一十三日先鋒總督城内點檢之上久留米邸へ移陳之事

〔三村文書〕

安場一平宿本へ之紙面南關へも宜敷御廻し可被下候

自江城拜啓時節追々薄暑ニ相成申候處頗御清康可被成御起居拜喜仕候私共無異ニ罷過居申候御安意可被下候去月十日ニ本門寺川崎之御本陣を被居江戸城中慶喜侯始往事を被悔至而恭順謹慎罷在られ候故 朝廷御寛典ニ而慶喜侯ハ水戸ニ御預十四日御城受取

橋本殿柳原殿受取ニ御出泰吉茂御供ニ而罷越城中無殘處打廻當時ハ本丸ハ焼失ニ而西ノ丸計残り居間毎ニ見物仕候處幾間計通り候哉速ニ打廻候得共二時程懸り三百年之間日本中之膏血を以テ造營修覆ニ相成候大城一時ニ如此相成無存懸事共ニ御座候床々ニハ銀ノ鶴置物又ハ珍玉杯之置物其儘ニ有之懸物等古事名畫其美類を盡し幾間程とハ分り不申大略二萬疊敷も可有之と相考申候跡ハ暫時田安中納言殿大久保一翁勝安房ニ御委任ニ相成京都御伺中也高ハ大概百五万石も残り可申家名ハ田安殿ニ而可有之會津ハ中々恭順之色相見に不申城を枕ニまる勢也如何相成可申哉其他ハ無事ニ而六七月ニハ京都迄引返し可申と申居候最早旅中を我宿と相定メ稀ニ歸國を旅中とおもひ候へハ外ニ案し候事も無之橋本殿御歌御名人ニ幸之旅中歌ならる可申とて此頃ハ頻ニ歌をあんし居申候

むらさき名ニおふ野邊ニ旅ねしていとさゑをすきゆめそ見よける

山風はいゑくふふきそ郭公のふそ音戯聞やもらさむ

御モラムノ

西國筋ハ農事之手抜ケも有之ましく東海東山北陸三道之兵ニ萬夫役兵食ニ而殆と民力も盡き果テ候勢一日も早ク凱陣ニ相成不申而ハ難成當時猶御轉營ニ而櫻田外井伊掃部守殿屋敷ニ御本陣を被居此ニ相滯り居申候又々橋本殿御警衛肥後ニ被仰付賑々敷罷過居申候閑筆

閏四月三日

傳之助様(三村)

尚々源助様箱館より御歸り懸ケ此許ニ御寄りニ而緩りと御畠仕候京都之様ニ御出ニ相成自然ハ京都御滞留ニ相成候哉

明治元年

泰吉(内藤)

御歸國ニ相成候哉存不申候(本文中十四日御城受取云々とあれとも江戸城は既に十一日に官軍の手に收めたれば兩總督は點檢の爲め入城したるものなりさて十三日と十四日の違あれとはも後日書きたる通信なれば偶々誤記せらんか)

四月十三日本藩に保管を命ぜられたる舊幕歩兵三番町の屯集所に銃砲彈薬を集締すとの聞えあり物頭山路太左衛門屯集所に至り隊長平岡慎太郎をして嚴に調査せしむ

〔安田家 明治元年關東征伐事件覺書〕

〔記録 横¹〕
 全十三日 三番町歩兵受取リシ山路太左衛門一隊暫時屯營ヲ引揚ケ跡取締ハ該步兵隊長平岡慎太郎及ヒ其他ノ指揮官ニ委託スルトノ傳令ヲ増田貞右衛門來テ口述ス山路ハ我カ隊ノ屯在スル所ノ永田町邸へ引取りタリ
 東山道總督岩倉殿ヨリ使者ヲ差向ケラル三番町歩兵ノ舉動ヲ承知ノ爲メナリ又井伊家ヨリ栗原庄之助ナル者ヲ差遣ハサレ赤坂門ハ井伊家ノ固メ所ナルニ陸軍隊ト名乗リ是迄肥後藩ニ預ケラレシ處解放ニ付青山地方ヘ持越シタル砲器ヲ屯營へ取寄ルト申立ル云々ノ問合セニ付幸ヒ關八郎助予カ小屋ニ來會ニ付追テ何分ノ儀返答ニ可及旨ヲ述ヘ置夫ヨリ同道致シ總督府參謀ヘ斯行キ措置筋ヲ伺取り右ノ一件ハ差止メタリ其夕山路太左衛門同道ニテ三番町へ參趨シテ隊長平岡慎太郎へ面會井伊家ヨリ問合セノ事件速ニ吟味ヲ遂ケ若シ右様ノ輩アラハ首ヲ討テ當番ノ本陣白金邸へ出セトノ談判ヲ爲セシニ平岡ノ曰ク明日書迄ニ吟味ニ及ヒ果シテ然ラハ首ヲ討テ差出スト云ニ依リ堅ク約シテ退出セリ

四月十三日小倉藩主小笠原豊千代丸家族熊本を發して歸邑の途に就く

〔肥前外十五藩ヘ此方様ム御使者被指定候一件〕

慶應四年四月

一小笠原豊千代丸様御家族様方廣町伊勢屋に御滞留ニ相成居候處爲御歸國四月十三日同所御發途(四月十九日領分) 田川郡に着す之由ニ

付御錢別可被進旨被仰出候付左之品々奉入御覽候處思召不被爲在候付奉札且覺目錄等出來四月十一日被進相濟候事(等略す)

四月十四日本藩主慶順先に命ぜられたる九州御領地の取締方を免せらる

〔一新錄皇令〕

辰四月十四日太政官より御達

細川越中守

九州御領之地所一圓長崎裁判所可爲管轄旨被仰出候付其藩に當分取締被仰付置候分被免候事

但春來取調候書類早々長崎裁判所に指出可申事

四月十四日本藩世子護久書を一門長岡休焉に與へて天下革新の際舊習を洗脱し一致和協して國事に勤勞せむことを囑す

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

寸墨申入候愈無恙候哉國家多事之折柄左京亮殿も出京付而ハ猶更可爲辛勞察存候頃來闕下ニ罷在天下之形勢能々致見聞候ヘハ獨朝廷之御一新而已ニ無之於藩ニ茂乾と舊習を脫不申候而ハ他日不測之巨害を生可申就而者種々注意之次第も有之不遠歸國之上得斗可及相談候條何事茂一致一和ニ唱合精勤有之度吳々賴入候此段御家老御中老及御奉行杯にも可有傳達候已上

四月十四日

長岡体焉殿

四月十四日本藩末家細川利永大坂を發して下國の途に就く

明治元年

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

以手紙致啓達候太守様上々様益御機嫌能可被成御座奉恐懼候御二方様益御機嫌能被成御座奉恐懼候隨而當表別條無之候若狹守嚴今日爰許出立ニ付歩御小姓被差添候間如是御座候以上

四月十四日

三宅藤右衛門
米田虎之助御家老宛
御中老宛

四月十四日三番町歩兵隊を誅伐すへしとの命令あり我藩兵大村藩兵と與に之を圍み遂に兵戈を用ひす彼を説服して銃器弾薬等を押収す

〔安田家明治元年關東征伐事件覺書〕

四月十四日 拂曉本日三番町歩兵誅伐可致トノ達アリ大村藩ヘモ同様ナリ參謀安場一平永田町邸へ來ルヲ待テ我大砲隊ヲ繰出ス半藏門前ニ於テ元帥清水數馬殿ヲ待合セ夫ヨリ半藏門ヲ入り田安門ヲ押出シ佛製ダイフル砲一門ヲ歩兵屯所ヘ向ケ備ヘタリ予カ大砲隊一手ハ外廻リニテ屯所ノ表門ヘ向ケ發砲ノ號令ヲ待テリ同藩益田勇全増田貞右衛門交渉ノ任ニ當リ該歩兵組隊長平岡^信太郎ト談判ニ及ヒシ處今暫猶豫相成度懇願セシニ付此旨參謀安場一平ヘ談議セシニ誅伐被仰出テモ準備モ多少有之事故暫時位ハ自然時刻相移リ可申トノ返答ニ依リ平岡ハ直チニ屯所ヘ駆歸リ八方說諭ヲ加ヘタル處暴舉ニ及ハントシタル歩兵モ銃器弾薬等悉皆差出スニ付助命致シ吳レトノ歎願ニ依リ其願意聞届相成各兵隊ヲ屯所内ヘ繰込ミ練兵場ニ兵員ヲ整列セシメ隊号ノ順序ヲ以テ人員ヲ調査シ當藩ニ於テ受取ル手續ヲ爲ス銃器弾薬等ハ大村藩ニテ調査ヲ遂ケ受取り田安殿ノ倉庫ニ運搬ス當藩物頭山路太左衛門隊ト我カ大砲隊ニテ

〔若殿様左京亮様御滞在中日記、一新錄自筆狀〕

(四月十四日淺井新九郎より京頃詰奉行に通報書抄略、前編十三日の續)

大督府昨夜川崎泊今日御入城ニ有之候筈之處猶川崎ニ御泊明日御入城之由漸々順ニ運申候得共甚氣遣之儀者會之激徒所々に潜伏旗下並浮浪内分扇動いたし候哉ニ茂相聞卒兵之沸騰ハ逆茂命無之様存込說得六ヶ敷勢ニ御座候隊長々々茂仲々鎖撫難出來追々不都合之由督府ニ相聞且軍艦脱艦ニ付此上不都合無之様爲取締四箇所歩兵隊長備大村ニ分配受取清水方手は第一六ヶ敷九段坂受持ニ相成此上不都合有之候ハ、打拂候様尤兵器歩兵引分相渡恭順之筋相立候ハ、其分ニ而請取候様との旨御達ニ付直ニ總軍押出之用意相濟六半時御屋敷出軍清水方手小御人數ニ付白石清兵衛列一昨十二日より一手ニ相成惣御人數貳百五十餘設ケ關より半藏御門より進入田安目附ニ押出橋向九段坂歩兵屋敷ニ而直ニ發砲いたし候様備へ大村應援も段々ニ備へ諸藩官軍も所々應援二人數繰出歩兵屋敷を取歩兵隊長砲器玉薬相渡愈以恭順之筋相立候様談判有之候處隊長之面々大心配いたし且當時田安殿ニ靜寛院宮様御轉座ニ付御扱ニ付追々と時刻移候ニ付諸藩之戰士大勇ニ而歩兵屋敷無殘所取卷候而屋敷内ニ茂操練場に人數繰込相迫候ニ付隊長々々恐入是迄鎮撫居兼誠ニ恐縮之至申出不殘砲器弾薬引渡歩兵尋常ニ引渡候付砲器玉薬は田安殿ニ團置封印いたし候様取計ニ相成無事ニ相治奉恐悅大安心仕候事ニ御座候此後も右之都合ニ相運候様愚鶴仕候(以下略)

四月十四日

京詰話

明治元年

淺井新九郎

四三五

〔上野原宿御目附御横目聞方寫〕
〔小倉戰爭御目附御横目聞方寫〕

御奉行中様

山路太左衛門
増田貞右衛門

右太左衛門方者去四月十一日頃於東京三番丁歩兵爲請取組方並數馬方(志水)手人數之内二十人餘隨從ニ而被差越右歩兵隊長平岡寅太郎と申者に懸合砲器類等受取ニ相成候筈之處彼者共大ニ沸騰太左衛門方以下に鐵炮手元せり立ニ相成候模様ニ候處右歩兵之儀凡五百人餘茂有之同人方ニ者縫之人數ニ而迎茂多勢ニ難敵覺悟を究慎太郎手元せり立ニ相成候同人儀大ニ心配段々歩兵手元說論ニおよび候得共何分治兼太左衛門方以下同所ニ被居候者都合惡敷暫外ニ被出吳候様左候ハ、其上ニ而猶得斗相論可申段慎太郎より申出候由之處太左衛門方ニ者朝命ニ因而被差越候事ニ付如何ニ沸騰危急之場ニ臨候共此所者退被申間敷段返答ニ被及實ニ必死之勇氣顯候付慎太郎儀強而勸茂出來兼猶重疊致心配居候内太左衛門方ニ者迎茂無異儀治候見込無之處より同夜四時頃ニ而茂爲有之哉組方之者を以右之趣潛ニ數馬方手許に申越ニ相成候付即刻專右衛門方(平野)列大砲手之面々に貞右衛門方を差添應援として被差越候處宿門閉有之一切内之模様茂不相分此儘大勢被入込候而者都合何程ニ可有之哉と貞右衛門方より專右衛門列に咄合ニ相成同人方列者外ニ被殘置貞右衛門方一人案内を乞内ニ被這入候處歩兵共同鐵炮手差付用向等尋候付姓名等相名乘太左衛門方ニ用事有之面會被致度由被申向候付同人方被居候所引付候由ニ而兩人衆段々被咄合貞右衛門方より慎太郎を呼立徳川家之爲利害を説被及論判候付慎太郎彌以盡力說得いたし候由ニ而大分相鎧候付貞右衛門方ニ者潛ニ同所之辨を乘越宿外ニ出專右衛門方列に逢右之通鎧撫之筋ニ赴居候付而者最早被引取候方可然之咄合ニ而同人方列ニ者同所より直ニ被引取貞右衛門方ニ者猶期を越太左衛門方被居候所に被立歸同夜ハ先無事ニ相治候處右歩兵之儀一統恭順と申譯ニ茂至兼同十二三日

之頃ニ至候而之青山方より玉葉等取寄不穩様子ニ有之候との儀總督の方に相聞同十四日ニ之御誅伐被仰出此方様並備前大村藩杯に出兵被仰付候由ニ而太左衛門方列歩兵屯所ニ被居候而之都合惡敷候付外用事ニ託數馬方より呼取有之同早朝右之御人數押出ニ相成候處貞右衛門方ニ者可成鎧撫之存念ニ而專其周旋有之候内ニ者誅伐鎧撫之境ニ因而安場一平方杯と少々論説ニ茂被及右御人數押出ニ臨猶三番丁に被罷越慎太郎ニ而會重疊説得被致候付歩兵共漸承服炮器類差出之時ニ至候由右之通ニ而太左衛門方其節之所置筋誠ニ勇々敷隨而貞右衛門方ニ之差入盡力ニも相成候處より兵力を不被費承服至候事之由

〔淺井鼎泉記録〕

一九段坂下に幕府歩兵二大隊餘屯集の處屢々沸騰の兆有之候ニ付上野戰爭前より御國の御預と相成候或夜の四ツ時頃右歩兵共大騒動始め候ニ付今夜中にハ如何なる變事を惹起さんも計られざるよし丸山某急き御國の營所に報し來候ニ付直に山路太左衛門に其鎧撫方被命候處山路ハ決死の躰にて行に臨み鼎泉に向ひ申候様ハ自身儀未た嗣子無之に付自分の死後ハ親戚某の子を養ふて嗣子となしたし貴下幸に此事を周旋せられよとかくて歩御小姓田代十次郎等の數人を連れて彼等の營内に踏込み一應説論に及候得とも元來山路ハ勇士なれとも訥辯なれば思ふ様に説論出來兼候中何の新助とか申したる一人の兵士山路に對して不敬を働きしに依り山路右の田代に命して立に之を斬殺せしめさて申候様は命令を用ひさるものハ皆な此の如くならんと意氣決然亦勤すへからざるの概あり於是乎營内一人の手向ふものなく騒動全く鎧靜に歸し候此行や歩御小姓田代十次郎の外に歩御小姓栗山典太郎と貝手一人歩御小姓の場にて同行したるのみに有之候間少し心許なく思ひたれとも他の御人數ハ彼處此處の警衛等に任し不在中にて有之候間大砲隊牛小隊を操出し九段坂の上に大砲を据付けさせ營内の様子一つにハ直に砲擊して山路に應援せしむる手管なし置き山路にハ右の丸山を以て此事を告げしめたれハ旁々無事鎧靜することを得たる説に有之候後山路か御賞典祿を頂きたるハ上野戰爭の軍切に依る事には有之候得共僅の人數にて二大隊餘の兵士が暴動せんとしたるを鎧撫したる功も與りて多に居るな

らんと被存候五月の末に至り御國の御人數には奥州白川應援の命ありたれば右御預の分は皆な他家御預と相成此條の末は吉海記錄に詳なり

四月十五日征東大總督有栖川宮熾仁親王江戸に到り芝増上寺に滞陣せらる

〔一新錄探索報告〕

西郷吉之助より手二入候書付寫省略（前掲十三）

一十四日大惣督本門寺に御着陳翌十五日増上寺に御移陳

一靜寛院宮田安に御入（十一日慶喜上野を出て、水戸へ移りし同日の事なり）

一天璋院様一橋に御入（右全）

一東山道先鋒惣督軍門に板倉伊賀（静）降伏宇都宮に御預

一右手ニ而新撰兵頭近藤勇生捕之事（三日流山に）
家來五十人鳥居丹波守に御預
（事也）

一東山道先鋒惣督軍門に板倉伊賀（静）降伏宇都宮に御預

一大總督宮ハ此月（四月）八日ヲ以テ駿府ヲ發シ十五日芝山内眞乘院ニ着ス

四月十五日大坂駐輦中供奉者の心得法度を發布せらる

〔一新錄皇令、行在所日誌第四〕

四月十五日供奉之諸侯伯 行在所ニ被爲召軍務方より御渡之 御書付

法 度

今般蒼生掌炭之苦ヲ被爲救度御仁恤之聖慮ヲ以御親征被仰出海軍叢覽相濟候上ハ關東之動靜ニ依リ直チニ大旆ヲ東海道工被爲向候思召ニ被爲在候處大總督ヨリ形情言上之次第モ有之先浪華ニ行在被爲遊候ニ付而者供奉之輩下々ニ至迄別而厚ク御旨趣ヲ奉戴シ聊モ私怨ヲ狹ミ公事ヲ誤候類之儀決而無之様深ク心ヲ用ヒ戮力協心可遂成功候尙陪從之者心

得達無之様是又各其家々ニ於テ不渡様精々可相示事

一異變之節ハ各其持場ヲ固メ未タ持場無之者ハ嚴肅ニシテ御指揮可相待候若猥リニ奔走シ混亂ヲ生シ或ハ持場ヲ去リ他人之功ヲ争ヒ候者可爲不覺事

一平常道路往來ハ勿論行軍タリ共、五ニ道ヲ相讓リ禮節ヲ可盡候若禮節ヲ失ヒ或ハ不條理申掛ケ候者有之候共私ニ爭論ニ不及其筋工可訴出速ニ是非曲直ヲ正シ公平之御處置可有之事

一軍中ニ於テハ上下貴賤寢食勞逸ヲ同スヘキ事

一喧嘩口論禁止之事

一民屋町家ニ立入亂妨狼藉ハ勿論押借押買等堅ク禁止之事

一遠乗或ハ歩行之節田畠ヲ踏荒シ農業ヲ妨ケ道筋之竹木ヲ折取候等之儀有之間敷事

一浮説流言總テ人心之疑惑ヲ生候儀堅ク禁止タリ自然難差置事件聞及候節ハ速ニ其筋々工可申出候事

一猥ニ酒會ヲ催シ種々醜態ヲ顯シ候儀下々ニ至ル迄心得違無之様其主人主人ヨリ堅ク可申付事

一宿驛馬借ニ限ラス總而旅宿等ニ於テ猥リニ忿怒ヲ發シ小民ヲ畏縮セシメ候儀有之間敷事

一貴ハ愛恤ヲ不忘賤ハ恭敬ヲ不失上下之間禮讓ヲ專トシテ下ナル者ハ上ニ對シ非禮之進退無之上ハ權威ヲ以下ヲ不侮五ニ誠ヲ推候儀緊要之事

右條々堅ク相守若不心得之輩於有之ハ屹度可相亂者也

戊辰四月

四月十五日陸奥棚倉藩主松井周防守越後椎谷藩主堀右京亮謹慎を命ぜらる

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

（四月十八日藤堂和泉守様衆に御渡御書付寫三通之内）

明 治 元 年

松井周防守
堀右京亮

右謹慎被仰付候事

四月十五日

四月十五日田安慶賴脱走したる舊幕軍艦の處置を勝安房に託す

(海舟日誌)

○十五日
田安殿より御直書を以て軍艦取扱之事御頼みあり

四月十五日東海道先鋒總督府は脱走軍艦を品海へ引戻の事を大久保一翁勝安房に委任す依りて翌日勝安房軍艦へ抵る

(海舟日誌)

○十六日

督府より軍艦取扱御委任あるへき旨御書付出る

軍艦引渡一條に付ては水夫迄も可差出趣申立一々御許容相成到期日逃去候次第欺罔の罪をかさね夫而已ならず格別の御仁恵を以て寛典の御處置悉く水泡と相成行は勿論の事に候就ては海軍先鋒よりは可相應艦は無之候得共其責難免候に付死を以及談制度趣も被申出當然之儀に付右様果決相成候ては徳川氏之家名は勿論萬國之賊船と相成候次第不便之事に付品海へ乗戻し官軍へ引渡候迄之處往事は不相咎大久保一翁勝安房へ御委任可被仰付候間一向盡力いたし候様可被申付候事

四月

田安中納言殿

此御書付寫十五日夜御目付持參 本日軍艦へ出張

東海道

先鋒總督府

四月十六日江戸開市副總督鍋島直大大坂を發し此日横濱に至る

(京都并江戸返達御用狀扣)

(閏四月十二日村上よ梨同廿三日着の内)

閏四月七日計

一肥前侍從様、然之侍從様當分江戸開市取扱之儀も副總督之御心得を以御勤可被成旨以御書付被仰渡候將又横濱爲御出張三月晦日大坂御發足之末先月十六日彼地御參着被成候 其御許様 右京大夫様 左京亮様御惣容様に右爲御知被仰進度各様迄、被仰付越、

四月十七日諸布告書類傳達規則を發布せらる

(王政復古帳、一新錄皇令)

四月十七日松室甲斐ヲ以御渡之 御書付寫

太政官より被仰出候總而御布告書類御達之規則左之通御定ニ相成候事

一艦頭二十四藩中申合三藩ツ、順廻ニ而毎月當番相勤候事

一御達有之節々右月番之三藩召出御達書三通御渡ニ相成候事

一月番之三藩より觸頭中に相達候事

明治元年

一觸下に者是迄之通觸頭より相達候事

一毎月月末ニ其翌月之當番藩名可届出候事

四月

御月番

辰四月 前藤筑前

辰四月 前堂

辰四月 前田

辰四月 前伊

辰四月 前豪

辰四月 前橋

辰四月 前州

辰四月 前様

辰四月 前様

辰四月 前様

尾雲加前岡仙井越肥眞藤筑

五月

六月 州様

六月 州様

七月 山前

七月 山前

八月 戸様

八月 戸様

九月 山前

九月 山前

十月 郡紀

十月 郡紀

十一月後者前々之通

四月

四月

佐薩長藝因肥水土忍郡備

佐薩長藝因肥水土忍郡備

竹州様

竹州様

四月十七日美濃大垣藩主戸田采女正讚岐高松藩主松平讚岐守謝罪歸順の實効顯はれたるを以て

〔一新錄皇令、王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

辰四月十七日佐竹中將様衆に御渡書付寫二通

戸田采女正

其方家來在坂中當正月三日後不容易時態ニ立至候砌奉對 朝廷如何之儀有之被止入京候處其方在國中ニ而早速取糺歎願仕候者徳川慶喜上洛ニ付俄ニ供被申付罷登候途中不圖戰鬪之事起り驚入淀表ニ差控罷在候處終ニ五日朝ニ至リ無餘儀場合ニ而先手之者一小戦ニ及び候段奉恐入候右者全家來とも之不束ニ而於其方者素より 朝廷に無二之忠勤を盡し可申心底ニ有之謝罪之道相立歸順之儀申出候付以格別之 思召被聞食居隨而東征先鋒被仰付奮勵戰鬪仕其實効相顯れ候上者其功勞ニ寄前罪御寛免可相成候旨兼而 御沙汰之趣茂有之候處其他段々御用相勤務更去ル三月九日於武州梁田驛致一戰彼是實効相立候勿論最前出先家來共不束とハ乍申兼而大義順逆を不相辨次第其方全ク家來共ニ之示方不行居ニ相當り候事ニ付乾度御咎も可被 仰付之處格別寛大之 御仁惠を以て被免候條彌以國論一定精々可勵忠勤様御沙汰候事

但奉對官軍致戰爭候家來共所置之儀本文御寛大之旨趣ニ準シ隊長以上重立候者死一等を減シ永禁錮可申付候其餘ハ不及處刑法候尤取捌相濟候上姓名役名共太政官刑法局ニ可届出候事
附り右之面々所持之銃砲取揚置有之候ハ、御取揚被 仰付候條太政官軍防事務局ニ可差出候事

四月

松平讚岐守

其方家來共在坂中當正月三日後不容易時態ニ立到候砌奉對 朝廷如何之儀茂有之様相聞被止官位入京追討被 仰出候

明治元年

四四三

處於其方者在國中ニ而存知毛頭無之早速取糾候處德川慶喜上京ニ付家來共兵糧警衛被申付罷登候途中於伏水表混亂中官軍と者不相辨誤而發砲仕候次第奉恐入大不敬之罪を以出先之重臣小夫兵庫小河又右衛門誅戮を加へ首級差出將軍官に歎願仕候者素より朝廷に無ニ之忠勤を盡し可中心底ニ有之謝罪之道相立歸順之儀申出候付格別之恩食を以被聞召届不日關東追討之節出兵爲天朝於抽忠勤顯實効者其功勞ニ依り前罪御宥免可相成段兼而御沙汰之旨有之候處右出兵之儀者已ニ海陸御人數御配當相濟居候事ニ付御軍費金調獻彼是實効相立候勿論最前出先家來とも不束と者乍申兼而大義順逆を不相辨次第全ク家來共ニ之示方不行届ニ相當り候事ニ付屹度御咎可被仰付之處格別寛大之御仁惠を以謹慎被免官位被復候條彌以國論一定精々可勵忠勤様御沙汰候事

但奉對官軍致戰爭候家來共處置之儀ハ本文御寛大之旨趣ニ準し隊長以上重立候者死一等ヲ減シ可處永禁錮之處既ニ重臣兩人處重刑候上は其餘惣而不及處刑法候事

附り右之面々所持銃砲之儀者御取揚被仰付候條太政官軍防局に可差出候事

四月

四月十七日近江宮川藩主堀田出羽守謹慎を免せらる

〔王政復古帳、京都並江戸返達御用狀扣〕

(四月十八日藤堂和泉守様衆に御渡御書付三通の内)

堀 田 出 羽 守

謹慎被免候事

四月十七日

四月十七日本藩世子護久歸藩して力を兵制改革に致さんと欲し百日の賜暇を請願す

〔若殿様左京亮様御瀧坂中日記〕

今般朝政御一新付而者於國許茂萬事變革いたし候内兵制之一條兎角舊習脫兼何分越中守存念通相連不申此砌最第一之急務右之通ニ而之屹度難相濟甚致當惑候由申越候處先日以來追々御内意申上候通私儀者近年軍事上之儀委任程ニ而專其筋致指揮候上即今朝廷之御趣意も得斗心得罷在且當正月着京即下より京攝間數日之戰爭引續三道出師之模様を茂現實致見聞候間一刻も罷下夫等之稜々を以越中守を助委敷申諭候ハ、不日奮興之場合ニも立至可申見渡御座候關茂もいまた平定ト之難中候得共當表之御用之左京亮罷在候事ニ付被爲協儀ニ御座候ハ、私儀何卒日數百日程之御暇被下置候様奉願候此段可然様御評議可被下候以上

四月十七日

細 川 右 京 大 夫

以別紙致啓達候若殿様御下國之儀付而之三條卿岩倉卿等に追々内意申入候末最上之御都合と相成今日別紙寫之通御留守居を以御差出ニ相成申候明日ハ相濟候御模様ニ御座候左候ハ、來ル廿日之夕萬里丸ニ御乗組之御内定被爲在候右付而之兩人共ニ御供被仰付左候ヘハ此許重役なしニ相成候へ共自然之節之御奉行御目附之内より間形を合可申と喟合候事ニ御座候右之通御下國相成候後之御下り之儀長谷川木村等より周旋いたし左京亮様も屹ト御香込ニ相成居候事ニ付先日之御願書御許ニ而差出候歟右等之境之内輪篤と聞繕候上ニ而御取計ニ相成可申何様不日ニ御下國ニ之相連可申隨分とも御保護被成候様存候右爲申達如此ニ御座候以上

四月十七日

(在坂) 三 宅 藤 右 衛 門

米 田 虎 之 助

尙々虎之助御供被仰付候付而ハ御疑惑も可有御座哉御内輪御趣意も被爲在候御模様ニ付先づ引返之積ニ而家來共過

明 治 元 年

(在京) 溝 口 孤 雲 様

四四五

半殘置候苦ニ御座候委細之田尻彦太郎歸京之上直と御聞とり被成候様存候已上

四月十七日本藩林玄助奥州の偵察を終へ江戸に返り結城の戦況及び奥州街道筋一揆騒擾の事を報告す

〔王政復古帳〕

林玄助昨十七日奥羽より罷越候探索書（一書に此
端書あり）

事情略筆 附記

一結城兩侯之間ニ討幕佐幕之論波相起り晩春初旬之比彰義隊等之助力を以當君遂ニ城を乘取り候處四月初旬即官軍取返し候事

一同中五日午時宇都宮通行之處古河近郊へ賊徒來集追々襲城之萌相顯候由宇都宮守城之官軍ニ告來候ニ付不取敢應援ノ爲彦根壬生笠間之合兵三百許出張致候兵隊ニ出逢候其跡を慕ひ行候處黃昏ニ及ヒ官軍石橋驛へ止宿いたし候付兩人便を求メ同宿致し愚考致し候ニハ萬一賊徒より夜襲之患茂可有之哉ヒ終夜心を配り候得共異條無之其夜を明し翌朝官軍同處早發候付再び其跡を追ヒ行候處小山驛より半里計進ミ居處ニ結城守城之官軍より急使參り賊徒急襲之勢相見候ニ付早々救助致し吳候様注進ニ及ヒ官兵其需ニ應し小山之間道より結城ニ差向ヒ其途中兩處之間ニ於而戰爭相起り初免炮戰後彼ニ鎗を入れ候官軍大敗蹟之由ニ而已ニ笠間隊長も戰死之由勿論彼は地理ニ委敷殊ニ戰器充滿加之數敗之末ニ而別而憲發之廉も可有我レハ彼を侮し姿あり且機械等も乏敷已ニ後陣ニ備候笠間兵ハ銃隊至而少ク多クは鎗隊ニ而總而古法を守り恐クハ當時之戰爭ニ適當し難き様子ニ見受候然處前之退隊之時者以前之陣列を變し直ニ後陣を先隊となし進發致し候事加ルニ先制人之策を彼ニ行之れ初古河ニ向ふの虛景を成し却而結城ニ出て我レを奔走ニ苦しき候故兵士筋疲勞ニ及び居候處諸川關宿之二道を進行シ我より先ニ戰地ニ來り我を待而戰ふ之勢十分ニ有之如此勝算彼

ニ多ク我ニ少き虐を以然考致し候ヘハ恐ハ娘戰而已ならず統帥之爭ニ而も官軍之利無覺東と存し炮聲を聞あがら古河まで參り候處折節關宿應援之古河兵ニ出逢ヒ其隊士を見受候ニ殊之外聞け居殆ント洋休ヒ唱候而も不苦程ニ而凡二百人計も有之候其他境内守衛之兵一隊は貳百人一隊は貳百五十人ニ滿ル由ニ候尤友沼（結城ヲ距）^{三里位}ト申處ニ於て正午時比ニ炮聲を聞き初而戰爭起り候事を知ル依而前條を探知る事

東國一揆事件

一武州羽生ト云處に徳川氏之陣營あり代官酷政を施し候より人民甚々怨憤致し居候處今般軍用金杯を稱し頻ニ非常之聚歛致し候付人心沸騰いたし居候處官軍來り候付不取敢其疾苦を訴出候處如此代官所は建置候事不相成故打崩候而も不苦との指圖ニ付百姓満悦いたし直様打潰候其餘波次第ニ廣大ニ相成り奥州街道筋之宿々者不及申在々處々の豪家不淺打潰し後ニ者打潰しの趣意も始ヒ大ニ異り貪欲無度或ハ金銀米穀等ニいたし強奪或ハ物價之位を非常ニ下らしき杯無理非道之所業相勵是か爲ニ衆人之困苦實ニ無云計依之宇都宮公よりも種々手を附ら候付當時聊靜り居候得共未タ全靜ニ者到リ兼候間官軍ヲ速ニ鎮撫有之度事も存し候

但此騒擾之起根は梁田戰爭前之比諸藩引拂ニ付人馬之纏立夥數人夫等は唯勢力已ニ而宿吏獨り其利を專ニいたし候

を憤り候る起候事且領主之取扱も總而市ニ厚ク鄉ニ薄キ事柄も有之自然百姓等領主を相怨み居候且其黨中ニ惡キ族も交り居候事故前條之次第ニ相成り候付而ハ速ニ至當公平之裁判有之鎮撫無之而者其一揆爲賊之誘引被致候も難計

ヒ愚考仕候

四月十七日東山道官軍は宇都宮及び結城より進み舊幕兵を小山驛に邀撃し利あらずして退く

〔新錄探索報告〕

（江戸ム廿五日付到来の内）

一七八日比野州小山邊戰爭官軍館林百七拾人井伊百四拾人計爲脫浪被討候由

〔全書〕

林玄助明治元辰六月東行雜誌(抄略)

一十七日舟下りせし賊之別兵凡三百餘人小山驛に來着せり然ニ小金井に泊せし三藩之合兵其事を夢とも不知元來古河應援之爲ニ出し兵あれハ本意之如く小山を通り直々古河に到らんとせし處木澤と云所迄來り初て敵兵を見出し早速其所ニ大炮を居へ隊列を整小山に進入せんとせし處敵ハ何分大勢故師遂ニ利ふして再び小金井に退けり

此戰爭ハ官兵凡百五十人計ニ而賊兵凡三百人計と戰ひ朝五ツ比より四ツ半比迄續けり

一賊兵ハ固より勝利之軍あれハ大ニ心を安んし飲食等々たし居たる所殆九ツ比官軍再び小金井より押來れり依て賊兵これゝ應戦し再び官兵を敗走り

此戰ハ官軍炮隊を前ニ備へて進來走り賊ハ散兵を以て之ニ應し宿之入り口上町に出張或ハ伏し或ハ家屋を櫛ニとり暫間相争次第々々下町を指て退けり官軍勝ニ乗して追撃せし處賊ハ市街左右之裏路を忍て通り不意ニ來りて官兵に迫りしかハ終ニ官軍大敗大炮五門其他種々之品を奪れたり

此日兩度之戰ニ而官兵凡四拾人計死傷せり賊兵殊外之死傷少かりしと云

四月十七日勝安房襄に脱出せし舊幕船艦を率みて品川灣に歸る

〔海舟日誌〕

○十七日

軍艦不殘品海へ乘戻す頬末田安殿へ申す

四月十八日水戸藩鈴木石見朝比奈彌太郎脱走せしを以て搜索を逐くへしとの旨達せらる

〔一新錄皇令、王政復古帳、京都並江戸返達御用狀扣〕

同(辰四)十八日藤堂和泉守様衆に御渡書付寫(三通の内)

水戸中納言家來

鈴木石見

朝比奈彌太郎

右者從前水戸表ニおいて奸徒之巨魁ニ有之候處先達而國許脱走致行方不相分然ルニ此程當地ニ入込候風聞も有之趣同藩留守居より届出候ニ付右兩人之者ハ不及申黨類等諸藩邸中或者國許在所等に潜匿爲致候歟又ハ諸藩士之内舊好等有之洛内外田舎遠近之間手引を以底隱爲致候向者無之哉精々吟味遂其筋相分り候ハ、早速太政官刑法事務局に可申出候若取隠し置外より相顯し候節ハ屹度御咎可被仰付御沙汰候事

右之趣國許在所等にも不洩様可申通候事

四月

四月某日脱走せる舊幕旗下の士等君側の姦を除きて舊主の寃を雪き大義名分を正して綱常を萬世の下に維持すべしとの意を宣言す

〔王政復古帳〕

天地の間大義名分あるもの有余等此ニ來れるもの普く此爲明として戮力せんば不可有先ニ我老君政權を擧て朝廷々歸さきたる者深意ある事ニ而外々者外國の交際日々ニ開ケ文明之治駢駒馬も及能ずの勢なりて内々ハ政令多門とあり統一を能さるの患あり於是自ら退て侯伯の列ニ就キ衆諸侯と共に一君を仰ぎ邦内互々擬疑抗抵之心ふく戮力して万國と並立せんと欲せらえたるなり然らずは何ぞ祖宗三百年之政柄を擧て輕易ニ之を歸さんや然るニ大變革之初頭より

一言の談事もふく却而疑心を以て我兵待ち兵威を以宮門より大輦下を騒擾するニ至れり老君より我より歸されし政柄ぶ是は預聞ん事を欲せらる心に非とも畏ふがら幼冲の天子上より在して國家の危急累卵ニ至らんも計り難く己も痛痒關ハらぬものごとし傍看せらるる自ら臣子の至情ニ非ずやさて再上洛して善を擧げ邪を斥ケ政道公平ニ歸せんを欲せざらん先供登京の道筋薩長ニ惡意を挾み待受たる故ニ遂ニ鳥羽伏見の戦争とはぶりしあり故ニ其節の勅命ニ薩長の師と戰とありし事者此萬民の共ニ知る所毫も疑ふたり然ルニ十二月以來奉歎岡天朝といひ又連日錦旗ニ發砲をとひ又叛逆ふと云ふことも當日ニ考て證跡あく千歳ニ垂きて不朽の冤罪を負しモ學國の大兵強動間の重そる所故ニ一匹夫を誅するも猶其罪案既明にして而後ニ刑ニ處をあたふり何そ此冤罪ヲ負しモ學國の大兵強動をニ至るや且我冤罪を蒙るのみあらず弟をして兄を伐しそ臣をして主を弑せし末家をして宗家を滅さしむること成命ぜらる自ら失節之政を施きたるあり凡て勅命の尊たかき所者不偏不黨人倫ニ戾す天理ニそむかさる爲ニ非すや近頃太政官より之高札たけふなも人は五倫の道を正すべしと示さきたり今倫理を蔑如し名義を顧ざる此ニ至るも猶強梁して勅命其手ニ成せばあり故ニ老君ニ白して再師を舉天下の爲ニ姦あざわらくことを乞し者ありしが老君一切ニ付け只管一年を一身ニ荷之きしモハ幾百万の生靈屢塗炭ニ苦しむを厭ひ且我一度抗抵せば學國の兵端此より開砲聲止時ある早く蒼生の安堵ニ歸せんことを日夜ニ庶幾せられたるあり然ルニ督府ニ訴ふるものハ斥けて通せず京師に歎願まる外國の測目注視あるもの豈隣ニ乘し不測の殃を醸さば徳川一家の成敗のみあらず皇國の浮沈と成んことを畏きらるたるニテ東照宮の遺訓ニも懇々垂戒せらるまつしゆニ非すや故ニ身佛寺ニ入り痛ク責て恭順の義を盡し屢歎願の使を馳寸時も早く蒼生の安堵ニ歸せんことを日夜ニ庶幾せられたるあり然ルニ督府ニ訴ふるものハ斥けて通せず京師に歎願まるそのハ督府ニ通すべしといひ漸進して我城下ニ迫り前件の冤罪を負しむるに至る今宣典せんてんニ所ところをといふとも固より冤罪を負しめて何ぞ寛典といふ事あらんや臣子の情忍ばざるもの無むきども老君愈恭順せらる人々ニ喻し戸々ニ説き我命を用ひざれば即ち我身ニ刃を加るありといれしニ至り泣血止むを得ず奉命モと雖此冤何ぞ雪がさるを得んや此余輩脱籍の舉止むを得ざる所ふり必モ老君の諭責ニ逢ふを知るしらべへども大義名分天地古今自ラ已おらす相共ニ泉下を

期して罰を罰せんのみ獨怪む此太平の久しき先を祭り老を養ひ兒孫繁延兵火の難ニ逢わざるもの此誰の徳澤ぞや島津氏毛利氏といへども同しく其恩ニ沐浴せしニ非すや况哉其他列侯譜代之者亦何心ぞやたとひ我衰弱せるとも大義名分の間衰弱あることふくんバ何ぞ正論譲議して此冤を朝廷ニ訴ふるものあきや只仙臺首として義を唱へ米澤侯を始め奥羽の諸侯此をニ應し會津庄内等之士民義心確乎として不動北越諸侯も亦連盟して義を守と聞ゆ然まことに共仙臺等之上書者擁塞して達せず會津庄内等者均しく冤罪を免せモ嗚呼天地之冥々たる何そ其此ニ至るや我等微力ありと雖大義名分の爲ニ死して主家の冤罪をもゝぎ万世の下綱常を維持せんとするの赤心あるのみ万國の公法こうも仲究の師あるニ非や若予が輩の議を以公あらそとあるものならば日月の照覽ある所邦内天倫もあし此を万國の公議付して其至當を決まべし此余輩天地ニ誓て布告する所なり

辰四月中満

(彰義隊戦史所載)

(龍虎隊の顛末)

今日晝後上野寛永寺方へ御轉陣に可相成候間爲御心得申入候事

四月十九日

脱籍

徳川家臣同盟中

北陸道總督執筆

淺草市中取鎮方

(全書)

北陸道先鋒兼鎮撫總督高倉三位永祐、同副總督四條大夫隆調平カマ並に參謀津田山三郎、小林柔吉等淺草六郷邸内へ屯せしが、東叡山寛永寺に轉陣せんとして、參謀津田山三郎兵一千五百と並に大砲數門とを率ゐて東叡山を囲み、其の營

明治元年

を移さんと計れり、蓋し威力を以て轉陣せしめんとせしに外ならず、是に於てか、覺王院並に彰義隊頭小田井藏太及び天野八郎等參謀津田山三郎に應接す、彼の兵山外にあること三日、遂に談判調ひ、山三郎兵を率ゐて去れり、此の時たるや彰義隊士皆謹慎靜肅を守りたり、故に當時總督府より左の賞譽の口達ありたりと云ふ。

大總督宮より岩井左衛門を召され、今日登城の處、參謀正親町卿御逢ひ之れあり、北陸道總督御兩卿當山へ轉陣の儀に付、昨日覺王院を以て右兩卿へ御入られ、且つ彰義隊より申上候趣、逐一大總督宮へ言上候處、御門主恩召の次第、覺王院盡力の段、彰義隊精忠の旨、委細御承知御感不斜思召に付、右轉陣の儀者御見合せ成され候段、御口達之事

(全書)

(丸毛利恒寄書、拾遺)

參謀津田山三郎と小田井藏太の應接參謀津田山三郎の東臺に来るや、其の勅使に非るを以て山内に入るを許さず、彰義隊頭小田井藏太、同頭並勤方天野八郎、同川村敬三の三人出でゝ、之を三橋側なる六阿彌陀(常樂院)に迎へ應接す、山三郎曰く、今般二卿(高倉)當山へ御轉陣の管に付、速に山内を明け渡さるべし、若し強て命を拒まるゝならば、止むを得ず兵力を以てするに至らん云々、小田井曰く、敢て貴命に抗するにあらず、然れども城池兵仗は既に官に納れ、恭順殘る處なし、今や吾々祖宗の墳墓を守り且つ重器を衛るに外ならず、決して他意あるに非す、今や此の騒擾に際し、吾々此を去るときは、誰か祖宗の墳墓を守るものあらん、亦寶器を置くの處なし、其の狐鬼の棲む處となるや知るべきのみ、況や宮御方に於て、吾々に御守衛を御委嘱在らせらるゝに於てをや、是れ貴命に應じ難き所以なり、然るに猶兵力を以てすとあらば、止むを得ざるのみ、請ふ吾々の心事、人情を以て諒察あらんことを云々、山三郎終に強ふる能はず、貴意の趣大總督宮に言上すべしと云ひて去れり、此の時大總督宮より褒詞の事あり(川村敬三直話)四月十九日本藩末・永細川行典召に依りて上京し大坂駐籠中につき同地に滞留することを申告す

(若殿様左京亮様御下坂中御記録)

辨事御役所に

末家細川豊前守儀依 召爲上京去十二日着坂仕 天機伺茂相濟候得共 行在中之儀ニ付暫滞坂爲仕候此段御居仕候様
右京大夫申付候以上

細川右京大夫内

青地源右衛門

四月十九日本藩天草郡に於て薩摩土佐大村三藩人に接し錯誤を生したる徒士二名を處罰し且つ長崎鎮臺に其旨を申告す

(王政復古帳)(熊本縣)

歩御小姓組脇

山田貞右衛門

其方儀當正月天草に被差越候節薩州土州等より出張之面々に同所御警衛之御趣意を申向候趣相違いたし候處より混雜を引起諸藩ニ對不都合ニ成行候次第不持之至ニ付當役被差除御格之通歩御小姓列被仰付服部彌門觸組被 召加之畢而差扣居可候

歩御小姓

町野貞右衛門

其方儀當正月山田巳右衛門一同天草に被差越候節薩州土州等より出張之面々に同所御警衛之御趣意を申向候趣相違致候處より混雜を引起候右者巳右衛門儀始末主ニ成候様子ニ者候得共諸藩ニ對不都合ニ成行候次第不持之至ニ付通塞被

仰付之以上

四月十九日

〔慶應四年御家老中窓扣〕

長崎鎮臺に御届振草稿機密間に達込

山田貞右衛門

右者當正月天草島紛亂之模様ニ付他藩爲應接差遣候付重役尾藤金左衛門より含置候旨趣者元來天草島警衛之趣之從前々相心得候處廢幕ニ相成候上者王士ニ歸候事ニ付追而者御沙汰之筋も可被爲在夫迄之處者朝命同様之心得に而罷在候様申聞候儀を改而從朝廷御預ニ相成候儀と聞取違候處より同島出張之薩土大村之藩士と應答之砌改而御預之及返答混雜を引起候付而ハ先般書取を以奉伺候處國典ニ依的當之處置可仕旨御沙汰ニ相成候間已右衛門儀役儀差除相恤居候様申付置候

町野貞右衛門

右者前條山田已右衛門儀天草島に諸藩爲應接差越候節添役として差遣候處前文重役ヲ口達いたし候筋も急場之事ニ付追而承已右衛門一同應接之席ニ相連り談判仕候迄ニ而始末已右衛門主ニ成貞右衛門儀之隨從之者ニ付通塞申付置候右之通咎申付候間此段御届仕候以上

四月十九日

〔一新錄自筆狀〕
四月十九日長岡護美更に書を在藩老臣に贈り兵制一新文武獎勵の急務たる所以を説く

〔一新錄自筆狀〕
一前申入候山東新十郎歸り後上書之趣一學段より委細致承知候方今兵制之洋式之簡便ニして聚散離合自在を成す之道

より外無之小生廣之海陸軍ニ而天豐御用掛列藩ノ兵隊指揮ニ及び候處一隊々々規則相立更ニ混雜らしき事も無之右之火技發明後全く洋式之簡便ニし而規則之正しき故之儀と被相考百聞一見ニ如スト相考申候既ニ御親兵ヲ初英式ニ御決定被爲在追々皇國之兵制御取極被爲在候事ニ而火技ノ盛ナルニ從ヒ兵制變革ハ理ノ當然ト被相考申候片時も早タ御英斷被爲在奮發興起ノ勢ヲ作シ候様爲邦家希望仕候元來新十郎ニ話シ申候之書而ノ如ク血戰之我力長スル所ナリ火技之彼カ長スルナリ彼カ長スル所ヲ取り我力長スル所ニ加工候義方今之急務ト被相考申候間火技ハ一刻も早く傳習ヲ受ケ演武場ニ罷出稽古いたし候様申聞候事ニ而何も宜敷處ハ取用ヒ候様申付候事ニ御座候然處火技ハ炮器ノミト心得候歟此度上書之趣打方れど申付候様ニ相見ヘ候處火技ニヨリ而ハ兵制ハ變シ不申候而者逆モ實田無之勿論文武ハ願之通猶更御倡被爲在腹ミたヲ練立候義專要ニ御座候得共火技之發明ニヨリ兵制之變革スヘキ事ト被相考申候新十郎ニ申聞候火技ハ鐵炮等ニ心得ニ之無之言語之際貫通ニ至リ兼候義ト被相考申候間右之儀御示シ被下度一刻も早く演武場興起今日之急務ト奉存上候服合之儀之追々制度可被仰出しかし火技操練之節ハ追茂洋服ノ方簡便ト被相考制度局ニ於而も今日ニ至リ候而之右之體裁ニ決し候事ニ而於野生も百聞一見ニ如ズト今日之定見ヲ相立申候事ニ御座候其代リ平生ハ斷然科織袴ニ相決定被爲在候義至當カト奉考候爰許ニ而之皆其通相達し申候事ニ御座候左候而社炮戰ノ長スル所接戦ノ長スル所練兵相立可申候方今天下之事情ニ御家中一統着眼仕度事ト奉存候委細虎之助殿ニ申託し候不備

四月十九日

御家老中

玉案下

尙々兵制ハ一刻も早く御一新被爲在文武ハ益御倡ひ被成度候

四月十九日本藩老臣米田虎之助は兵制改革の要件を帶びて大坂より熊本に歸る

明治元年

四五五

〔若殿様左京亮様御滯坂中日記〕

四月十九日

一虎之助儀御國許に急成御用有之引返早打ニ而被差下今夕爰許被遊御差立候事

引返早打ニ而出京被仰付四月十四日
立同十八日夜着添狀一通達有之候事

小笠原一學

〔慶應三年十月ヨリ翌明治元年間四月迄
自筆狀並稜書〕

内狀を以得貴意申候其御地も御異狀も有之間敷當表も御同様ニ御座候次ニ貴丈様愈御堅達可爲御勤珍重奉存候
一若殿様御下國之一條之先日呈書之通ニ御座候處今以御暇被仰出之時ニいたり不申候へとも隨分御都合ハ宜敷明日共
御沙汰之御模様ニ相窓申候然處去ル十六日より兵庫ニ御出翌十七日御歸懸より御外邪ニ而御食味も不被爲在御様
子ニ付御暇被仰出候而茂御發駕ハ三四日も御延引之儀御醫師申方奉願候由ニ御座候勿論御氣遣申上候程ニ之不被
爲在候間御安心被成候様奉存候

一一學儀去ル十五日晚御國許被差立早打ニ而奮迅丸より渡海一昨十八日夜着坂仕候右之御軍制御改革等被仰出一旦兵
家者を初不流義之面々種々申立候處より一時致雷同物議沸騰近日ニ至候而之大ニ衰微いたし此末如何成行可申哉依之
世子君上一刻も御下國京攝間現實之模様等實地御着眼之次第を以御乘鎮速ニ御趣意致貫徹候様被爲在度との儀を
持越候處右付而御二方様思召被爲在不取敢虎之助殿を被差下委細雲上ニ被仰上之申ニ不及御同席中に茂得斗御
咄合被置其處ニ世子君御下國早速より非常之御指揮可被爲在との御趣意ニ而昨夕直ニ被遊御差立候事ニ御座候一
學儀ハ根元引返ニ被差越候得共御席中ニ追而御一人被差登候迄ハ其儘滯坂之苦ニ御座候一學持參之書取別紙寫一通入
御披見申候

右之趣爲可得貴意如是御座候以上(本文中別紙寫一通トあるは既に四月十日
三日の條に記載せるものにつき略す)

四月廿日 翌廿一日曉王生邸齋

(在京) 小笠原一學

(溝口孤雲様)

四月十九日舊幕兵字都呂城を攻め之を陥る

〔一新錄自筆狀〕

(四月廿五日附副奉行淺井新九郎江戸之書翰抄)

拔宇都宮十九日落城并伊家人數死傷多有之

〔一新錄探索報告〕

松代方四月廿五日出之急報今二日着

一字都宮落城之事

一同所ニ而彦根勢四十人餘討死須坂之人數三小隊之内一小隊半計討死

〔全書〕

一十九日廿日比宇都宮戰爭同城落城其跡徳川脱浪並會幕入交り三千人余入城相固候由(下略)
右者江戸廿五日付到來

林玄助明治紀元辰六月東行雜誌(抄略)

明治元年

一十八日賊兵小山を發て鹿沼驛に泊せり十六日大平山に據りし兵一日滯留し十八日鹿沼に來り此處ニ而兩軍合隊凡四百五十人計^ムて絹川河岸を泝り十九日彦根館林須坂戸田氏自國之兵ニ而守りたる宇都宮を襲ひ散々^ム放火し終ニ城を奪へり

此處ハ奥州街道ニ而二三と稱モる程之處ニ而隨分大有る城下ありしか折節風烈敷一圓焼失せり彦根之兵ハ宇城より凡十一里程隔たる所ニ佐野と云井伊家領地あれハ其處ニ避け館林須坂之兵ハ歸國尤戸田老侯越前守ハ親戚之因あるを以て臣下を引率して館林に投れたり

一別ニ絹川を上りし賊凡二千人餘り廿日之朝宇城に入りて前兵と合せり

四月廿日住吉に行幸し給ふ

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

住吉 行幸之儀ニ付 行在所ニおゆて御渡ニ相成候

九町目迄夫^ヲ南^ニ本街道

御書付寫四月十八日御留守居^ヲ達有之候

天下茶屋

明後廿日卯刻 御發輦住吉に 行幸可被爲在旨被 仰

御小休住吉社

御入

津田助三郎方

出候事

社務

津守上野介方

但雨天之節ハ御順延之事

御道筋

御道筋

御小休共前之通

表御門^ヲ安土町通境筋迄右^ニ長堀橋并日本橋御渡長町

〔子爵長岡家文書〕

拜讀奉賀候其内御風邪之山御加療専念申上候^シ今日住吉之行幸朝五字前御出幸天下茶屋御小休六字過津守宅着御猶豫之末御參詣亦津守宅へ彼爲入御二度上り供奉辨當

但御參詣之時御旗持人不居合暫御見合候得共居所不相分候故烏卿奔走外人ニ御旗爲持御成門ヲ出る時角力兩人走來候處烏卿既ニ外人ニ申付候故不及罷出退き可申也軍律ヲ以云々乍傍感服旗手悚栗其内通御御旗奉行ハあらぬ様子也

烏卿^ヲ王生卿^ヘ談之王卿^ヲ斷然被申聞候ハ、可然歟と存候

○庭ニ而弓被仰付中山射箭候故宗城いロノ^ヽ様^ヘ罷出居候處觸天眼被爲召罷出拜謁中山老卿^ヲいらぬる^サの事故三十年も弓矢ハ手ニ取不申候故被免度鉄砲ナラ只今^ヨても發射可仕龟井始供奉之者へ被仰付度と申述左也トテ龟備前松浦市橋ニ被命候夫^ヲ御馬庭中ニ而御覽大木さん兩人の^ヲ候故僕口と^モ遣せとの事相濟奉馬可被遊天覽との御事^{洋馬庭上ヘ}奉出候處乘可申との事四五邊の^ヨ万里ニ被仰付のる此時三條參上也^{今朝本戸接藤ヘタ七字頃還御被爲在}拂逢候故おそし^ハ三條^ヲ奏聞御用談酒相用六字牛^ヲ騎西本近ニ而御先御板輿門ニ可被爲入處故少々見合候而罷出奉伺天機候處益御機嫌能旨三條^ヲ奏聞支居候故兩人^ヘも脇路^ヲ廻り候處丁度^ニ御板輿門^ヘ可被爲入處故少々見合候而罷出奉伺天機候處益御機嫌能旨三條^ヲ奏聞之未被申聞御同情奉恭悅途中拜禮の入住吉迄つゝき申候歸宅入湯後ターフル^ヘ對候處故極草略走惡筆奉復迄恐々頓首

清和念日

左京亮様

尚又一昨夜倫快乍去失敬御海恕奉希候以上

四月廿日前右大臣一條實良薨す

〔京都井江戸返達御用狀扣〕

(四月廿七日林新九郎村上彈助よ梨園四月八日齋の内)

一條前右大臣御達例之處段々不被成御勝去廿三日被爲及御大切御養生無御叶同廿四日曉^{御内實}之廿日午刻薨去之由ニ御座候薨去之段同夜

丹下右馬大允よま知せ來候付此砌御障も不被爲在候哉奉同御國許且大坂表に申上度段翌廿五日伺勤仕候

四月廿一日加州大聖寺藩主前田飛驒守召に應して上京す

(京都并江戸返達御用狀扣)

四月廿一日付

一大聖寺侍從様も、然ハ飛驒守儀豫而被爲召候得共所勞候付日延御届折角被加療養候處少々快方ニ付當月十四日押而在所出立今日被致京着候右爲御知其御許様に被申述度此段、、被申付、、

四月廿一日征東大總督熾仁親王江戸城に入り大總督本營を設置せらる

(防長回天史第六編上)

第七章江戸開城ト關東ノ形勢(抄略)

大總督宮ハ此月(四)八日ヲ以テ駿府ヲ發シ十五日芝山内真乗院ニ着ス同十八日將サニ入城セラレントセシニ都下流言アリ城中地雷火ヲ伏セリト乃チ之ヲ検査セシメ其事ナキヲ見同二十一日遂ニ入城シ大總督本營ヲ此ニ置ク是ニ於テ乎關東宜ク平定ニ歸スヘキモノ、如キモ事實ハ之ニ反シ物情日ニ騒然タリ

四月廿二日征東大總督宮諸軍戰鬪の勞なくして江戸城に入りたるを賞し且つ府下人心未だ穩やかならず之を鎮靜せしむる方策如何を各藩隊長等に諮詢せらる

(王政復古帳、一新錄皇令)

藩々隊長御呼出於江城被仰渡之書付

今般賊徒追伐として海陸軍を總テ東下し戰鬪之勞ナク昨日當城に轉陣致候者全諸道總督を之しき參謀各藩之協力勉勵寄所也實ニ今日迄者諸道盡力之趣者委細遂奏聞候乍併未成功之中ニも不至且府下恭順を唱候得共人心折合不相附中々

配之計策茂同斷見込可申出委細承皮候事
 安心之出來候譯ニ無之者各所知也猶此上戒心協力シテ速ニ遂成功一日茂早ク奉安寧構度有意尤切也諸道總督を始參謀各藩之隊長士卒ニ至迄我不肖謄昧を輔共ニ天朝之御爲ニ盡力可有之候
 一當城に入候上者早速萬民鎮撫安堵之大號令を可發者勿論なり其綱目者如何シテ可然哉各見込無隔意爲聞可申且諸道手配之計策茂同斷見込可申出委細承皮候事

(一新錄自筆狀)

(四月廿五日附淺井新九郎ヨリ京詰奉行中宛書翰の一節)

去ル廿二日官軍諸藩隊長暨人宛登城い々し候様との大督府ヲ御沙汰ニ付御物頭罷出候處御軍議之由ニ而別紙之通ニ付於此許集議いたし云々

四月某日征東總督府は東國諸郡兇徒嘯集して王命を梗塞し結城地方に於て既に交戦に及びたるを以て速に赴援すへしとの旨を津大村二藩に命し且つ我藩安場一平をして其軍を監せしむ

(王政復古帳)

伊州藩に
大村藩に

江城以東之諸州郡近日兇暴之賊黨等姦民を囲集し處々湊會化を奉礙之勢不畏天威言語同斷之所業ニ候條其藩之兵隊速ニ東進隨處巡撫し良民安堵可爲致候殊ニ東山道先鋒總州結城邊ニおるて既ニ交戦ニも及居候折柄神速進軍赴援可致候諸事伊州藩中合臨機之作略可有之候監軍安場一平差遣候間進退指麾可受候事

總副督印

〔一新錄自筆狀〕

戊辰四月廿五日副奉淺井江戸より之書翰 關東之事情(抄略)

兩總邊戰爭之起り別錄(林玄介の報告書)ニ也有之候通り其後追々戰爭相止不申先官軍負色之山相聞候付藤堂家人數爲監軍安場一平に附屬¹而斥候藤本學之助歩御使番一人歩御小姓兩人清水方家來五人其外ニ横山助之進斥候出張ニ相成申候拟字都宮十九日落城井伊家人數死傷多有之壬生廿二日落此所ニ者東山道先鋒因土之人數出張いたし因土所々に引取候由東山道督府一昨日御出張何方へ御在陳者承不申候藤堂家人數ハ關宿へ滯陳此所要害可然處ニ而有之水戸海道之由未手ニ合不申候(略)

四月廿二日本藩世子護久歸藩の聽許あらは末家細川行典を以て名代とし還幸の節供奉せしめられんことを請願す

〔若殿様左京亮様御下坂中御記錄〕

辨事御役所に

私儀今度國許に之御暇奉願置候通ニ付御暇被仰出候上早々當地發足仕管ニ御座候然處末家細川豊前守儀先日御届仕置候通暫滞坂爲仕置候付還幸之節私爲名代豐前守儀爲冥加供奉被仰付被下候様奉願候此段可然様御沙汰可被下候以上

四月廿二日

閏四月五日辨事局より御呼出ニ而本文御勅書ニ左之通御付札御用御渡

細川右京大夫

頤之通被仰付候事

四月某日長崎浦上村耶蘇教徒の處分在京在坂諸侯に諮詢せらる

〔一新錄自筆狀、若殿様左京亮様御下坂中御記錄〕

長崎邪教蜂起ニ付御下問之書附

長崎近傍浦上村之住民先年來竊ニ耶蘇之教ヲ奉し候者有之哉ニ候處方今追々繁茂致し一村舉而右之教ヲ奉戴し殆ト三千人ニも及び候様相成不容易大事之儀ニ付長崎裁判所より精々申諭し候由之處更ニ悔悟伏罪無之趣ニ候方今大政更始之折柄右様追々蔓延致し候而者實ニ國家之大害ニ相成曾も難捨置事件ニ候へは右教師巨魁之者相集尙懇々説諭ヲ加へ候上速ニ悔悟致し候ハ、右宗旨之畫像等一切取毀ヲ改テ神前ニ於テ誓約ヲ成さしめ若萬一悔悟ニ不至節者不得止斷然巨魁之者數人斬罪梟首致し其餘之者ハ悉ク他國へ移シ夫々夫役ニ相用ひ一時ニ根底ヲ剝離シ數年ヲ經テ悔悟之實相顯ハレ候上歸住相免シ候外有之間敷歎實ニ不容易事件ニ付聊無伏臘各見込之程言上可有之被仰出候事

四月

〔一新錄自筆狀〕

耶教蜂起ニ付長崎裁判所より朝廷に窺之書付寫

長崎裁判浦上村切支丹之儀者元來島原變動之後餘燼之者共民間ニ殘居己之子孫或ハ熟懇之者共ニ申傳陰密信向罷在候處各地開港各州之人民渡來ニ付條約既以天主教堂建立終ニ踏繪之御法度も御廢止ニ相あり候よりして彼之教僧等舊染餘醜之者共ニ色々彼之法殘懇切ニ説聞し漸々押弘め愚夫愚婦之をのも又煽惑して兩三年前²尤盛ニ歸向し平常四五人も不絶教堂に入込教文杯食習ひ或ハ守戒受け病死を者も寺院にハ敢而不賴勝手ニ埋葬し三四ヶ所も小キ天主堂を建神佛を蔑視し佛祭杯ハ毀廢し又妖僧教を開せん乞金杯も與候等之事より殆三千人計¹も相成凶徒之勢日々盛ニ立至り既ニ昨年六月頃諸藩士者勿論市中他鄉等神佛を尊信致候者共ト水火之如ク不和を生し斷然御裁許無之候得者於下征伐仕様之風説も差起り歎願書等差出追候故德永石見守斷然取締方仕巨魁之者或百人余召捕入牢吟味之上嚴罪申付候

明治元年

見込を以江戸表に申出候内佛蘭西妖僧等公使に申出公使が大坂に差廻り終ニ赦罪歸村於村預ニ申付置候故此度天下一統赦罪之御沙汰ニ付右村預之部三百人計召出平話を申諭候得共更ニ不聞入甚敷ニ至候得者嚴刑ニ被行候而も不苦杯申立畢竟昨年佛ガ助命いたし候故自然佛を後ろニ取御所置ハ出來ぬそのと心得罷在候様差起候而者必然之勢モ奉存候最早論を盡し前證後害説諭を加へ候得共確乎として不變此儘等閑ニ致置御所置無之時者必右不平之者共勝手ニ誅戮いたし候様相成第一政府之權も無之且再ひ島原一舉之處ニ相成終ニ者九州爭亂を生し候様差起候而者必然之勢モ奉存候最早片時も早々斷然御所置有之度奉存候併三千人不殘死刑も余り慘憺之至故主張者嚴刑其次者土地替ニ而も被仰付平人と絶交土役夫役ニ而も御召遣有之浦上村ハ一旦赤土ニ立至候御見込迄ニ有之度奉存候又外國に關係仕候事柄ニ候得共元來教室を建彼之人民を教導あるハ條約面ニ被差許有之候得共内地に押弘ル杯之事ハ決而免許無御座候故我國古來嚴禁之法あらず法律を犯す我人民を刑典ニ所置せるに彼等ガ啄を入れ不事苦情申立候事者公法ニおいても論ある所更ニ無之様相考候間宜敷御評決可被成下候以上

四月

長崎裁判所

四月廿二日三條實美書を長岡護美に贈りて其の耶蘇教徒處分の意見に答ふ

〔子爵長岡家文書〕

高許

少々御不例之由如何御加護專一奉存候昨日ハ縷々御細書之處不能即答失敬之義ニ候耶蘇宗之義賢應之趣奉感佩候勿論外國ニ關係仕候事件ニ付御所置振ニより他日之處迄も屹度見込不相立申候てハ不相濟義ニ御座候朝議之處ハ斷然確乎如何様之形勢ニ至候とも條理ヲ以貫徹之御見込ニ有之候佛人に談判被成置候て確定之所置可然旨御心付之義御尤ニ候得共小生宇和島等考ニハ元より此義ハ外國との應接ハ十分相調候譯ニ付前以談判致候てハ却而六ヶ敷可有之候間断然處置相付彼ニ談判を仕掛候ハ、屹度應接之覺悟外國局見込も同様ニ有之候間此段申述候猶御賢案可承候且關東之事然處置相付彼ニ談判を仕掛候ハ、屹度應接之覺悟外國局見込も同様ニ有之候間此段申述候猶御賢案可承候且關東之事

情別紙入御密覽數萬々拜上可申述開筆候公務繁雜頗荒涼之御咎狀御宥恕是祈願首

四月廿二日

左京亮殿

玉床下

實

美

尚々時候御自愛可被爲在候也

四月廿二日本藩横井平四郎徵士參與を命せらる
〔若殿様左京亮様御留坂中日記〕

四月廿二日

横井平四郎

右者徵士參與被仰付候段御奉行ガ相達候事

四月廿二日津藩の兵武州杉戸に於て舊幕兵に破らる

〔一新錄探索報告〕

(江戸より廿五日付到來の内)

一廿二日(四)杉戸表ニ而藤堂勢八百人程書飯之處に屯勢押懸ケ當頭躰之者二人討取其餘藤堂多人數敗死大敗走之由
一今日黒田有馬御繰出しニ相成候其外薩長追々繰出しニ相成候
一脫走勢多人數押寄來候風聞専らニ而千住兩國大橋邊嚴重官軍御固メ御座候

四月廿三日本藩主慶順名を詔邦と改めたる旨を申告す

〔若殿様左京亮様御下坂中御記錄〕

明治元年

四六五

辨事御役所

越中守名乘之儀韶邦と相改申候此段御届仕候様申越候以上

細川越中守内

青地源右衛門

四月廿三日本藩末家細川利永熊本に着す

〔密書輯錄〕

自著子爵細川利永履歴大略

一慶應四年三月廿八日大坂行在中伺 天機一先宗家國元へ御暇顧濟下坂四月九日西本願寺行在所ニ於テ 初テ龍顏拜十

四日大坂發海陸旅行廿三日熊本着新町客屋ニ寓ス

但着後ハ萬事宗藩ノ國法ニ隨フ家政ハ是迄ノ通

四月廿二日我藩保管せる江戸三番町屯營舊幕歩兵從順に歸せしを以て歩練教練の爲め先に田安家倉庫に保管を託したる銃器の返付方を交渉す

〔安田家 明治元年關東征伐事件覺書〕

〔記録〕 田安殿倉庫ニ預置タル歩兵ノ銃器請取ノ爲メ同殿彈薬奉行中村十郎左衛門ニ懸合ヒヲナス右ハ歩兵從順ニ依リ繰練セシムルノ爲メナリ

四月廿三日本藩世子護久及ひ長岡護美長崎浦上村耶蘇教徒處分に關する諸間に奉答す

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

耶蘇教信向之者共御取扱之儀ニ付而御下問之趣奉畏候御國法を以御國民を被處候事ニ付聊外國ニ致關係候儀者無御座

御處置之於大體者外ニ存付も無之御同心ニ奉存候處各國ニ而者無此上致尊信候宗旨殊ニ舊幕より堂宇建立も差免置候末畫像等御取毀は何程ニ可有御座哉此節者先官府より御取揚ニ相成得斗御吟味之上自己と拵候品柄ニ候得者其分之事ニ候得共根元彼より差賠候歟又は是より乞受候品柄ニ候ハ、元之通被差返向後御料民を致教導候儀者愈以嚴禁之旨被仰渡候方條約之御相手柄ニ被對順を得候筋ニは有御座間敷哉深勘考も出來兼候而已ならず鹽梅布置ニいたり候枝葉之見込ニ候得とも折角之御尋ニ付無伏臘申上試候以上

四月

細川右京大夫

於長崎耶蘇教信仰之者御取扱之儀御下問之趣奉畏候右ニ付而者自然洋人より兎角申出候共聯御動無之確乎と御差入ニ

相成候ハ、此節之御所置より外被爲在間敷此儀者巨細口上を以申上候通ニ御座候以上

四月廿三日

長岡左京亮

〔一新錄自筆狀〕

一耶蘇教信仰之もの共御處置之儀付而御下問并御答之書付とも別紙寫差進申候當地(坂)ニ而ニ何方之見込も大概同様ニ候得共京師ニ而ハ肥前侯越前侯其餘異見之向不少由御自國之御政事ニハ候得とも自然と外國ニ致關係如何成ル混雜ニ成候も難量甚以致案勞候

右之趣爲可申達如是御座候已上

四月廿八日

三宅藤右衛門
小笠原一學

御家老衆 殿宛

明治元年

四月某日本藩徵士溝口孤雲及び長谷川二右衛門浦上耶蘇教徒の處分に關し建白書を上る

〔王政復古帳、一新錄自筆狀〕

邪宗門御取扱之儀ニ付御下間有之溝口孤雲建白左之通

今度邪宗門御教示よつて轉候をの共御取扱之儀暨者三千人有之候ハ、右を引分ケ貳百人百人宛御領又者諸侯ニ御預相成左之通被成置候而者如何可有御座哉

一一廓を構長屋體之者を作り四方嚴々圍いたし番人を付右之者共男女各相分ケ課業を立其人ニ長まる所之仕事をムセ或ハ油縛之類或ハ土地ニ隨而田畠を耕し或モ川さらへ道橋作り等相應々々之事を成し外人と交を禁し被置度事一仕事場休息場別ニいたし置暨者毎日朝五時より役人右之者ヲ誘ひ神拜致させ左候而仕事場ニ出八時迄仕事をムセ夫方休息所ニ歸し可申事

一費用之儀一旦者賄等いたし候へ共其後者右之者とも五時より八時迄之仕事を以テ償可申其前後仕事いたし候者其身々々ニ相渡可申事

一用達を立置日々右小屋ニ罷出作り出候丈ヶ買取其金錢者役人に相納可申事

但役人より公私取分世話いたし可申事

一賄者役人より世話いたさるき事

一毎月一度宛影踏致せ可申事

右之通いたし置彌以改心之者之父子夫婦兄弟を合せ歸郷いたさせ候歟又者請持之國ニ居住いたさせ候歟如何様卒安着之仕法ヲ付可申若シ不改之其儘差置候ハ、漸々相滅可申事

付札本書之通ニ候處彼宗門之儀者實ニ死を計し居候山承り及萬一如何ニ及教諭候而茂承服不致百人千人茂死刑被仰付候

耶宗門之儀今度無御糺明御預ニ相成ニ付而者悔悟之道無之御仁政ニ相漏候ニ付先書建白仕候通男女居ヲ異し悔悟いたし神佛拜並ニ影踏いたし候者之親族同居被免之悔悟之道も可有御座改心不仕そのハ生涯別居ニ而宗門漸を以子孫ヲ絶消滅可仕事

但彼宗門信候者ハ決而右兩條ハいたし不申候由ニ付一日神佛之拜影踏いたし候そのハ實ニ轉候確證ニ付萬里ニ被差返候而茂子細有之間敷且御預之藩ニ而も平民ニ雜居も不苦儀と奉存候事

〔荻家文書〕

長崎大浦邪宗門四千人ニ及び神社佛閣を崩し甚タ國害ニ至り長崎より判事之面々井上聞多松方助左衛門追々ニ注進ス依之大坂 行在所於 玉座參與以上之面々被 召右御所置筋 御下間ニ付小生建白左之通

今度崎陽邪宗門御處置之儀巨魁之者迄嚴科ニ被處其餘之總而小笠原島竹島兩島中之廣狹ニ應シ分配是ニ一ヶ年之食料且農工之器械を與へ加之是を主宰する者ハ近年無謀ニ攘夷を唱萬國交際之大體を不辨 朝廷ニ罪を得遠島被仰付候類之者過日英國公使を害せを差加島中開拓を命し抑揚之權を與へ力而流民に教化を布き邪宗を洗除シ 皇國固有之良民たらしむる事を得ハ今日之罪を被免而已ならず追而ハ其功を被賞島長或ハ内地ニ可被召歸哉流民之儀も其品ニ寄御取扱可有之事

第二方今 御一新千緒萬件御繁務之秋許多之流民悉於内地處々坑夫等ニ被當候ハ、差配之人撰食料等之件々更一層之錯雜を重ね教化之筋迄嚴密ニ被爲行屆間敷因て石帆之前件同様其他之海岸無之國々各藩に分譲徒刑たらしめ其向キ便

利ニ應し夫役等ニ仕ひ平素ハ懇切ニ教諭を加へ追而改心いたし候ハ、其節相當之御取扱可有之事
右御下問ニ付不顧愚存申上試候事

四月

長谷川二右衛門

四月廿三日伊達宗城書を長岡護美に贈り觀兵式舉行の節は我藩と合して隊伍を編成し式場に參列せしめん事を照會す

〔子爵長岡家文書〕

愈御清安奉大賀候然ハ兩賢兄貴恙近日御快愉と奉存候得共不均候御保護專一と存候扱兼而大砲天覽も可被爲在やとの事にて砲數御尋僕方ハ當地ニハホート二門在合故もし差出候時ハ長州と組合半バツテレイニムシ可申心得之處彼方ハ皆伏水ニ差置可申貴家ニハホート二門御座候赴此頃傳承仕候就而ハ家來甚未熟悉縮之至候得共貴藩ニ組合半バツテレイ四門ニ相成候ハ、進退運動之業少々ハ出來候故無御差支ハ家來某へ今日之内家僕も可及示談候此段申試候恐々頓首

四月念三

尙又英大軍艦モ今日ハ出艦仕候半兵庫カモ一艘參候故近日堂上同伴拜見候心得ニ御座候且關東事情之事別紙之通西

郷カ小松ヘ申越候故呈覽御寫濟候ハ、御返却可被下候脫走軍艦取歸しハ御深略伺度候已上

長 左 兄 密用

伊 與 拜

四月廿三日伊達宗城更に書を長岡護美に贈り其の耶蘇教徒處分其他の意見に對して答ふる所あり

〔子爵長岡家文書〕

拜聞四ヶ條之賢考感服尤御同意也尙左ニ申述候

○浦上之儀ハ何分井上聞多御呼寄て御教示候ハ、甚以可然と存候

○淀川の御誓約是ハ轉法卿へ明日可申述候

○軍艦之儀督府參謀輩處置可致尤爲可有之乍然當方軍防局ニ而試ニ謀略を被論レテハ如何推察ニハ新潟へ廻り援會之策可施ると存候

○英公使も國書持參多分明日着艦可致よしと万里卿へも御傳聲可被下候不備

四月廿三日

長 左 兄 (護美の書類は未だ見當らす)

四月廿三日先に甲州へ分遣せられし我藩兵江戸白金の藩邸に歸着す

〔王政復古帳〕

(四月廿五日淺井新九郎より在京重臣に通報書の一節)

甲府分隊之面々追々清水方始心配ニ相成彼地之當時者至而鎮靜ニ相成候趣を以督府に言上仕候處成得ニ而直引上一昨廿三日當所(江戸白金藩邸)へ着ニ相成大安心仕候事ニ御座候

四月廿三日東山道官軍宇都宮城を復す

〔一新錄探索報告〕

林玄助明治紀元辰六月東行雜誌(抄略)

一同(四)廿三日薩長大垣三藩之兵宇城を攻て之を拔けり

〔防長回天史第六編上〕

關東各地及ヒ白河ノ戰爭(抄略)

(前略)因士ノ兵二十日ヲ以テ壬生城ニ入ル二十一日宇都宮ノ賊兵壬生ニ迫ラントシ幕田安塚ノ二處ニ出ツ翌二十二日因土兵出テ之ヲ擊ツ賊兵善ク戰ヒ官軍殆ント危クシテ幾ニ克ツ此夜因士兵一旦壬生ニ還ル二十三日昨日薩垣ニ一藩兵ノ一部壬生ノ急報ニ接シ赴キ援ク及ハス此日壬生ヨリ進テ宇都宮城ニ迫ル敵兵善ク防キ容易ニ拔クコト能ハス因テ一旦退キテ市外ニ出ツ時ニ長薩垣三藩ノ本隊結城ヲ發シテ宇都宮ニ向ヒ小山ニ至ル比ヒ宇都宮方位ニ銃聲頻リニ起ルヲ聞キ雀宮ヨリ急行陸路街道ニ由リテ進ミ市内ニ進入シ部署ヲ分チテ長藩兵ハ八幡山及ヒ明神山ノ敵ヲ攻撃シ薩垣兵ハ直チニ城郭ヲ攻撃ス因州兵亦壬生ヨリ來リ會シ前ニ市外ニ退却シタル薩垣ノ先鋒兵亦大ニ勢ヲ得共ニ進テ敵ヲ攻撃ス敵終ニ支フルコト能ハス城ヲ棄テ、日光街道ニ走ル此日戰闘極メテ猛烈官軍死傷約百名長藩兵死者二名醫手永田峰太郎
兵死者無慮三四百トイフ是ニ於テ官軍止リテ宇都宮ヲ守ル

(大鳥圭介誌)
〔幕末實戰史〕

二十四日早朝諸隊長會合して戰爭の順序を議し、種々會議中時刻も早や五つ半頃ありしが小銃の聲遠く聞へしかども、強て意に介せず且つ番兵所より未だ報告あかりし故猶更安堵せり然るに追々其聲烈しく聞へ大砲の響も耳に入り、敵兵早くも城近くに來り或は竹林に入り或は堤内の樹林中に潜み身方を狙撃せり身方も新兵を入替へ防戦す

元來宇都宮は大手の方は可あり濠も深く堅固あれとも東南の方は茂林竹藪多くして堤低く濠に水あく要害極めて惡しき故に防戦甚難澁せり城北に方り明神山とて宇都宮歴代の菩提寺あり此の山市中に臨み北は日光迄も續きて咽喉の地あるを以つて桑名の兵をして之を守らしむ七聯隊も亦應援として之に赴く而して御料兵は木日雀宮街道の防禦を心得しを以つて加藤平内も亦共に此にあり且つ宇都宮城内の方に砲聲聞へし故引揚ふがら防戦し大に其の兵を失へり午後

に至り敵勢益々奮進城外市中城の東南並に明神山何れも大小砲の音雷に似たり然れども身方も一同奮戦し八ヶ半頃には大に模様よろしく一日は敵を町外迄も諸口より逐出したれども朝よりの戦にて上下死傷多く且大小砲の彈薬も打ち盡し又之を用意するの道あき故續令今日一日防戦したりとも明朝に至れば全軍を引揚るより外に良策あし依つて今より其事を各隊に傳へ全軍を日光に收むるを良とす即ち其の令を傳ふる中敵又襲來大に苦戦の餘り裏内に上り明神山の形勢を望むに是亦激戦の體にて大砲の打合ひ盛あり且つ奥州道を見るに歩兵も逃る者續々として糸の如く依つて愈引揚に決定し全隊を夫々引擲め繰引せんと思へども各隊長死傷の者多く兵卒散亂意の如くあらず漸くに諸隊を引揚げ一隊を残し之を以て殿とし城外に出て、奥州街道に出でしに敵少しも追撃し來られと大砲を打ち懸けしにより些は傷きたる時ありたれとも容易に引揚げて明神山にも引揚の事を通じ残らず日光の方に赴きたり

右一戦の死傷不詳あれども大概を上ぐれば

傷者 士方歳三(足指)本多幸七郎(脊を横に擦過)會人鹽澤某(兩股貫通)佐久間悌二(胸部貫通)傳習隊距取大同新吾
外十四五人(本文の括弧は皆原書のまゝ)

死人 上官兵卒合計七八十人余も榴弾の小片の爲め足部に負傷したるも歩行に差支なし
敵の死傷不詳

右の如く全軍相逐て宇都宮を出て奥州街道に赴きたり云々(舊幕兵宇都宮より今市を經四月廿九日悉く日光山に至る)

四月廿四日奥羽鎮撫總督澤爲量同參謀大山格之助薩長二藩の兵を率ゐ庄内に入り清川關門にて酒井忠篤の兵と戰ひ利あらずして退く

〔防長回天史第六編上〕

奥羽鎮撫使ト庄内方面ノ戰争(抄略)

(前略)(四月)十四日澤副督大山參謀ノ岩沼ニ於テ九條總督ト分レ長薩兵ヲ從ヘ庄内方面ニ向ヒ道ヲ篠谷峠ニ取り(略)

明治元年

廿日更ニ山形ヲ經テ天童ニ入ル（中）二十二日副督一行天童ヲ發ス天童藩吉田大八天童兵二十名ヲ從ヘ先導使タリ二十
三日新庄戸澤中務（略）ニ着ス此夜長薩兩藩兵ニ命シ明日ヲ以テ清川關門ヲ攻撃セシム（略）

二十四日官軍ノ清川ニ進ムヤ松平甚三郎（藩内）兵數百ヲ率キテ之ヲ戌ル（中）黎明官軍ノ來進ヲ見テ立谷川ヲ前ニシ御殿林ノ堡壘ニ據リ大砲廿餘門ヲ發シ戰ヲ開ク敵衆我寡官軍頗ル苦ミシモ猛進シテ立谷川ヲ渡ラントス會々河水ハ漲溢シ前岸ノ彈丸ハ雨下シ涉リ得タル者僅カニ五十人ナリシモ奮進シテ敵ノ數學ヲ陷レ川磧ニ至ル敵兵林中ヨリ發砲ス彈丸兩注官軍大ニ苦シム偶々敵ノ援兵狩川村方面ヨリ至リ官軍ノ側面ニ出ツ（略）官軍遂ニ腹巻岩ニ退ク賊尾擊ス官軍擊テ之ヲ却ケシモ衆寡遂ニ敵セサルヲ見テ漸次退却シ士湯ヨリ更ニ乗船シテ最上川ヲ溯リ古口村ニ至ル二十五日本營ヨリ命アリ長薩兵新庄ニ歸ル

〔一新錄探索報告〕

辰五月 閏四月奥羽鎮撫總督參謀おもて之來翰

一澤殿に附屬之薩長人數四月廿三日百五六十人ニ而庄内に討入城下おとこ五里隔清川關門ニ而合戰官軍手負討死多有之賊大砲廿四門人數千人有之候得共終ニ官軍攻懸然ルニ賊官軍之後へ廻り六十里越より國外に押出此橋字波口之陳屋燒立追々大人數ニ相成依而仙臺に援兵申付候得共出兵不致候頃日薩長越後河口に最早出張可致ニ付川口おとこも庄内に討入候様申遣候關東に者援兵申遣候得共宇都宮戰爭ニ而相運不申關東八州奥羽之儀ニ遠野避廣ニ而豐一旦打破候而も又々蜂起急ニ靜謐之六ヶ敷見込ニ候今日ニ至候而之仙臺大夫杯ニおるてハ會討先驅之命を却而恨居候姿ニ而藝倉之着陳を相待候姿ニ候

閏四月

太政官軍防局御中

奥羽 鎮撫 總督 參謀

右薩州方報告
四月廿四日舊幕臣勝安房先鋒總督府に到り參謀海江田武次木梨精一郎と會見して軍艦の處置方を議す
〔海舟日誌〕

○廿四日

先鋒總督府御旅館有馬家藩邸へ到り海江田不梨へ引合榎本和泉の素願貫徹御書付受取軍艦え遣す艦四艘引渡取計らふ、軍艦の所置に付ては海江田氏能く其情實を明察し他の欺を容れず斷然御所置に及べり亦因て美を朝廷に爲せりといふべし

四月廿五日徳川慶喜の處置及び其家名相續秩祿等の事に關し在京諸侯の意見を徵せらる
〔一新錄自筆狀、若殿様左京亮様御滞坂中日記、王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

在京

諸

侯

徳川慶喜段々悔悟恭順之趣愈謝罪之實効相立候ニ付慶喜之處分且家名被立下候付相續人並秩祿高之儀業議公論ヲ執テ御裁決被遊度思食ニ而議事有之候間明後廿七日已刻迄ニ各見込之程封書ニ致し重臣を以太政官代に可差出様被仰出候事

四月廿五日

四月廿五日慶喜の處置及び家名相續秩祿等に關し會議を開かるゝにつき來廿七日太政官代に參集すへしとの旨を諸藩貢士に達せらる

明治元年

四七五

(京都并江戸返達御用狀扣)

諸藩士士之

徳川慶喜段々悔悟恭順之趣愈謝罪之實効相立候ハ、慶喜之處分且家名被立下候ニ付相續人并秩錄高之儀衆議公論ヲ執テ御裁決被選度恩食ニ而議事有之候間明後廿七日已刻迄ニ各見込書取候而太政官代に出席可致様被仰出候事但所勞ニ而不參之向者見込之儀書取留守居を以可差出事

四月廿五日

貢士名前

伊井掃部頭家來

日下部三郎右衛門

北川徳之允

尾張元千代家來

遠山彦四郎

間島萬次郎

佐々鉄三郎

松平下總守家來

岡本金藏

佐藤江場之助

前田加賀守家來

太田申之助

三木省吾

黒田美濃守家來

太田申平太郎

陸原慎太郎

小谷兵左衛門

戶田采女正家來

池田因幡守家來

松田正人

伊王野治郎左衛門

花房七太夫

津田彦左衛門

紀伊中納言家來

本居中衛

鈴木房太郎

九鬼大隅守家來

小野崎五右衛門

鳥井斷二

池田備前守家來

花房七太夫

津田彦左衛門

紀伊中納言家來

本居中衛

鈴木房太郎

九鬼大隅守家來

小野崎五右衛門

鳥井斷二

志賀律三郎	岩崎豊太夫	秋月長門守家來
内藤金一郎家來	大河内刑部大輔家來	坂田
川西六右衛門	小池兩藏	本多肥後守家來
黒田甲斐守家來	間部下總守家來	立花治郎左衛門
阿部傳兵衛	小堀十太夫	本多彈正忠家來
藤堂和泉守家來	小笠原豐千代丸家來	織田出雲守家來
寺田喜多新甫郎	飯島太郎	河村雪三
本多美濃守家來	石川宗十郎家來	田邊源吾
中村嘉左衛門	新太久馬	三橋
森對馬守家來	相良遠江守家來	弓削兵藏
松平範次郎家來	市橋下總守家來	加藤出雲守家來
松平出羽守家來	原山勇太郎	戸田丹波守家來
豊岡清之進	新宮佐太夫	小松彰太郎
高井茂八	青山左京大夫家來	大關泰次郎家來
大竹勝太郎	長坂範太郎	小山勘解由
京極飛彈守家來	春太郎	前田稠松家來
關	林	西田覺馬仲
關	春太郎	西田覺馬仲
糺	太郎	西田覺馬仲
關	太郎	西田覺馬仲

朽木近江守家來 野間傳三

柳澤甲斐守家來 安元彦助

山村治左衛門

柳原式部大輔家來

藤田真六

仙石讚岐守家來 五大夫

櫻井熊一

淺野安藝守家來

石川直之進

稻垣藏人

前田飛彈守家來

柴山銅三郎

鍋島肥前守家來

稻村萬大

岩村民平

小笠原近江守家來

辻藏之丞

稻葉若狭守家來

田中左仲

安藤與三郎家來

松浦久門

松平中務大輔家來

杉山虎二郎

松平圖書頭家來

・村上藤右衛門

松平兵部大輔家來

小林健藏

久留島伊豫守家來

國田保

内藤備後守家來

織田行藏

板倉甲斐守家來

松井發藏

四月某日在京本藩重臣等徳川氏相續秩錄等の下間に對し議決せし意見を在坂重臣に通牒す

山内土佐守家來 伴修吉

稻葉備後守家來 松下直衛

酒井右京大夫家來 藤井清二

青木源五郎家來 吉川幾助

大岡越前守家來 長岡直留

久松内膳正家來 立花飛彈守家來

久松大藏大輔家來 梅戸養元

織田兵部大輔家來 今村芳世

久松内膳正家來 井上藤七

久松内膳正家來 織田兵部大輔家來

久松内膳正家來 今村芳世

〔一新錄自筆狀、王政復古帳、若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

京都之書取京詰溝口孤雲殿田中八郎兵衛大笠原一厚三宅
薩右衛門殿へ之紙面略（一新錄自筆狀に據る）

一慶喜罪案者追々被仰出候通御座候其前既ニ政權差上候付而者四百萬石歟乃至三百萬石位ニ茂可被差置儀付札奉存候假ニ德川家跡目被立下相續人並秩祿等之御下間有之此儀者於大坂御建言可被爲在候得共王生邸集議之次第急飛を以申上候

御崩議之一助ニも相成可申御取捨可被成下候

一慶喜罪案者追々被仰出候通御座候其前既ニ政權差上候付而者四百萬石歟乃至三百萬石位ニ茂可被差置儀付札奉存候假ニ慶喜罪案其實者長州閨下暴動と格別輕重茂有御座間敷長州者其砌拾萬石之削封被仰出大率租額四分之一ニ相當本

文慶喜削封之右之規矩ニ者遙ニ打踰居申候事

三百萬石之實封と定暴動之罪を以其半を被減候得者百五拾萬石相成候處於德川氏東照公以來三百年之太平を成候儀實ニ古來無比類勤業ニ付右之稜を被思召格別之御優待を以貳百萬石被下置候ハ、萬世ニ亘至當之御處置ニ可有御座哉然處旗下兵士之秩祿ヲ削候而も貳百萬石ニ而撫育難相成困窮ニ至候而者御仁政之筋ニ差障且者此筋より亂を醸候儀も難

計其時者撫育相成候丈者秩祿被下置候儀公平仁恤之御處置可申哉

一相談人之儀者其人躰委々存不申候付建言出來兼此儀者德川家ニ御下間有之彼より名前爲差出其上ニ而其人物を御探索有之相續被仰付候儀是又至當之御處置と相考申候強而其人を申候ハ、徳川龜之助第一近屬ニ而人望も有之哉ニ付此人

可然儀と茂相考申候

一慶喜御處分之儀者既ニ水戸に御預相成居候得者先其儘被差置追而之模様ニ被應可然哉モ奉存候

右之通御座候以上

四月

四月廿五日本藩隊長清水數馬等時體處理に關する大總督府の諸間に答申す

〔一新錄自筆狀、王政復古帳〕

今般府下恭順を唱候得共とも人心折合不相附候付頼撫安堵之大號令を可被發其綱目之如何して可然哉各見込無隔意被聞召且諸道手配之計策も同斷見込可申出御沙汰ニ付不憚忌諱奉言上候抑德川氏妄動之罪之申迄も無之候得共伏罪之實迹既ニ相顧殊ニ祖宗三百年之治蹟を開候以來代々生民之爲不少功績ニ被對寬典ニ可被仰付御布告之旨旗下一統難有奉存候由ニ御座候然處家名相續未被仰付如何と案勞仕奉待御模様折柄早々相當ニ被仰付一統安堵仕候様御座候ハ人心之折合ニ相成可申候奥羽割據之藩々を初兩總房激徒肆起致し不届之至ニ候得其家名被立下候御實跡未被爲在候付德川家名滅却可被仰付哉と疑惑仕臣子不忍之至情より起り候儀ニ而可憐之情も有之候付格別之御仁慈を以被遊御宥恕德川氏より說得眞撫仕候様被仰付候ハ、大赦之御主意ニも適ヒ奉感謝洪恩候而彼より謝罪之儀も可有之候大軍之過る處疲弊を受候者古昔より所畏ニ御座候萬一此節永滯陳ニ相成候様御座候ハ、供給之費日ニ増し軍役之勞日ニ加り候而下民愁怨仕候も難計當時人心洶々萬民之困窮不一方加之外患相迫候而不容易砌皇國一統治安ニ罷成武備充實王化を萬國ニ被輝候者上下一致協心戮力ニ無之而者雖叶根本を被爲固候義實以第一之急務と奉存候且皇威之立不立者戰之勝敗ニ之無之理之曲直ニ相決候事故公平正大衆心副望仕候至當之御處置相立速ニ被爲遂大功候様懇祈之至ニ御座候誠惶誠恐敬白

四月（日付は次條淺井新九郎）

肥後隊長申

四月廿五日在江戸本藩副奉行浅井新九郎關東の形勢總督府の時體處理に關する下間に對し答申せし事及び我藩兵の督府守衛を命ぜられたる外諸種の件を在京重臣に通報す

明治元年

四八一

〔王政復古帳〕

伊藤十助列出立ニ付小簡拜啓仕候東西御兩殿様上々様益御機嫌能被遊御座奉恐懼候將各様愈御清康被成御奉務珍重奉存候次私共儀無別條滯陣仕候間乍憚御休撫被成下候様奉希候然者當表之形勢追々錄呈仕候通ニ御座候處兩總邊戰爭之起步御使番一人步御小姓兩人清水方來五人其外ニ横山助之進爲斥候出張ニ相成申候搜宇都宮十九日落城井伊家人數死傷多有之壬生廿二日落城此處ニ者東山道先鋒因土之人數出張いたし因土所々に引取候由東山道督府一昨日御出張何方に御在陣之承り不申藤堂家人數者關宿に滯陣此所要害可然所ニ而右之水戸海道之由未手ニ合不申舊幕府撤兵歩兵會藩も少々加リ凡二千人餘茂有之當時勝ニ乘居如何相成候哉且府下之形勢不穩内外兩擊之策ニども相成候ハゝ余程大事ニ相成可申併田安殿恭順相違無之大久保逸翁勝房州殊之外心配之由ニ御座候會之情實別紙林玄助探察書之通ニ御座候當時者所々ニ會人と唱候得共所々脱走人名を假り候者茂有之由本藩之様子者徳川家朝敵之穢名を蒙せ候ハ全會一満之大罪ニ而一藩ニ引請ケ割據いたし候との覺悟ニ相聞申候會領境溝口家内藤家杯も半信半疑ニ而會之勢ニ押レ同意之由其外越後藩之小大名ニ而少々宛者會々手を附候山ニ承申候右之通ニ而奥羽兩總越後邊ニ者所々煩敷事も有之中官軍府下永瀬陣ニ相成候而者次第ニ惰氣も生し不宜事而已有之官軍人數之内茂所々暗殺ニ逢官軍之内實も被見候様ニ成行候而者甚嘆息之至ニ奉存候江戸中之人氣も市中杯者少々ハ折合候様ニも有之候得其實者恂々タル様子ニ御座候旗下先穩と申候得共安心者成兼先日御預之歩兵も清水方受持九段坂之分者次第ニ折合候へ共外者少々宛不穩様子も御座候山先便得御意申候通漸々折合候様ニ御座候處宇都宮壬生之一條方惣崩ニ相成候而者殘念之至ニ奉存候徳川家役々より眞撫ニ相成候様内輪手も入候得共仲々手ニ及不申由當時府下之諸隊隊長々々之見込ニいたし候様ニ成行居禮括出來兼候勢ニ御座候去ル廿二日官軍諸藩隊長一人宛登城いたし候様との旨大督府ち御沙汰ニ付御物頭罷出候處

御軍議之由ニ而別紙之通ニ付於此許集議いたし別紙寫之通今朝建白差出申候諸藩も大槻引上之說多有之よし參謀ニ兩設有之未決ニ而諸藩之說を被求候由當時引揚者逆茂六ヶ敷兩總之激徒頭撫いたし候得者萬事徳川家に御委任ニ而解陳ニ相成不申候ハ、如何之憂も引起可申哉も難計相考申候甲府分隊之面々追々清水方始心配ニ相成彼之地當時者至而鎮靜ニ相成候趣を以督府に言上仕候處成得ニ而直引上一昨廿三日當所へ着ニ相成大安心仕候事ニ御座候今日御城ニ呼出御物頭罷出候處先鋒督府是迄藤堂家人數濱松人數ニ而守衛ニ而有之候處藤堂家御免ニ相成迹御人數ニ守衛被仰付當時櫻田井伊家屋敷ニ御在陣ニ而明後日井伊家屋敷ニ轉陣右屋敷不足之分者永田丁字土御屋敷ニ入込候管ニ而彼は大心配仕候當時ハ兩總合戰ニ付所々固ニ嚴重ニ而諸藩軍役費勞難申盡先日五ヶ所歩兵受持ニ而大心配仕候返報ニ而此節督府守衛位者先宜敷方ニ御座候白石清兵衛手御陣踏出者大達ニ而大原卿海軍手ニ而有之候處陸軍應援手ニ相成所々轉陣數々當御屋敷より増正寺本陣に通勤いたし候處大原卿櫻田肥前屋敷ニ轉陣唐津屋敷ニ白石手轉陣猶又日本庄通充院轉陣ニ付御供ニ而罷越大心配之様子ニ御座候右ニ付於横濱練習傳習者存懸茂無之御側より被差越候伊藤十助列茂不怪迷惑之様子御座候付先便得御意申候通白石手ニ者引分御下棺之一條御用ニも可相成候管ニ御座候處前文之通當時躰ニ而者急々ニ御下棺之運ニも難相成候付伊藤列横濱傳習も不出来空敷滞留甚懸念之由ニ御座候間御許ニ罷登當然之御奉公仕候様治定ニ而此許被差立候管ニ御座候尤右之内堀田所兵衛今暫壹人留置此許様子ニより早打ニ而時情を含被差立候管ニ御座候

一御下棺之御一條追々伺候通ニ御座候於御許如何御評決議ニ相成候哉と奉存候先日迄之處ニ而存外連ニ引上之氣色も有之候得共只今分ニ而者一向見當も出來兼且梅雨ニ差望甚按勞仕候事ニ御座候併如何様仕候而も御下棺者被爲在候様奉萬祈候内輪御用意少々宛仕り仕手方等ニも内々談合せ申候御外棺張銅延方御内棺之桐板等者最早出来仕候位ニ御座候一御屋敷ノヽ先便申上候通ニ御座候如何御決議ニ相成候哉奉待候事ニ御座候龍之口御屋敷赤金葺之ケ所々々不殘取剩申付強雨之節者雨漏甚敷梅雨ニ相成候而者懸念之至ニ御座候解取雨漏不仕候處ニ圍置候様談合申候事ニ御座候先便伺之

通ニ被仰付越候ハ、直ニ解取方ニ取懸候等ニ而御便ヲ相待居申候右迄得御意申候餘者十助列方御承知被成下候様奉願
候猶期後便候以上（本文中別紙林支助探索書とあるは四月十七日の條に登録したるものまた大督府より御沙汰云々別紙之通とあるは四月廿二日の條に記載し、別紙寫之通今朝建白とあるは前掲肥後隊長中の書を指すなり）

四月廿五日

淺井新九郎

京都詰
御奉行申様

〔淺井鼎泉記錄〕

徳川家領知の儀ハ百五拾万石より多からモ七拾万石より少からざる内にて各藩の意見可申出旨御下間相成候付三百
年來天下之治績爲建らせ候廉（本文中別紙林支助探索書とあるは四月廿二日の條に記載し、別紙寫之通今朝建白とあるは前掲肥後隊長中の書を指すなり）朝廷於てハ七拾萬石と被定三遠駿の三ヶ國爲領としめらるゝ旨被仰出家督に田安龜之助殿被仰付慶喜公
ハ水戸（一）て可有謹慎との旨（二）有之候

四月廿五日在坂本藩重臣は藩世子護久歸藩の遲延する事情を藩政府に詳報す

〔一新錄自筆狀〕

辰四月廿五日京發閏四月五日着自筆狀
大阪徵マ、

以別紙申達候虎之助殿御發船後京攝間何之異狀茂無御座候 還幸茂來ル廿七八日比ト一旦者風聞迄ニ無之官家方御口
氣茂同様ニ候處近日之又々致立消候趣ニ御座候拟 若殿様御國許ニ 御暇之儀虎之助殿御發船之砌ハ決而無御相違去
ル廿一日御暇可賜候段ハ岩倉公（一）御沙汰被爲在候通ニ而無油斷長谷川杯茂心配仕候末去ル廿二日夕明日之究而御願之
通可被仰出候間御模様窺ニ罷出候様三條公より御沙汰ニ付青地源右衛門一昨廿三日太政官代ニ罷出候處案ニ相違い
たしこよだ陽東より吃トイたし候報告も無之殊ニ 御親征中供奉之御身分ヘ 御賜賜り候而は外々諸侯に致關係候而

已ふらす御自身之御爲ニも宜ル間敷三四日内ニ者必定確左右可有之夫迄御待被成候様被仰聞候付被遊方無之其通ニ
も 御心得可被爲在候得共於江府 朝廷に被差上無之火船も悉々脱走且會津之事も種々致風聞候へ之急々右之確左右
何程ニ可有之哉何様御國許現實沸騰之有様を以又々致歎願候外有之間敷ト唯合一學儀ニ右衛門同道三條公御旅館に罷
出御間柄（二）申を以少々之禁句之稟迄も無伏藏申上一學儀之爲其早打ニ而罷登候間混雜之次第之右之一條ニ而も御察被
下度其跡御用筋供奉等之事ハ左京亮様豐前守殿も被成御座候間決而御間欠ニ不相成様御勤上可有之杯兩人ニ而類を盡
演述仕候處至極御尤之筋ニ付得斗御勘考之上猶精々御疎合可被成候間明日窺ニ罷出候様御沙汰ニ相成申候如何成行可
申哉暨御暇被仰出候而茂虎之助殿御立前より之 御風邪漸々御清解ニ之被爲在候得とも此節ハ餘程御念ニ而いた
御床ニ被成御座候間並も當月中之 御發港之御醫師申より御斷可申上奉存候右之次第二付御期限之如何様とも難申達
小島沖ニ之突然ニ可被爲入就而ハ彼是御不都合ニ有之候而も致方無之モ疎合候事ニ御座候於御元ハ日々御瞻望且 御
病氣御疎合も可有之モ別段早打之御飛脚差立申候此段爲可申達如是御座候已上

四月廿五日

三宅藤右衛門

小笠原一學

御家老殿

尙々右御飛脚ハ疾差立候苦ニ候處日々御模様相替何分其場ニ至り兼無據及延引候段ハ不惡御聞置可被下候且又御
暇被仰出候ハ、御間ニ合候哉否ニ無拘猶又急報を以可得其意候已上

御備頭ニ御示諭之稟書

一兵制御變革之思召者豫一統心得之爲御布告之通候處右御變制之節目等ニ至候而者 御兩殿様御然慮御一定之上ならて
ハ御施行被出來兼候筋ニ候間追々御布令可被爲在候

明治元年

四八五

一右之御都合ニ付其内自然御出兵茂有之候ハ、諸事是迄之御法式を以被差越管ニ候

但時勢活動之眼着を以實用輕便之處置肝要ニ候

一砲術鍛練歩練習熟致し候様との儀之追々御沙汰之通ニ付各出精有之儀者不及申其他文武之藝術之本來之時ニ付彌以無

油斷相勵士氣之本根を養候様ニとの思食ニ候

右書付御備頭舊圖書殿と見ゆるに相渡候事佐田家文書には四月廿五日御組帳口之案に右之通御書付御備頭ニ相成候事あり

四月廿五日本藩軍艦總奉行溝口藏人長崎に至りて外國軍艦を見學し所感を奉行鎌田軍之助に報す

〔一新錄自筆狀〕

明治元四月長崎より藏人殿他筆狀

前文略然之當地ニ而傳習之都合等ハ頃日得御意候通ニ候處軍艦中殊之外事多共上近日之雨乞ニ而之彼是都合惡敷事而已ニ而追々罷越候得共未タ何之間合茂出來兼大ニ致當惑居候事ニ御座候併シ追々軍艦中ニ乘込致見聞候得者是迄目算よて見込候儀とハ大ニ相違仕大炮方士官茂いつきも測量運用等茂兼居候事ニ而右之通無之而者小軍艦之儀者士官之部屋も少く士官而已多ク相成候而ハ中々被行兼候由御座候左候へハ下抽出立前演武場ニ而御軍艦御用懸之儀願曰拾貳人之口を合せ被仰付度段及御内意置候處前文之次第ニ而追々ちあゐるを申候様ニ御座候得共自然いまだ被仰付無御座候ハ、暫之處御見合有御座度巨細之不遠歸着之上御唱合可申モ奉存候鶴崎川尻御船頭之儀是迄米人フルベツキに致傳習候處同人儀殊之外用事多定日を立罷越相斷候由ニ而孰も甚致當惑芳策鶴崎御船頭列より茂如何いたし候哉之段申出候付表立而異人傳習之儀ハ大分之御出方ニも有之候ニ付差寄之處英人ステホールド申者船之儀ハ委敷心得居候ニ付先此者ニ傳習を預候様及差圖互候間左様御承知可被下候右邊之儀ニ付而種々得御意儀も不少候得共筆頭ニ難盡何

茂歸着之上モ相延置申候先ハ右迄早略如是御座候以上

四月廿五日

軍之助様

藏人

四月廿五日播磨安志藩主小笠原幸松丸大坂を發し上京するに際し書を長岡護美に贈り京師に於ての再會を期す

〔子爵長岡家文書〕

一書謹而呈上仕候追々薄暑相成候處先以益御適應爲在奉恐壽候然之先日以來少々御不例被爲在候様奉承如何被爲在候哉當時柄一刻も早く御全快之程奉待候扱小生今日當地發足仕候實ニ當地ニ於て拜顔不仕候段殘念ニ奉存候得共何レ不遠京師ニ於て拜顔可仕候其刻志願之趣可奉申上候扱右京大夫様ニも御不例之趣奉承是又御保愛之程奉願候御全快次第御歸國之由何カ御取込之御義ト奉恐察候御序之節宜敷被仰上候様奉願上候小生上京之上之溝口孤雲殿ニ之彼是御世話ニ可相成候間御序之節御沙汰奉願候恐惶謹言

四月廿五日

長左京亮様

幸松丸

一二百時下折角御加養之程奉願候御惣家様ニ宜敷奉願候且又御測之面々にも宜敷御一聲奉願候已上

四月廿五日越後椎谷藩主堀右京亮謹慎を免せらる

〔京都井江戸返達御用狀扣〕

(四月廿五日附伊賀中將内藤助より我藩及び長州秋田前橋藩留守居宛通達二通の内、一通は慶喜の虚置及び家名相續秩録等につき在京諸侯の意見諮詢の條に出づ)

明治元年

謹慎被免候事

四月

四月廿六日本藩老臣米田虎之助は藩世子護久の使命を帶びて大坂より歸り是日熊本城内に於て一門家老等に其意を傳達す

〔機密間日記〕

四月廿五日

以手紙致啓上候米田虎之助儀大坂より早打ニ而昨夜着いたし候出立之節從。若殿様各様遊山殿休焉殿刑部殿其外例之而今に御意之趣有之段相達候付明日於御城奉承知管御座候間各様に茂可被成御出席と奉存候此段爲可得貴意如是御座候以上

以上

四月廿五日

尙々右之趣遊山殿休焉殿刑部殿に茂可被成御通達と奉存候以上

御 一 同 様

御 用 番(家老)

四月廿六日長岡護美長崎浦上耶蘇教徒一件英國公使との談判江戸鎮臺設置及び砲隊練練天覽のことにつき伊達宗城と書翰を以て問答す

〔子爵長岡家文書〕

恭賀々々

右兄御暇之儀と奉存候僕へも頼の處有之候處昨夕より不得寸暇未及申露候得共

○長日難耐之病症屬快先以降心仕候昨夕ハ憲威職御來光意外恐怖奉感泣候浦上一件も先ツ一定ニ決シ申候得共大政官ニ

○英公使大事件談判ニ付明朝三條旅館落合候趣次第夫より 行在所へ僕可罷出候尤僕今夕一應接ハいたし候
○明日ハ出勤仕候間 行在所ニ而拜顔可仕關東脱走之軍艦皆歸り申候よし最早必ず請取爲申ト大慶仕候何等之故ニ而立

末タ難必と存候

退キ候歟拙意ニハ考定仕得不申候

期日¹可相成歟

○英公使昨日歟入津來ル廿八日 御對面被爲在候旨僕亦罷出申候方ト相考申候當地ニ而ハ暴激輩ハ有之間敷候得とも嚴

明日ハ藤堂隊二小隊出候様三條岬談置候守衛之儀ハ總而御指揮可被下迎モ當局よりハ不及申候 追而御話可申述候

重ニハ有之度ト相考申候御目算奉伺度候大軍艦ハ來リ不申候歟伺試申候横濱より東久卿之御出翰御新聞等ハ無之候歟

万兄ハ不可幸深意有之乍殘念烏卿と合談坊兄ニ決候

○萬里小路様御奪掠之趣傳承痛心罷在候處坊城世子ニ御決定之旨惣公より拜聞爲局中大慶仕候

尤緊要越宰凡テ御同意此間岩兄へも申置候乍然難畏意味モ可有之歟御當局之大事ニ付充分被仰立度候

○關東平定言上ニ相成候ハ、江戸鎮臺ハ早々被仰付度歟ト奉考候二百幾十萬人之難遷且東山道關八州ハ手速き處ニ付速

茂小事件ハ江戸ニ而裁判歟ト愚考仕候越前宰相兄の任ト感考足下御高評如何候奉伺度候

○過日砲數御訊問之旨取しらべ候趣明日言上可仕候何日之天覽ト申義相分り候ハ、弊藩大砲隊當時京地ニ詰居候而々御

皇國第一等之礮隊ニ可有之不在²而殘念ニ御座候 承知も可被爲在池部啓太門弟ニ而啓太も罷在り同人ハ數年之洋炮家ニ而候得者右一隊ナラハ十二門位ハ御覽ニ備工候 懈愧之至何卒組合ニ仕度尙申合候御 而も宜敷ト相考申候在坂之向ハ十分ニハ無之³かし二門ハ有之候得共未熟ニ而ハ貴藩之御相手ニハ成り兼可申ト相考家來姓名御示可被下候

申候

明治元年

四八九

四月廿六日夜第九字認入候

下

左

京

亮

公

四月廿七日各藩貢士等太政官代に於て徳川氏の處置を議するに當り岩倉副總裁の意見書を示さ

る

〔一新錄皇令〕

四月廿七日已刻御答書持參 太政官代に罷出候處午刻過於議事所東園中將殿平松甲斐權介殿御出席史官二人侍坐御答書御受取之上副總裁御見込書拜見被仰付左ニ

具

視

窃ニ考フルニ創業經國之大活法ハ尋常規律を以處スヘカラサル事アリ何ントナレハ今一人私ニ人ヲ殺ス者アリ官吏捕テ法ヲ加ントスルニ當テ其人薙髮シテ死ヲ謝ストモ法ニ於テ尙免ルヘカラス况ヤ慶喜恐多クモ萬乘之兇敵現ニ御親征聖躬ヲ勞シ玉フ程ノ罪人ナレハ必其身首處ヲ異ニシテ大義ヲ天下ニ明ニスヘシ豈唯謝ヲ以テ其罪ヲ免スヘケンヤ是法律ノ明白正著論ヲ待サル處ナリ然ルニ創業ノ功ハ國ヲ治ルニアリ國ヲ治ムルノ要ハ民ヲ安スルニアリ故ニ寛洪至仁ノ聖旨ヲ以テ古來尋常ノ規律ニヨラセラレス非常ノ大活法ヲ行セラレ玉フナレハ今目前ミル所ノ異同ニ因テ當否ヲ論シカタシ唯事ノ難易勢ノ緩急ニヨツテ宜ク制スヘシ必竟其家祿ノ多少ニ至テハ我ニ於テ深く得失ヲナスニ足ラサルニ似タリ只至急トスル所ハ至仁ノ聖旨ヲ奉シ萬民ヲ安スルニアルベシ尤天下萬姓頸ヲ延テ聖斷ヲ仰クノ秋ニヘ各能此意ヲ轉認シテ公儀ヲ盡サン事ヲ欲ス

右久留米藩方借り寫

閏四月二日

首

藤(敬助)

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

來月朔日英國公使國書持參參本願寺に參上候間家來下々ニ至迄不禮之振舞有之間敷様急度可被申付置候以上

辨

事

四月廿八日

毛利長門守殿
龟井隱岐守殿
淺野紀伊守殿
細川右京大夫殿
長岡左京亮殿

猶以早々廻達觸留返却可有之候也

四月廿八日在坂本藩重臣は藩世子護久歸藩遲延の事情徳川氏處分及び耶蘇教徒の件に關して藩

○廿八日

(前略)本日軍艦富士翔鶴朝陽觀光の四艘引渡す監察兩人出張

四月廿八日在坂本藩重臣は藩世子護久歸藩遲延の事情徳川氏處分及び耶蘇教徒の件に關して藩

明治元年

政府へ通報す

〔若殿様左京亮様御油坂中日記〕

以別紙申達候若殿様御下國御延引付而ハ去ル廿五日早打官脚差立得貴意候通ニ候處其夕左京亮様御住居に三條公御出夜四ツ時分之御寃話押立之右御下國之御一條ニ而一學罷出現實之御模様をも具ニ御聞取被成候處ニ而ハ御國情無餘儀次第ハ飽迄汲取被成候得とも外ニも二三藩御暇之書付差出頻ニ嘆願之向有之左様之類を被差置若殿様而已御願之通被仰出候而ハ御間柄猶更御心配被成候由然ルニ 還幸之儀何方よりも重疊奉希望候而已ならず 主上茂尤被遊 御端候得共關東より今一左右無之候而ハ何分其御筋ニ相運不申右御左右茂四五日内ニハ必可有之其上ハ一番ニ御暇被仰懇切ニ被仰聞候由然處德川家御取立秩祿之高等昨今別紙之通御下問ニ相成申間敷何様追而之御模様も可有御座と先差扣罷在候尤其内突然御暇被仰出候へハ御異狀御請も相濟不申候而ハ 還幸茂何程ニ可被爲在哉左候へハ餘程御間も可有之候へ共此上手を替品を替御願立ニ相成候而ハ御國大士臺之御爲ニ相成申間敷何様追而之御模様も可有御座と先差扣罷在候尤其内突然御暇被仰出候へハ御異例も日を逐御清解被遊候付直様御發艦可被爲在候間左様御承知候様存候

一右徳川家秩祿等之儀當表ニ而ハ未タ御下問無之 御二方様共御職掌被爲在候付京師之御見込來候上御廟議ニ御加リ迄ニ而也可被爲在哉何乞ニいたし候而も百萬石以上之高ニハ被仰付候方ト御建議之儀段々咄合居候事ニ御座候此御一舉ハ會之成行ニ茂可致關係尤至重之御事柄御座候然處 朝廷御趣意ハ諸藩之見込よりも案外御寃典ニ出可申哉之考も御座候何卒其筋を奉禱候

一耶蘇教信向之もの共御處置之儀ニ付而御下問並御答之書付とも別紙寫差進申候當地ニ而ハ何方之見込も大概同様ニ候得とも京師ニ而ハ肥前侯越前侯其餘異見之向不少由御自國之御政事ニ之候得とも自然と外國ニ致關係如何成混雜ニ成

四月廿八日

三宅藤右衛門

御家老宛

四月廿八日我藩兵伊家邸に移り東海道先鋒總督府守衛の任に當る

〔安田家明治元年關東征伐事件覽書〕

四月廿八日予カ大砲隊櫻田ノ井伊本邸へ移轉ス

〔王政復古帳〕

(四月廿五日淺井新九郎より在京重臣に通報書一通)

今日御城ニ呼出御物頭罷出候處先鋒督府是迄藤堂家人数清松人數ニ而守衛ニ而有之候處藤堂家御免ニ相成迹御人數ニ守衛被仰付當時櫻田井伊家屋敷に御在陣ニ而明後日井伊家屋敷ニ轉陣右屋敷不足之分者永田丁字土御屋敷ニ入込候苦ニ而彼是大心配仕候當時ハ兩總合戰ニ付所々固ニ嚴重ニ而諸藩軍役費勞難申盡先日五ヶ所歩兵受持ニ而大心配仕候返報ニ而此節督府守衛位者先宜敷方ニ御座候

(右二書を見るに藩兵の井伊邸に移轉せし日に一日の差あり然るに淺井の書は豫定の報告なば安田家記録の方に據りたり)

四月廿九日石油水宇佐管崎八幡大菩薩の稱號を改めらる

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

明治元年

四九三

四月廿九日太政官より御渡之御書付寫
此度大政御一新ニ付石清水宇佐宮崎八幡大菩薩之稱號被爲止 八幡大神と奉稱候様被 仰出候事

四月

四月廿九日美濃加納藩主永井肥前守武州川越藩主松平大和守謹慎差控等を宥免せらる

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

四月廿九日太政官より御渡之御書付寫

四月

松 平 大 和 守
永 井 肥 前 守

謹慎被免候事

四月

上京之上先差控被 仰付置候處差控ニ不及之旨被 仰出候事

四月

四月廿九日參謀西郷吉之助等徳川氏處置伺の爲め今朝江戸を發して上京の途に就く

〔海舟日誌〕

○廿九日

西郷吉之助長藩兩人瑞丸と云船にて上京御所置伺の爲なり今朝出帆

四月某日東山道總督府は信州の賊徒亂暴相募り民生塗炭に苦しむを以て近境謀藩に令して之を

鎮撫せしむ

〔安津免久佐〕

東山道總督府より近傍諸藩に御達之寫

大政御一新之折柄未タ御政事向不行届を幸として無賴之惡徒共愚民を欺キ徒黨を結ヒ恐多くも官軍之内命或薩長より被申付候杯ト偽り唱ヘ無事之富家に押入強談難問を申懸加之放火致し日々亂暴相募り生民全ク塗炭ニ陥リ候段於總督府も深く御憂慮被遊一日茂難捨置依之信州一國之賊徒鎮撫向當國列藩に被 仰付候間各藩申合夫々持場を定人數差出置賊黨之亂妨を防キ惡徒を召捕諸藩脱走人或無宿者ニ至テハ速ニ於其藩可處死刑候尤百姓たりと雖徒黨ニ頭立向ハ平日ノ行狀正邪を糺し夫々可致所置候元來無賴之惡徒共徒黨を結ヒ蜂起シ候儀ニ候へハ大儀條理を以鎮定候儀一朝一夕ニ不可行者ニ候間 勅命之旨申達し以兵威鎮撫可仕候但年貢諸運上惣而御收納向之儀ハ近々 御確定之上 御沙汰可有之候間夫迄之處只管鎮撫民政ニ心を用イ萬民其業ニ安し候様精々可致盡力旨更被仰出候間此段相達候也

辰 四月

四月某日本藩偵吏は探索せし北越地方の情況を報告す

〔一新錄探索報告〕

北越情實書

一高田藩ハ勤 王ニ一決仕候從來之軟弱藩故會之暴威ヲ以テ迫リ候ハ、如何變シ可申哉到底難測
一長岡藩ハ士氣振ヒ候事北越第一等也サレト其内實ハ四分五裂或ハ勤王或ハ佐會人之異志アリ兵雖多不足恐當時要路之者太々苛酷ニシテ民情頗尙々
一與板藩ハ勤王ニ決シ候山近頃會ト兵端ヲ釀シ居候何分小藩而力微誠ニ可憐要之君幼而臣愚也

明 治 元 年

四九五

一村松藩ハ一姦大夫アリ堀右衛門三郎ト云昨年中七忠臣ヲ枉害シテ會ニ結托スサレト因藩憤起之由右之姦物ヲ倒シ候ハ、立所ニ勤王ニ相成可申候

一村上藩ハ因循苟且徒ニ鼠首兩端ヲ抱クノミ

一柏崎陳屋ハ松平越中板倉之世子潛伏仕居候會兵隨分屯集之山

一小千谷陳屋ハ會兵二三百人屯集之山

一小出陳屋モ右同斷

一彌彦觀音寺ノ二ヶ所會兵屯集仕居候其中多分ハ無賴惡小之徒ナル由

一酒屋水原之二ヶ所陳屋ハ會兵大ニ幅湊之由

一會兵已ニ佐島ヲ奪新潟奉行所ヲ拂ヒ幕領五拾万石程之地盡ク合セ傍若無人申計モナシ剩へ年貢ハ皆金納ニ取立如之水原一卿ヘハ四拾万金申付ケ田上村之豪家ヘハ白書銃槍ヲ携エテ四十人余押入り財貨ヲ掠奪致ス杯之種々之惡光景右ニ付北越之人心ヲ大ニ動シ候此討會之大機會ト存候

一北越ハ四塞共ニ險地有之陸地ヨリ討會ニテハ不容易海路ヨリ彼之不慮ニ出度事也要之彼ヨリ先セラレスシテ我ヨリ先ニスル策ノ上ト存候

一北越ニ今町柏崎出雲崎寺泊新潟之五港アリ先ツ海軍ヲ二道ニ分チ一手ハ柏崎ヨリ上陸同所陳屋ヲ屠リ夫ヨリ小千谷陳屋ヲ拂テ右ニ木營ヲ定メ小出脇町出雲崎等ノ陳屋ヲ合セ長岡與板ノ兵ヲ促シテ信濃川ヲ下リ津川口ヘ赴キ一手ハ新潟ヨリ上陸同所會兵ヲ拂ヒ夫ヨリ柴田城ニ入ツテ右ヲ本營ト定水原酒屋等ノ陳屋ヲ屠リ村松村上ノ兵ヲ促シテ津川口ヲ固メ度事暨ヘハ七郡ヲ略定シテ津川口ヲ固ムルハ人ヲ雲梯ニ登テ其梯檣ヲ拔カ如シ會賊百萬之衆アリト雖モ其倒也立テ待ヘシ

但シ五港共遠淺ニテ續船ハ不便也サレト何レニモ砲臺ノ設水關ノ備ナシ只神兵降天之策ヲ用ヒ彼ノ不意ニ出度事

一會賊暴也サレト兵強シテ上下和ス殊更策略ニモ富モ候得ハ實ニ天下第一勁敵ト存候若シ官軍ニ於テ萬一アラハ東西分統之事末可知候間飽迄策之上ニ出度事既ニ北陸道頭撫關東工御引取ニ相成與羽鏡撫使御下向ニ相成候上ハ奥州只飽而先其聲而後其實越後只先其實而後其聲此討會第一之急務ト存候

一隊長ニ潘北越ニ罷下リ候上ハ其成功屹度相立チ可申ト存候併シ七郡之人心服與不服末可知仰願クハ人望之公卿御一人御惣督ニテ御下向ニ相成候ハ、人々之振舞ハ申迄モ無御座算食壺鑿以迎王師之事疑ナクト存候

四月

四月某日脱走舊幕臣等大公至正忠膽義烈の志士天兵を起して皇國の爲に賣國不義の奸賊を誅鋤すへしとの檄文を發す

〔佐田家文書〕

薩賊奸謀ヲ逞シ徳川大君朝敵ニ陥レ封土城郭兵器悉ク奪臣子ヲ以君父ヲ討シム決テ公明正大之王政ニ非ス况ヤ今上幼冲御慮ニ出サルコト天下衆人の識ル所必竟彼か所爲ニシテ朝廷ヲ欺キ奉ル所ナリ薩賊前日尊攘ヲ主張シナカラ今日既ニ皇室ヲ輕侮シ奉リ朝憲ヲ亂シ人倫ノ大義ヲ破外夷ニ媚テ獻スルニ至其反覆表裏賣國之賊タルコト明也諸藩主一々諫爭スルモノナキノミカ却テ惡ヲ助タルハ抑何コトソヤ嗚呼悲哉皇國ノ正氣泯滅シ外國ニ呑併セラルノ期遠カラサルコト夫大君一己ノ私ヲ去リ皇國百萬生靈ノ爲ニ社稷ヲ惜マズ三百年ノ基業一朝ニ搥テ水戸ノ僻邑ニ退隱ス大君ハ眞ニ仁者ト謂ヘシ僕等譜代恩顧ノ臣トシテ泣血奉命主家之顧覆ヲ救ワス賊徒ニ一矢ヲモ投セヌテ々々脱走スル事士道之耻辱先朝孝明大皇帝及ヒ徳川氏祖々神等ニ對シ地下ニ謝スルノ詞ナケン然ルチ今僕等忍シテ一命ヲ全フシ暫浮浪ノ徒トナルト雖皇國ノ人民タリ安ソ賣國不義ノ賊ト俱ニ天ヲ戴クニ忍ンヤ唯節ニ死シテ後已シノミ待ヘシ不日ニ薩賊ヲ屠且コレヲ助クル藩主ノ不義ヲ問ントスルヲ是全僕等カ私ニアラス報國盡忠効好ノ義舉タリ此時

ニ當リ錦旗天地ニ翻々スルモ必踏爾ルヘシ錦旗素ヨリ人手ニ成ル賊手ニ在テ賊手ニ動ク賊旗何ヲ恐ル、ニ足ラン大公至正忠貞義烈徳川浪士、皇國ノ爲ニ賣國不義ノ賊ヲ誅鋤ス則天兵也天兵起ルノ日兼テ同盟全義ノ諸藩君臣四方應援協力スヘシ過テ機會ヲ失ヒ汚名ヲ千載ノ下ニ残スコトナカレ因テ檄ス

戊辰夏四月

徳川氏脱藩浪人共

閏四月朔日東山道の官軍進みて日光山に逼る舊幕大鳥圭介等支ふる能はず退きて會津境内に向ふ

〔幕末實戰史〕

大鳥圭介述

閏四月朔日兵隊中議論二種あり甲は今此に彈薬兵糧の設もなく持久せば不日困迫に至る故一旦會津境内に入り一體の規律を調へ藥糧を備へ而して後再び歸り来るを良とすと乙曰く今眼前に敵兵の來るを見て一戦もなさず會津に入るは武人の耻る所なり彈薬は乏しとて血戰して神廟の前に死せば是れ元より願ふ所の墳墓なれば遺憾なしと兩説ともに理あり乍去乙論者は眞に愉快の見識なれとも衆人の難する所歩兵どもにて殊更士崩瓦解を免れず故に余は甲説の方穩にして全隊を取締にも良しと思へり因つて本日早朝各隊の士官を集め格別意見もなき故今より先傷者を運び出す手筈をなし今晚にも此所を出發可然と各隊に令を傳へたり(中略)

今早朝土州の人數已に今市に入り來れる由なれば草風隊並に傳習隊一小隊を七里村に出して今市に備へしむ午時頃今市の方に砲聲聞ゆるの報あり間もなく今市より兵を出し七里村にて戦事起れりとの注進あり因つて余想ふに先の如く既に軍議決したれば可成戦争を爲さる方可然と考ふれども已に砲聲聞ゆるに至つては夫々兵を備へ置き其の中に各隊支度をなし今晚にも出發すべしと令を傳へ彼是周旋中砲聲も止みたれば斥候の者を遣せしが格別の戦にもあらず相引にて戦止となり身方の怪我草風隊に一人なり敵三人打発したりと云ふ其の後各隊速に出發の用意をなし病者は小佐

越通より送るへき令を傳へ先鋒は七ツ頃日光を發す余が出しは既に六ツ時過にて燭を點せり

閏四月朔日常州矢田部藩主細川玄蕃頭上京す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

一左之御方様先月十一日御在所表御發足今日御着京ニ相成候ニ付被成御出候筈之處御玄關御締切中ニ付御使者を以爲御知被仰進候

以上

閏四月朔日

村上彈助殿

細川玄蕃頭様

林新九郎

山形典次郎

山形典次郎

右裁判所判事介被仰付候事

閏四月二日

右寺社掛御勘定掛被仰付候事

閏四月二日

閏四月二日大總督府田安慶頼に感狀を與へ大久保一翁勝安房に江戸鎮撫方を委任せらる

〔一新錄皇令〕

田 安 中 納 言

昨今之形勢ニ付格別苦慮盡力之事件深感思召候尙此上見込之儀之無忌憚申出萬端可抽誠忠旨大總督宮御沙汰候事

閏四月二日

右一通

徳川氏之若年寄也
勝安房翁
大久保一翁
大總督府
參謀

江府鎮撫萬端取締之儀御委任候間可抽精勤大總督宮御沙汰候事

右一通
〔海舟日誌〕

○閏四月二日
本日田安殿大久保一翁小臣三名大總督より登城可致旨命あり病氣を以て御断申上る一翁名代御書付ける

勝安房

昨今之時勢ニ付格別苦慮盡力之事件深感思食候猶此上見込之儀者無忌憚申出萬端可抽誠忠旨大總督府御沙汰候事

辰閏四月二日

江府鎮撫萬端取締之儀委任候間可有精勤大總督宮御沙汰候事

大總督府
參謀

月日

辰閏四月二日

大總督府
參謀

〔男爵安場家文書〕

去ル廿六日飯山ニおるて歩兵屯し松代勢ヲ打拂捷を報し來申候

拜呈仕候彌増御壯榮可被成御配慮奉察候垣宿侯探索之儀ハ島田次兵衛手續ニ而大略方角も相分今日關宿生歸城ニ付御聞取可被成私紙中ニハ略之仕候横山家ハ始末付候迄大頭を留メニ相成申候

一西城集議之事御出立後御兩卿ニ具ニ御喟合申上候處深ク御合點ニ相成殊更柳原公分明ニ御承知ニ相成木梨諸共ニ被仰立候處西郷初メ異存逆無之候得共兎角小田原評議ニ而不決斷四五日前林玖十郎京都行ニ相成是ハ家名高封域之事主ニ伺ニ罷越軍艦受取相濟候故西郷一昨日猶出立仕候兩人留守中海江田然ル處兩卿木梨之意ハ京都ハ京都ニして先指寄當地丈ヶ之運ひハ官軍カ相定メ不申而ハ一日不安とて申立候得共前文之運ニ而只々關門堅メ嚴重位之事のミニ而兩卿木梨諸共ニ屈し一兩日ハ出動も見合セニ相成候處泰吉カ申上候ニ被仰上候處宮合點ニ相成今日田安大久保勝ハ江戸市在家中重々御喟合ニ相成候處海江田之からを合點いたし直々宮ニ被仰上候處宮合點ニ相成今日田安大久保勝ハ江戸市在家中ニ而相合メ可申との御沙汰ニ候先右之通ニ而ハ江城市中も少しハ安堵可仕様ニ奉存候池邊ハ四日出立ニ相極り申候津田も不相分壯ニ論談いたし居申候今日迄之處如此猶横山家便之節後事ハ可申上候馴井紙面相添さし出申候以上

四月二日 一平様(安場)

泰

閏四月三日徳川慶喜の處置及び家名相續秩祿等に關して意見を上陳すべく重ねて在坂諸侯に諮詢せらる

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

(明治元年夏期ノ大勢及ヒ毛利氏抄略) 德川慶喜段々悔悟恭順之趣愈謝罪之實効相立候ニ付慶喜之處分且家名被立下候ニ付相續人並秩祿高之儀衆議公論ヲ執リ御裁決被遊度候間各無伏職見込之程以封書可申上様被仰出候事

閏四月

右之於大坂御下問之御書附也 閏四月三日出る也

〔防長回天史 第六編上〕

(明治元年夏期ノ大勢及ヒ毛利氏抄略) 閏四月三日大阪行在所ニ於テ列藩代表者ヲ召シ輔弼中山大納言朝命ヲ傳へ衆議輿論ヲ參照スルノ趣旨ニ據リ徳川氏ノ處分ヲ諮詢シ封事ヲ以テ其意見ヲ上ラシメ限ルニ翌五日ヲ以テス

閏四月四日徳川慶喜の降伏謝罪を寛宥し給ひ七日を以て還幸あらせられ且つ爾來萬機を親裁し文武を講究し給ふべき叡旨を垂示せらる

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

今四日辨事局より御呼出ニ付内山又助罷出候處田中國之助を以御書付五通御渡ニ相成則寫相達申候以上
京都出張

閏四月四日

御奉行衆中

此度大總督宮より言上之趣も有之徳川慶喜降伏謝罪奉仰 天裁候ニ付而者非常至仁之 収慮を以寛典之御處置可被仰出依之來ル七日 還幸被爲在候旨被仰出候事

後四月

先般 御誠誓之旨ニ被爲基此度 還幸之上者 思食を以不日二條城ニ 玉座を被爲移萬機親敷被聞召猶御餘暇を以文武御講究をも被爲遊候旨被仰出候ニ付彌以公卿列藩士民ニ至迄可有勉勵 御沙汰候事

閏四月

(右二通は翌五日彦根藩より内山又助に渡されたる書付五通之内)

此度御親征海軍 天覽被爲遊時機ニ依り東海道に大施を被爲進候 思食之處大總督宮より關東之形勢言上之趣有之暫浪華ニ 御滞在被爲遊候然處此度徳川慶喜恭順謝罪奉仰 天裁候付而者不可赦之大罪嚴譴至當ニ候得共祖先之勤勞不被爲捨非常至仁之 収慮を以寛典之御所置被仰出候依之兼而御布令之通連ニ 還幸被爲在慶喜伏罪江戸城平定之廉相立候處を以御先靈に被爲告候 思食ニ付 山陵御參拜被仰出候乍去會津其外殘黨之者尙々屯在暴威を張り抗官軍候諒相候此後之勤靜ニ依り直チニ御親征を茂可被爲遊候間公卿列藩益々奮勵國事に盡瘁すへしとの勅諭を下さる

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

(閏四月四日辨事局より内山又助に渡されたる書付五通之内)
此度御親征海軍 天覽被爲遊時機ニ依り東海道に大施を被爲進候 思食之處大總督宮より關東之形勢言上之趣有之暫浪華ニ 御滞在被爲遊候然處此度徳川慶喜恭順謝罪奉仰 天裁候付而者不可赦之大罪嚴譴至當ニ候得共祖先之勤勞不被爲捨非常至仁之 収慮を以寛典之御所置被仰出候依之兼而御布令之通連ニ 還幸被爲在慶喜伏罪江戸城平定之廉相立候處を以御先靈に被爲告候 思食ニ付 山陵御參拜被仰出候乍去會津其外殘黨之者尙々屯在暴威を張り抗官軍候諒相候此後之勤靜ニ依り直チニ御親征を茂可被爲遊候間公卿列藩益々奮勵國事に盡瘁すへしとの勅諭を下さる

明治元年

五〇三

又追々内外の大勢被爲知食海陸軍之御作興より列藩之御指揮海外各國之御扱等其當を被爲得候と否とハ御興廢之較る所殊ニ地勢之利不利ハ關係之最大なる儀ニ付彌以 御勵精 御誠誓ニ被爲基以後屢浪華ニ 行幸官代を被爲置萬機御親裁内外之大勢 御統馭被爲遊候 収慮之旨被 仰出候ニ付上下厚く奉戴シ各其分を可盡 御沙汰候事但今般被 仰出候通京都者先二條城と被爲定候 御宗廟之地旁以以來別而御警衛向等厚く被 仰付候浪華之儀之屢行幸被爲遊候ニ付而者下民之困苦被爲厭 行在所官代等追而地利御撰ひ御造營被爲在候旨被 仰出候事

閏四月

閏四月四日自今時機により四方へ行幸あらせらるべきを以て民力休養の爲め務めて簡便省略を旨とし給ふとの勅諭を下さる

〔若殿様左京亮様御滯坂中日記〕

(閏四月四日辨事局より内山又助に渡されたる書付五通の内)

向後治亂とも時機ニ依り四方ニ 行幸可被爲遊御儀可有之候付供奉御列之儀茂三等ニ被爲定追而可被 仰出殊ニ近來國家多事士民夫役ニ苦しみ候段速々達 天聽敷 思召候民力を省する者國家之急務ニ付右三等中御平常者可成丈ヶ第一御簡便ニ御隨ひ被爲遊候段被 仰出候付 収慮之旨厚く可相心得 御沙汰候事

閏四月

閏四月四日法令を堅守し禮義廉耻を主とし諸家倍從者に至るまで不法の行爲なきやう嚴に戒慎すへき旨を達せらる

〔若殿様左京亮様御滯坂中日記〕

(閏四月四日辨事局より内山又助に渡されたる書付五通の内)

此度 違奉被 仰出候付而者兼而 御沙汰ニ相成候 御法度之件々堅相守禮儀廉耻を主とし聊心得達之所業屹度無之様相傳各其家々倍從之者ニ至迄不渉様嚴重可申付候若心得達之輩於有之ハ屹度 御沙汰可有之旨更被 仰出候事

閏四月

閏四月四日肥後國天草島之内に遠島の刑に處せられて居住せる者の有無を調査申告すへき旨を我藩に達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

一今日大政官代刑法局より御呼出ニ付罷出候處肥後國天草島之内に遠島被 仰付候者居住有無委任ニ取調急速御届出ニ相成候様口達有之候間此段相達申候以上

閏四月四日

林 新九郎

村上 弾助殿

閏四月四日長岡護美從四位下侍從に叙任せられ且つ第二軍副總督として兵を率ゐて出征すべしと命ぜらる

〔若殿様左京亮様御下坂中御記錄、若殿様左京亮様御滯坂中日記〕

一左京亮様昨日於 行在所左之通被爲蒙 仰候事

從四位下侍從 宜下被 仰出候事

長岡左京亮

閏四月五日陰

明治元年

徳川慶喜及伏罪候處會津其外殘黨之者益逞野心所々亂行人民安堵之思を不爲之趣達 故聽被憐 寝襟候依而第二軍副惣督被 仰付候條人數引連早々出發抽丹誠殘賊掃擊可奉安 寝襟旨被 仰出候事
但惣督副惣督得と遂軍議時機ニ依り東海東山二道に立別れ可致進軍候事

閏四月

閏四月四日在坂本藩重臣は會津の賊勢强大なるに依りて應援出兵の命下らんことも計り難して兵隊を精選し出師の準備を整へ臨時の命に應せしむへしとの旨を藩政府に通牒す

〔一新錄自筆狀〕

辰閏四月四日京發自筆狀寫 御人數御登之事

以別紙申達候歩兵二小隊早々被差登候様との儀之虎之助殿御持下之通ニ付究而不遠可被差立ト奉存候然處會津之事種々致風聞而已ふらず既ニ薩州長州藝佐土原杯に應援之出兵も被 仰付候程之事ニ而猶追而之模様次第ニ此方様方に茂同様 御沙汰難量自然左様之場合ニいより御斷杯被 仰上ハ無之依之前文ニ二小隊之外ニ贊兵を省御備片手夫¹爲遊軍步兵二小隊々長司令官等一齊相捕至而簡便輕行御左右次第早速出立差支無之様御手當被仰付置度旨 若殿様御沙汰被爲在候間此段申達候委細ハ不日ニ罷下直可及御相談候以上(蓋し本書は前掲謹美出征の命を拜)

閏四月四日

小笠原一學
三宅藤右衛門

閏四月四日本幕世子護久徳川慶喜處分に關する諮詢に對し奉答書を提出す

〔若殿様左京亮様御常坂中日記、尊攘錄御建白御國議〕

徳川慶喜謝罪之實効相立候付而稟々御下問之趣奉得其意候同人儀即今水戸に退キ謹慎罷在候様被 仰付差寄之御處分ハ相濟候譯ニ候得とも一旦天下之大權御委任三公ニ茂被列候身分此儘庶人ニ而被差置候之權衡何程ニ可有御座哉愈以謹慎相貫候ハ、如何様卒御取扱之品も被爲在度奉存候家名相續之儀者同族之人物委敷存不申候付如何様とも難申上秩祿高之儀者大概百萬石餘も可被下置裁と何方ニ而も私語キ候様子ニ御座候處此節ニいより慶喜一己之恭順聊も動不申處より 朝廷御沙汰之通謝罪之稟々相立况東照家康以來二百五拾年之治績を開候ハ無比類功業ニ候間旁に被對一等も二等も御宣典を被加人意之表ニ出候御處置被爲在候ハ、末々迄茂耳目を驚し最前御追討之天兵被差下候茂強チニ干戈を被用候譯ニハ無之必竟有罪ハ必罰し有善之必賞し一刻も御新政之大綱領確定いたし萬民尊崇之苦を被遊御解候御趣意故慶喜謝罪之實効相立候上ハ如是難有御取扱ニ相成就而ハ數多之臣隸生活之道も相立候と自他一同益奉感戴恩威並行乞可申奉存候され者此御一舉よツ萬般之事件ニ響合不語不言之内神州治安之御基業を被開候ニ相違ハ有御座間敷尤大切之御處置ニ付幾重ニも御評議ヲ被凝度奉懇願候區々之見込ニ御座候得とも折角之御尋ニ付無伏藏言上仕候以上

閏四月五日

細川右京大夫

〔若殿様左京亮様御常坂中日記、一新錄自筆狀〕

別紙を以申達候徳川家御取扱之儀ニ付而之屹度御建言御盡力被爲在度旨先便被仰越候通至極御同意之筋ニ有之然處今度相續人並秩祿高之儀於京師御下向有之就而ハ壬生邸ニ而義論之書取出來いたし別紙之通申來候付當表ニ而も重疊致評議則御袖扣寫之通相決今日御差上ニ相成左京亮様に之右之御趣意御口上ニ而被仰立至急ニ御處置ニ相成江戸表丈ケ之處一刻も結局ニいより候様御義論之筈ニ御座候何卒都合能被行かしと禱申候此段爲可申達如是御座候以上

閏四月三日

三宅藤右衛門

明治元年

五〇七

小笠原一學

御家老殿

付札 本文之通ニ候處昨夕當表ニ而茂御下問有之候付御袖扣ニ不及別紙寫之通表立御答書今日御差上ニ相成申候右之一條
茂有之旁昨夕差立候筈之急脚今日ニ差延申候以上

閏四月四日

閏四月某日本藩徵士長谷川二右衛門德川慶喜の處分家名相續等に關する下間に答申す

〔荻家文書〕

幕府御處置何方も同論ニ出候間頓斗之大旨迄御下問ニ付略言上左之通
關東御處置之儀慶喜恭順謝罪之實効相立候上之相應之位階被返下家名相續之人脉之旗下懇願ニ被任祖宗已來數百年之功跡不被爲捨 御聖斷を以諸侯ニ長タルノ封祿於被恩賜者 御仁恤之御誠意普ク徹底假令順逆を不辨徒ニ至迄如斯正大之 御實効被表候ハ、深々奉感謝速ニ風塵可仕奉存候事

右御下問ニ付不顧憚微意建言仕候誠恐誠惶敬白

閏四月

長谷川二右衛門

閏四月四日仙臺米澤二藩檄を發して奥羽諸藩の同盟を策せんとす

〔防長回天史第六編上〕

〔奥羽鎮撫使ト奥羽同盟抄略〕

此時ニ方リ仙米會三藩ノ陰謀ハ更ニ其歩ヲ進メ奥羽列藩糾合ノ秘密契約ヲ結ヒ閏四月四日仙米二藩老臣ノ名ヲ以テ檄

ヲ奥羽大小二十七藩ニ飛ハセ白石ニ來會ヲ促シタリ蓋シ奥羽同盟ノ力ヲ以テ總督府ヲ威嚇シ排斥センカ爲メナリ(中)

・仙米老臣ノ飛檄左ノ如シ

以手紙致啓達候陸奥守並ニ彈正大弼儀會津容保追討之先鋒被仰付陸奥守被致出陣候處今般容保家來共陣門へ相越降伏

謝罪之儀數願申出候ニ付致御衆評度候間御重役之内白石陣所へ早々御出張相成候様致度候以上

閏四月四日

閏四月五日神佛混淆を廢し諸社の別當社僧等還俗し神道を以て勤仕すへしとの旨を令達せらる
〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(閏四月五日彦根藩留守居横内平左衛門佐成源五兵衛より我藩外六藩留守居へ廻達五通の内)

今般諸國大小之神社ニ於て神佛混淆之儀者御廢止ニ相成候付別當社僧之輩者還俗之上神主社人等之稱號ニ相轉神道を以勤仕可致候若亦無據差支有之且者佛教信仰ニ而還俗之儀不得心之輩者神勤相止立退可申候事

但還俗之ものハ僧位僧官返上勿論ニ候官位之儀者追而御沙汰可有之候間當今之處衣服は風折烏帽子淨衣白差貫着用勤仕可致候事

一是迄神職相勤候ものと庶順之儀之夫々伺出可申候其上御取調ニ而御沙汰可有之候事

閏四月(彦根藩内佐成兩人よりの廻達文に別紙御達書五通とある其二通は前四日の條に掲げたる七日還幸の件及)二條城に玉座を移せらるとの件にして他の二通は次條の制札改正の達にて本條の達と合せて五通なり

閏四月五日先きに發布せる制札中切支丹邪宗門禁止の令文を改めらる
〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(閏四月五日彦根藩より廻達文五通の内二通)

先般御布令有之候切支丹邪宗門者年來固く御制禁ニ有之候處其外邪宗門之儀者惣而固く被相禁候付而者混淆いたし心得

明治元年

違有之候而者不宜候ニ付此度別紙之通被相改候條早々制札調替可有揭示候事

閏四月

第三札

定

一切支丹宗門之儀者是迄御制禁之通固く可相守事
一邪宗門之儀者固く禁止候事

慶應四年三月

太

政

官

〔鶴鳴餘韻 宗城公御事蹟〕

四月廿日の事ありき公(伊達)は外國知官事として英公使バーカスを其旅館に訪問せられしにバーカスは太政官日誌を繰り開きて指を以て示していはく太政官日誌に切支丹邪宗門云々とあるは以ての外の事あり外國人が如何やう懇信を厚く成さるべき朝廷より談判ありとも西洋各國にて政教の基本と致して尊信する耶蘇を邪宗門と日本國中へ觸れ示されでは相濟まざる儀實に各國に對して此上あき失體あり是まで各國人民又は公使參朝の途中の無禮等と比ぶべき譯のものにあらず右様の事にては國書を差し出したればとて無益の至り必ず必ず日本の御爲め宜しからずと存ぜらる兼々御懇意あれば御話申すあり東久世卿の話にも此制札は基本の由別て基本より西洋一般に尊信する耶蘇を邪宗門と示されたる處は折合難し今各國より天照皇太神宮を邪宗門と申したらんには日本人は憤怒致し申すべし是は實に容易ふらざる大事件と存す又大坂にては未だ此制札は掲げられぬが右も亦不審の至りあり

公之に應へていはく邪宗と申すは廣く色々よこしまの教を申したる事にて切支丹を指して申したるにあらず併しあから萬一各國人にては耶蘇を指して申すやう取られては案外の事に付き判然するやう改むべしと存するあり

バーカスいはく誠に殘念の儀あり耶蘇を譲るの意にあらずとても容易の御取計にては一字の事より交際も破太患も生すべしと存ぜらる此度如何改めらるべきや

公いはく切支丹は從來三百年近く制禁にて正邪を問はず今までの通りに禁じ置く事は各國より懇親を結ばるゝ上は譯ふく聞き申すべき事とも存せず公法の通りに之あるべし邪宗門は日本國中にも色々あり狐使ひ犬神使ひ其外俗人を惑し横道の説を唱へる者あるぶり西洋諸國にても萬一之あるに於ては右等を禁する主意にて候ふ素より耶蘇の事は更に不案内あり

バーカスいはく耶蘇の教を御存知あさらば必ず御感心あさるべしと存す

公いはく耶蘇にもあれ何にてもあれ人間の人間たる道を盡すが第一と存するあり

バーカスいはく實に然り實に然り

公いはく大阪神戸へ掲げざるは唯今申したる通り若し各國人民より見て主意間違ひあは宜しからずと心付き政府へ申し立てる者之あり評議申すれば改りたる上にて掲ぐる心得あり

バーカスいはく夫は誠に能き御心付きにて何卒邪の字を除かれまじくや何ぞ御考へは之あきや

公いはく自分より總裁へ申傳へ評議致すべし亦直に御應接ありて御話合も然るべし

バーカスいはく夫は悦んで談判申し上ぐべき最大事件に付明日にも御話致したく候

是にて公は袂を別たれしが委曲三條公に申し入れ尙ほ豫め打合す必要あれば後藤木戸に今夜參會するやう命せられたるが公の苦心空しからずして此談判は無事に結落したり

閏四月五日本藩世子護久の請暇を許可し給ふ

〔若殿様左京亮様御下坂中御記録〕

明治元年

五一一

閏四月五日陰

一辨事局より御呼出ニ付青地源右衛門罷出候處左之通御書付一通御渡

細川右京大夫

歸國御暇願之儀國情不得已次第尤之儀ニ候間願之通百日之間御暇被下尙國政變革之上登京可有之被 仰出候事

閏四月

一右ニ付御禮被 仰上候様との事ニ候處御風氣ニ付御名代有吉清助被差出候右ニ付而之口上手扣左之通

右京大夫儀願之通百日之間御暇被下尙國政變革之上登京可有之被 仰出候事

以御禮申上候

細川右京大夫使者

有吉清助

閏四月五日本藩末家細川行眞藩世子護久の名代となりて還幸に供奉することを許可せらる

〔若殿様左京亮様御下坂中御記錄〕

辨事御役所ニ

末家細川豊前守儀 還幸之節右京大夫爲名代供奉願之通被 仰出難有仕合奉存候此段御請申上候以上

細川右京大夫内

閏四月五日

閏四月五日城州淀藩主稻葉正邦の謹慎を解除し羽州庄内藩主酒井忠篤下總結城藩主水野勝知の官位を止め入京を禁ぜらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(閏四月六日彦根藩より昨日太政官代にて非藏人松室甲斐の渡したものとて廻達せる文書の内なり)

稻葉美濃守

謹慎被免候事

閏四月

酒井左衛門尉

被止官位家來ニ至迄入京被差止候事

閏四月五日

水野日向守

閏四月五日在江戸本藩副奉行淺井新九郎舊幕歩兵隊五百人を我藩に採用する事及び軍用金の件等在京重臣に照會す

〔王政復古帳〕

一翰拜呈仕候向暑之砌ニ御座候處東西御兩殿様上々様益御機嫌能被遊御座奉恐悅候將各様愈御安全被成御勤務珍重奉存候此許清水方一手白石手無別條次ニ私儀無異狀碌々相勉申候付乍憚御休意被成下候様奉希候然者此節堀田慎之允安田源之允被差立堀田者此許時軒爲探索被差越候由ニ付時軒申合爲言上被差立候安田者先日來於爰許御預之歩兵九段坂に屯集いたし人數五百人餘佛式傳習之者ゝ而當時次第ニ折合御國を奉慕候由五百餘人御抱ニ相成候様清水方より相談ニ候得共利害得失之分も篤斗研窮仕候得者根元御承知之通私儀者不案内ニ而御座候へ共追々郷士御倡ニ相成候末如何未

明治元年

五一三

御扶持等も御手附兼候ニ右歩兵御抱ニ申儀何程ニ御座候哉且延武場見込も於此許承候處不同意ニ有之候得共清方始段々見込も有之候由ニ而御抱ニ相成候様との儀ニ付勿論於此許決議可仕様無御座候付爲同安田源之尤被差越於御許篤斗御談議ニ相成候様奉頼候萬々一御抱ニ相成候ハ、私儀者一切見込無之萬事步兵御抱之儀者他人見込御座候面々に被仰付候様御參談被成下候様奉願候且又御抱ニ御決議ニ相成候ハ、歩兵賄之御手當一切無之候付別途御手當ニ相成夫々御役人等被差候様奉存候

一此許御手當之御銀御承知之通百日之見込ニ而貳萬五千兩持越候處近來不時之御出方多有之候得共朝廷より御賄ニ付漸右御手當金ニ而百日丈拂底ニ者相成不申見込ニ御座候併百日過候ハ、逆も御不足ニ相成可申出張之節御同僚并御勘定頭に委細申談候通半高一萬七千五百兩八十日過候得者仕贈ニ相成候様御參談被成下候様奉頼候

一此許陣拂之節ニ至候へ者一統貯金拂底迷惑之由ニ御座候追々御心附等も有之候得共引揚ニ成候ハ、逆も只今分ニ而者被行不申白石手御見合を以片途一式之割ヲ以被渡下候外無御座候見込ニ御座候右兩條者御勘定ヲ委細申越候管ニ御座候

一先便ニ得御意候通兩總下野邊之賊追々戰爭有之字都官壬生等も一旦者落城賊之手ニ相成候處追々取返し賊者何方に引揚候哉相分不申奥之様ニも引取申候様ニ相聞申候去ル二日千住宿之南手市川宿ニ而藤堂家人數八幡ニ備前行徳に筑前舟橋に佐土原賊俄ニ襲來ニ而戰争有之候處二日晝迄ニ而終り賊何方に引取候哉相分不申右ニ付江戸内之官軍大方押出守衛之人數も少く已ニ昨夜も所々發炮いたし何者仕方とも相分不申不審ある事ニ御座候都下之折合寸斗付兼候勢ニ御座候西郷吉之助登京仕候御處置伺之様子ニ承リ如何相成可申哉懸念之至ニ御座候逆も領地百五十以上相續者田安どのに被仰付江都在城又者移封之處於御許何程御決議ニ相成候哉奉存候時躰之儀者堀田恒之尤安田源之尤兩人ヲ委細被成御承知被下候様奉願候餘者後便ニ議置申候以上

閏四月五日

淺井新九郎

京都詣
御奉行申様

〔安田家明治元年關東征伐事件覺書〕

閏四月五日 三番丁歩兵去就情願ノ次第ヲ書面ニシテ各隊各自ヨリ差出サシム右歩兵ノ内ヲ精撰シテ本藩へ抱置キ軍隊ニ追テ編成シ可然トノ議元帥清水奉行淺井兩氏ヲ初要路ノ役員談合相整ヒ此件伺定メノ爲メ京都壬生邸へ急行ノ命アリ

全六日 上京ノ道ニ就ケリ晝夜兼行

〔王政復古帳〕

口上之覺

一當隊去月十一日 朝廷に被差上候趣ニ付而之太守様ニ御預ケニ相成然處外侯と述ひ格別御手厚御配慮被成下一同案心仕難有謹慎仕罷在候

一別段之御配慮を以壹ヶ年金三兩御加増被仰付一同難有奉存上候

一當隊兵士壹人別存寄等無服職申上候様以櫛屋彦右衛門被仰聞小頭共一同奉承知候然處許々兵隊ト申者ハ諸國之人物且身元有之者又之百姓町人之類も有之候ニ付而ハ種々了簡方等有之可申哉尤是迄徳川家之舊仕置之儀

明治元年

五一五

御給金壹ヶ年拾貳兩手取月々日當として七日目充御渡相成外ニ盆募金三分ツ、右等之始末全日雇之御仕法ニ可有之哉ニ奉存候右ハ兵士之者共兎角心得違之者多く脱走いたし候人物有之ニ付自然右様之御取扱成行候哉ニ奉存候此度當太守様ニ而御扶助被成下置候上之二心無之一同不淺難有奉存候乍併兵隊之人氣兎角我儘成者澤山有之唯強氣而已ニ御座候右御扶助被成下置候ハ銘々一身案心ハ勿論自然妻子養ひ候様御手當被成下候ハ一家を起し候事故一同慎而御奉公大切ニ相勤可申ハ當然之事ニ御座候此段得て思召被分御仁慈之御沙

汰被成下候ハ、莫太之御めくミテ奉仰候左之通廉々

重 太 郎印

一御給米

七番小隊 小

但壹人ニ付

六印

一御扶持方

八番小隊 助 七 郎印

右同斷

豫備隊 勝 次郎代 吉印

一帶刀

勝 次郎代 吉印

一四季着服

勝 次郎代 吉印

右前書之條々得モ御評議之程奉願上候以上

勝 次郎代 吉印

一久

勝 次郎代 吉印

一貳番小隊

勝 次郎代 吉印

一三番小隊

勝 次郎代 吉印

一秀 次 郎印

勝 次郎代 吉印

一四番小隊

勝 次郎代 吉印

一藤

勝 次郎代 吉印

一五番小隊

勝 次郎代 吉印

一鹿 次 郎印

勝 次郎代 吉印

一六番小隊

勝 次郎代 吉印

右奉申上候通相達無御座候以上
請負人 堺屋喜右衛門印

肥後 御役人中様

(編者曰、本書日付なけれども前編關東征伐事件譽書に三番丁
歩兵去就情願ノ次第ヲ書面ニシテ簽出サシムとあるもの蓋し
此書ならん依りて此に附載す)

閏四月五日箱館裁判所副總督清水谷公考總督に昇任す

(防長回天史第六編上)

(箱館府ノ設置圖未抄略)

閏四月五日箱館裁判所副總督清水谷公考ヲ以テ總督ト爲シ内國事務局權判事井上石見長秋○薩
摩藩士 参與兼内國事務局判

事ト爲シ箱館在留故ノ如シ云々

閏四月六日本藩世子護久行在所に出頭す時に歸藩後速に庶政を改め藩屏の任務を全くすへしとの勅諭を下さる

(若殿様左京亮様御滞坂中日記)

若殿様今六日爲御暇乞行在所に被遊御出候處於御前御渡之御書

先達來上京精勤之段御満足被思召候猶歸國之上之斷然舊弊を一新して賢材を舉小人を退文武之道大ニ相興し兼而被仰聞候御恩之趣貫徹候様益勵精藩屏之任を盡し候様可致事

(若殿様左京亮様御下坂中御記錄)

閏四月六日晴

一若殿様御風氣今以暖と不被爲在候得共明日御發駕ニ付四半時之御供拂ニ而行在所に御參天機被遊御伺口時被遊
御歸座候事

四月七日天皇大坂行在所を發して京都へ還幸し給ふ
(若殿様左京亮様御滞坂中日記)

閏四月七日

一主上行在所

御出輦八軒屋カ

御乗船淀城

御一泊翌八日同所

閏四月七日明八日大坂より還幸につき本藩に院參町西院參町の兩口を警衛すべく命せらる

〔王政日新錄〕(熊本縣廳所藏)

御用之儀候間唯今早々太政官代に出頭可有之候也

閏四月七日

細川越中守殿

留守居中

今日太政官代辨事カ御呼出ニ付罷出候處明八日 還幸ニ付院參町西院參町兩口警衛被仰付段非藏人松室甲斐を以御口達ニ相成尤行列御奉行手付より 御通行刻限相答候上人留いたし候様との事ニ御座候此段相達申候以上

閏四月七日

御奉行衆中

但御書方カも上濟

閏四月七日尾州藩成瀬隼人正竹腰龍若紀州藩安藤飛彈守水野大炊頭水戸藩中山備中守長州藩吉川監物等藩屏に列せられたる旨示達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣、王政復古帳〕

(閏四月七日彦根藩留守居より我藩外六藩へ回達)

成瀬隼人
正竹腰龍若
吉川中安藤飛
山野大炊頭
山備中守
中物守
小笠原一學

閏四月

朝政御一新ニ付右之面々先達而藩屏之列ニ被爲加候間此段爲心得申達候事

閏四月六日

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

若殿様御國許カ之御暇御願之通被仰出候付明七日被遊御發駕等御座候此段可得貴慮旨被仰付如是御座候以上

閏四月七日

細川豊前守様

一若殿様会御機縫能今七日朝六半時之御供拂ニ而御立御茶屋前よりはし舟ニ被爲召夫より萬里丸に御乗船被遊御航海候

明治元年

御出輦城南離宮
御晝東本願寺東殿
御小休
還幸之事

閏四月七日在坂本藩重臣は關東出張中の我藩兵を引揚けんが爲め財津民助を東下せしむるを否
とし之を引留むへしとの意在京重臣に通牒す

〔若殿様左京亮様御滞坂中日記〕

態と三時限の届差立申達候關東出張御人數之儀彼地之模様應御引揚之都合ニ相運候様有之度との趣財津民助に至密御
含被差立管之由岡松辰吾より申出之趣致承知勿論淺井新九郎杯咄合現實之都合次第ニ御手を可被着事とは被考候得共
徳川家寛典之御處置之夫々御運ひ茂付候交ヒ萬一官軍之士氣を挽ミ候様ニ茂相成候ハシ打を以引返之儀至急ニ御取計
左京亮様御聽ニ茂相達候處民助東下之儀之一刻も被差止候様若出立跡ニも相成候ハシ打を以引返之儀至急ニ御取計
有之候様可申達旨御沙汰ニ相成候條右之趣孤雲殿に茂被仰達早々其御達ニ可被及と存候右付而委細之儀之辰吾に申含
今日差返申管ニ候得共先右之趣申達候事ニ御座候以上

閏四月七日

田中八郎兵衛殿

尙々左京亮様に茂來ル十日晚より淀川御乗舟ニ而直ニ御登京之管ニ御座候間此段も爲御承知卒度得御意置申候以上

〔王政復古帳、京都并江戸返達御用狀扣〕

今八日御凱陣ニ付明九日ヨリ萬端尋常ニ復候就而者九門内乘馬可爲停止之事
但鞍置奉入之儀不苦候事

後四月

右御書寺町御番之御物頭へ御渡ニ而別段筋々御達ハ無之段御口達有之候由之事
閏四月八日本藩末家細川行典藩世子護久に代り還幸に供奉して京都に至る且つ大坂にて本藩よ
り護衛銃隊を借用せしを謝す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

一左之御方より今度若殿様御名代 還幸供奉ニ而今八日無滞御京着之段且於大坂銃隊御借受ニ相成候御禮旁使者を以被
申上候

以上

閏四月四日

村上彈助殿

細川 豊前守殿
林 新九郎

池永一平

右者今度 還幸之節若殿様御名代として細川豊前守殿供奉被仰付銃隊教導之場ニ而被差添候條此段可被達候以上
閏四月六日

鈴木傳太郎
西山綱之進
磯野今彦

右者今度 還幸之節若殿様御名代として細川豊前守殿供奉被仰付銃隊教導之場ニ而被差添候條此段可被達候以上
閏四月六日

明治元年

彦儀ハ分隊司令士之場ニ而被差添候條此段可被達候以上

閏四月六日

御小姓頭衆申

閏四月九日還幸につき在國在邑の諸侯は十日十一日の内に重臣をして天機を伺はしむへき旨を命ぜらる。

〔王政復古帳〕

閏四月九日辨事御役所御渡之御書付寫

御機嫌能還幸ニ付在國在邑之諸侯ハ十日十一日之内重臣を以太政官代辨事傳達所ニおろて可伺 天氣候事但假建ニおろて不取敢伺相濟候向之最早申上ニ不及候事

閏四月

閏四月九日長岡護美軍防事務局補に任せられたる身の一地方の浪賊追討に出征せしめらるゝを否とし第二軍副總督には公卿中より選任せらるへしとの意を建議す

〔若殿様左京亮様御浦坂中日記〕

閏四月九日

左京亮様關東御進發被爲仰付候付而思召之旨御建白御同方様御持參御差出被成候會津其外殘黨之もの益逞野心所々致亂行候間私儀第二軍副總督被仰付旨奉得其意候右者如何様之御趣意ニ候哉今度軍防局を被建候ハ神州全體之陸軍海軍を司り一刻も萬國壓倒之御國體相立候様大根軸を取堅候儀專要之職掌ニ付會議浪賊之混雜位ニ軍防局より被差出候譯之有之間敷矢張是迄之通官家之總督ニ參謀被差添是より列藩之人數指揮有之

候方朝威之厚及著敷却而都合可宜奉存候尤右之混雜必多物致蔓延 御親征を茂被爲在候程之時ニ立至候ハ勿論奉願候面も出張いたし涯分之御奉公相勤可申候得とも土臺之御軍政ハまた目鼻も付不申就而之當職被仰付候已來晝夜心魂を碎候折柄此儘御請申上候而ハ何分不安意ニ付今一應御評議有御座度奉存候事

閏四月

閏四月十日長岡護美大坂を發して京都に至る

〔一新錄皇令〕

辨事御役所ニ

私儀昨十日曉大坂表發足同日夕致京着候此段御居仕候以上

長岡左京亮

閏四月十一日

閏四月十日本藩は舊幕旗下三淵鍵之助に寛恕の恩命降下あらむことを京都留守居役をして請願せしむ

〔京都并江戸返達御用狀扣、王政復古帳〕

閏四月廿一日

一御留守居中村上より五月三日着

三淵鍵殿助様御使者兩人此節上京御陣屋に罷出此度關東之御模様ニ付御當代健之助様御事直ニ江府表御出立早々王事ニ被盡御誠忠度思召ニ候得共當春中より御病氣ニ而其儀御居兼被成候付御隱居鍵殿助様御退隱之御身ニ之候得共右御病氣御快復を御待被成御傍觀候及御不本意ニ付直ニ江戸表御發足御舊知濃州江州等之内に御座候由候處濃州旗本領等者尾州家に御取締被仰付置候付直ニ尾州表に御越其筋に御歎願ニ相成候處先御舊知之内御引取御再命御座候迄

御謹慎ニ相成居候様其筋より御沙汰之由依之御本領御安堵等之事此方様より被仰立被下候様との儀御家老中迄御狀を以御申入有之且御役々に茂御使者より頻りニ申出候間段々申談岩倉様に新九郎罷出拜謁相願御由緒之譯を以御内顧ニおよひ候處委細被成御聞通旗本方御取扱之儀大概御目途も相立居候由ニ而本領安堵の方ニ可相成其内書付差出候様被仰聞候付書面取調御家老代にも入披見尾州家にも罷出其筋に面話仕彼方より茂申立有之度趣を以書面入披見候上去十日辨事御役所に差出申候處御落手ニ相成申候右寫一通差上申候(略)

辨事御役所

三淵健之助儀當時迄者徳川家旗下ニ屬居候處今般 御一新被 仰出候付而者御趣意柄深奉感戴乍微力疾々 王事ニ盡誠忠可奉報 皇恩之處當春中より病氣罷在其儀居兼候付養父縫殿助儀病氣ニ而退隱仕居候得共此程追々快氣仕候付鍵之助病氣快復を相待座視仕候御時節柄共不奉存退隱之身ニ者御座候得共舊發仕不取敢江戸表發足仕舊知濃州江州等之内ニ御座候間直ニ尾州表に罷出其筋に歎願仕候處先舊知行所之内に引取 御再命御座候迄謹慎可罷在旨被仰渡候付濃州安八郡今箇淵村に引取彌以謹慎罷在伏而奉侍後 命候就而者此上何分 御寛大之奉蒙 御沙汰候様との儀家僕を以此節越中守迄頻歎願申出候惣體三淵家之儀者越中守先祖重縁之由緒御座候付代々別而親敷申通し當縫殿助儀者生得實體成者ニ御座候得者 朝命遵奉之誠意聊相違之儀も無御座且者徳川家譜代之家筋ニ無御座祖先者足利氏に勤仕同氏之國難ニ殉其後子孫衰微沈落仕途ニ徳川之旗下ニ屬健之助迄連錦いたし來候譯ニ御座候間何卒御寛仁之 御沙汰下賜候ハ、縫殿助身ニ取候而者不朽之 朝恩如何計難有仕合ニ可奉存越中守ニおるても同様之次第ニ御座候尤右付而者尾州表より申立候趣茂可有御座奉存候得共此段御内意奉願候様申付越候以上

細川越中守内

林 新九郎

閏四月十日

閏四月十一日關東監察使三條實美等守徳川慶喜處分及び人民綏撫の任を拜し京都を發して江戸に

(三條實美公年譜)

閏四月十日三條實美關東大監察使ヲ兼ネ翌日京師ヲ發ス十七日海路大坂ヲ發シ江戸ニ赴ク廿四日江戸城ニ入ル

(京都井江戸返達御用狀扣)

以廻章致啓上候然ニ今十二日御呼出ニ而太政官代に罷出候處別紙御書付四通非藏人を以御渡ニ相成尤御觸頭方々様に不及通達旨も被相達候付別寫を以及御廻達申候早々御順達留方河原町三條下ル彦根邸留守居方に御戻し可被成候以上

彦根中將内

佐 成 源 五 兵 衛
横 内 平 右 衛 門
田 部 金 藏

閏四月十二日

御次第不同
肥後様 松代様 土州様 伊州様
加州様 長州様 秋田様

右御留守居中様

三 條 大 納 言

今度徳川慶喜降伏謝罪奉仰 天裁候付以至仁之 御慮寬典之御處置被 仰出候間速ニ東下億兆人心安堵候様取計可致
物而御委任候且可爲關東監察使之旨 御沙汰候事

右(後)四月

萬 里 小 路 辨

明 治 元 年

今度爲關東監察使三條大納言被差下候間爲附屬東下被 仰付候事

閏四月
右一通

松	尾	伯	馬	香
中	川	對		
新	田	三	郎	
江	藤	平	八	
小	笠	原	唯	

三條大納言爲關東監察使下向被 仰出候間附屬被 仰付候事

右一通
後四月

〔防長回天史第六編上〕

(明治元年夏期ノ大勢及毛利氏の内)

十日(閏四)太政官代ニ於テ朝議アリ三條大納言ヲ以テ關東大監察使ト爲シテ東下ヲ命シ萬里小路辨通房ヲ之ニ副トシ
軍防局判事大村益次郎亦條卿ト前後シテ江戸ニ赴ク(大監察使一行ハ十一日京都ヲ發シ暫ク大坂ニ留マ
大監察使一行ハ十一日京都ヲ發シ暫ク大坂ニ留マ
十七日ヨリ乗船二十四日江戸城ニ入ル(下略))

閏四月十一日我藩砲隊長安田源之丞舊幕歩兵採用の使命を帶び去る六日江戸を發し本日京都壬生の藩邸に着し直に意見を重臣に陳す

(安田家 明治元年關東征伐事件覺書)

〔記録〕
閏四月十一日 壬生邸ニ着直ニ役所ニ出頭シテ田中八郎兵衛木村得太郎本間治兵衛ノ三奉行同座ニテ面接歩兵ノ内御抱ノ件至急ヲ要スル旨陳述シテ退出ス松原通西尾屋ニ下宿ヲ付セラル

四月十一日奥羽列藩の重臣等白石に會盟し會津の寛典を請ふの議を決し翌十二日仙臺米澤ニ二藩主岩沼に至り歎願書を九條鎮撫總督に呈し其の採納を要請す

(「新錄探索報告」)

奥羽列藩也
盟約書

此度於白石奥羽列藩會議以公平正大之道同心協力尊奉 朝廷鎮撫生靈以欲維持 皇國仍盟約如左

一恃強凌弱或傍觀他之危急者於有之舉列藩可加譴責事
一構私營利漏洩機會離間同盟者於有之可加譴責事
一妄勞人馬不顧細民之艱苦者於有之右同斷
一大事件者列藩盡衆議可歸公平軍事ノ機會細微之節ニ至テハ不及衆議可從大國之號令事
一殺無辜掠奪金錢之類都而侵名分者於有之速ニ可處嚴刑事以上

(「防長回天史第六編上」)

(奥羽鎮撫使ト奥羽同盟抄略)

此時ニ方リ仙米會三藩ノ陰謀ハ更ニ其歩ヲ進メ奥羽列藩糾合ノ秘密契約ヲ結ヒ閏四月四日仙米ニ二藩老臣ノ名ヲ以テ檄ヲ奥羽大小二十七藩ニ飛ハセ白石ニ來會ヲ促シタリ(中略)
十一二日ニ至リ奥羽二十七藩過半ノ老臣ハ白石ニ集ル十一日米澤藩主上杉齊憲大兵ヲ率キテ白石ニ至リ藩主伊達慶邦ト會見シ會津降服案件ノ處理ヲ議ス而シテ仙米ニ二藩ハ會津老臣ノ歎願書仙米ニ二藩主ノ添願書ヲ併セテ明日ニ二藩主躬親ヲ岩沼ニ至り九條總督ニ上ラントシ又別ニ奥羽列藩老臣連署ノ歎願書ヲ作り仙米ニ二藩ノ老臣等ヨリ既ニ來會セル列藩

ニ謀リテ各自連名セシメタリ(中略)

九條總督ハ十一日ヲ以テ白河ニ向ヒ出發(岩沼)ノ豫定ナリシモ仙米兩藩主登營ノ事ヲ以テ發途猶豫ヲ懇請セラレタリ
十二日仙米二藩主各其老臣數人ヲ從ヘ仙藩二人米著一人ト鹽相前後シテ岩沼ニ赴キ會津老臣ノ歎願ト二藩主ノ添願書列
藩老臣ノ副願書ヲ呈シ其採用ヲ要請ス總督ハ所謂會津歎願書ノ其體ヲ具ヘサルノミナラス絶テ開城ニ言及ナキヲ以テ
之ヲ詰リ一旦之ヲ返却セシモ二藩主及ヒ但木等強縛已マス只管採納ヲ強ヒシ爲メ遂ニ止ムヲ得ス四五日ヲ期シ指示ス
ル所アルヘシトテ一旦之ヲ領收シタリ(下略)

閏四月十二日下總結城藩主水野勝知の官位を停め且つ其家臣と共に入京を禁する旨を達せらる
〔京都并江戸返達御用狀扣、王政復古帳〕

(閏四月十二日太政官代にて非藏人より渡したるを貢根藩より廻達せる書付四通の内、他の三通は昨十一日の條に掲げたり)

被止官位并日向守附家來入京被差止候事
但同姓禊之助始メ在邑家來歸順之者共不及其儀候事

後四月

閏四月十二日本藩世子護久熊本に歸着す

〔京都江戸狀扣〕

以手紙申達候(中略)若殿様益御機嫌能去ル十一日朝四時分小島沖御着船直ニ御上陸同所御一宿翌十二日朝五時之御供
擔ニ而同所御發駕四半時分熊本被遊御着奉恐悅候(下略)

閏四月十五日

水

野

日

向

守

連

名

物

連

名

満　日　孤　雲　殿

田　中　八　郎　兵　衛　殿

閏四月十二日本藩世子護久内外の政務悉く委任を受けたる旨を布達す
〔安津免久佐〕

口上書

思召之旨被爲在於御内場者地旅共御政事向據而若殿様に被遊御委任旨被仰進置候處御受被仰上候此段觸之面々に茂相
觸可申旨御用番被申聞候條被奉承知觸支配方有之面々者可被相觸候以上

御　奉　行　中

閏四月十二日

閏四月十三日宮堂上諸侯參内の節の從者及び服装の制を定めらる
〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(閏四月十三日彦根藩留守居より我藩外六藩留守居へ廻達書付)

宮堂上諸大名參　内之節唐門外おるて供人數可減少候侍四人下部四人之外召連間敷事

但追而供連人數規則可被立候得共去ル十日胡亂之者車寄邊徘徊有之彼是混雜也有之候間先當分如本文可心得事

一還幸之上　參内之節ハ可爲衣冠被仰出候得共三職之輩火急之御用有之節者官家狩衣直垂諸侯羽織袴之儘參入被免候事

九門内乘馬之儀過日平日ニ被復候得共方今國家多事之時勢ニ付而者至急之御用等も有之候間三職之輩九門内乘馬當
分如是迄被許候間通行之節手札可差出事

右之通被仰出候事

閏四月

明治元年

四月十三日本藩主詔邦舊名世子護久舊名喜延改名につき藩内に同字同音の名を稱するものを改めしむ

〔安津免久佐〕

御上書

今度太守様御實名詔邦公若殿様御實名護久公ト御改被遊候ニ付名乗ニ右之文字并同唱之字付居候者ハ相改候様觸支配方ニ茂可被達候以上

閏四月十三日

奉行所

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

(閏四月十四日彦根藩留守居より我藩外六藩留守居へ廻達書付)

諸侯參朝御制度之儀者追而可被仰出候得共先頃 御親征 行幸 御出輦前 御誓約濟之向者一ト先御暇被下候處其後上京御留守中滯京還幸後 御誓約濟之面々ニ而茂同様永ク滯京いたし徒ニ疲弊徃々藩屏之任難堪様立至候而者不相濟段者勿論之事ニ付五十日餘滯京之向者追々 御暇被下候條歸國之上者 御誓約之 御趣意を奉體認速ニ家政向改正は勿論方今松平肥後等賊徒益暴威を募官軍に相抗候次第不謂事ニ而此後之形勢ニ依り恐多茂再び 御親征可被仰出儀茂可有之候哉全ク 皇國內 御鎮定ニ茂不立到事ニ付彌以不虞之備を嚴ニシ於國邑 御指揮可奉待旨被仰出候事

但兵隊差残し等總而先達而御布令同様可相心得事

閏四月

閏四月十四日貨幣の定價金銀銅錢の通用法を定めらる

〔王政復古帳〕

閏四月十四日大政官代に彦根衆御呼出御渡ニ相成候書付寫

太政御一新ニ付字内貨幣之定價御吟味之上古今通用金銀銅錢等別紙之通被仰出候間支配末々迄不漏様可相觸者也

慶應四年閏四月

太政官

金二百七十三匁〇六三

銀二百〇二匁九三七

此通貨六百三十五兩三朱換

金四百十三匁〇九六六

一享保金一分判 百兩目方四百七十六匁

金四百十九匁〇九六六

銀六十二匁九〇三四

此通貨九百三十兩一分二朱換

一古文字金一分判 百兩目方三百五十目

金二百三十目

銀百二十目

此通貨五百二十八兩二分二朱換

一眞字二分判百兩目方三百五十目

金二百十九匁〇七三

銀三十九匁二七

此通貨四百七十五兩二分換

一元祿金小判二分朱百兩目方四百七十六匁

内

明治元年